UNIVERSITY OF CALIFORNIA-LOS ANGELES
L 008 777 652 2

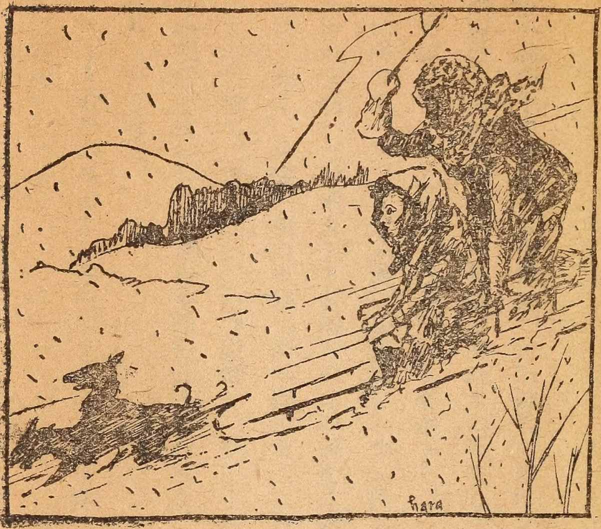
THE LIBRARY OF THE UNIVERSITY OF CALIFORNIA LOS ANGELES

Digitized by the Internet Archive
in 2015

https://archive.org/details/riranohanawasure00kiku

菊田一夫　著

リラの花忘れじ



松竹株式會社版

うであらうとも、それが全世界の人々の支持を受け得られなかつたのは當然のことである。

愚かにも「日本が勝つてくれるやうに」と、神に念じた私は、今おそまきながらしみじみとそれを國民の一人として反省してゐる。

そのやうに人間として未熟な日本人の集まりである我々の祖國が、若しこの戰ひに勝つてゐたら、果たして世の中はどうなつてゐただらうか。

日本はペルリ上陸の時代から出直せ、と外國のある人が言つた。事實領土的にもその頃と同じ狀態になつた。

明治の頃、我々の祖父或は曾祖父が、國內の、それも同じ國民の舊アイヌ族に加へた無禮や、道德的な罪惡をふりかへつて見る……勿論現在はすべてがうまく行つてゐることを信じてゐるが……、だが、まずその反省からはじめてみよう。

それが、此の貧しい小說の起點なのである……と、言ふ程、この小說はうまくは書けないにちがひない。何しろ私は素人小說家なのだ。芝居ならばもう少しうまく書けるかも知れないけれど。

日本人であることを誇る前に、まず人間としての完成を念願しよう。それが結局は我々の祖國を立派な國にする道である。

今更らしいこの言葉を、近頃の私は座右の銘としてゐる。

昭和二十二年二月

菊田一夫

目次

リラの花忘れじ

舞踏會の夜……二
本郷の下宿……六八
婚約を前に……八一
菊といふ女中……一一一
熊の出る里……一三三
初雪ふる……一四二
悲しき掟……一五五
移住地の女……一六六
純情一路……一八一
悲しき人……二一八
鐵道開通式……二四三

裝幀・中原淳一

リラの花忘れじ

2

舞踏會の夜

肌ざはりの滑らかな大理石の浴漕から溢れ出る湯氣が、モザイクの窓ガラスを透してさしこむ午後の陽ざしをうけて、七色の虹のやうにゆらめき、そしてゆらめいては消えてゆく。豪華な浴室。

「何んといふ厭な趣味なのだらう」

湯槽からただよふ湯氣のなかに、ほんのりと白い顔が浮んでゐる。標準よりはいささか高すぎるためにノーブルな印象が冷たくも感じられる鼻の兩わきにこつぶの汗を浮べ、何かしら焦らだつて宛もない敵に戰鬪的な視線を送る眼の睫毛がながい。顎まで湯にひたし、胸の兩つ(ふた)の隆起とその下の白い姿態のなだらかな曲線が物音ひとつしない浴室の透きとほる大きな鏡のなかにくつきりと青春のやるせない線を描いてゐる。

天井の壁にしがみついて身ぶるいをしてゐるいくつかの水滴。そのひとつが溫かい湯氣をもとめてポツン……と、鏡を破る。小さな破紋が大きく擴がり、白い姿態の靜止がゆらりとゆらめきそしてく

ずれる。
典子は溜息をついた。
大臣の屋敷にもこんな立派な風呂場はないぞと、自慢した父親韮崎傳右衞門の趣味の惡るさ。無言で片頬に冷笑を浮べてゐた母親淺子の意地の惡るさ。でも綺麗でいいわと、心にもない燥やぎようを見せてゐた典子自身の、その場ふさぎの割り切れの惡るさ。
浴室の問題を言つてゐるのではない。この小さな出來事ひとつにしてからが、韮崎家の家庭全體のやりきれない雰圍氣の縮圖なのだといふことを……。
……と、言ふ意味から言へば、今夜の舞踏會を機會に典子といふ一人の娘、彼女自身の結婚の對照が決められる。それはこのやりきれない空氣のなかから逃れ出るむしろ絕好の時期であるのかも知れないのだが。
典子は眼をとぢた。その瞼にかすかな涙がにじんでゐる。
淺子といふ現在の母親が嫁いで來る以前に、典子を殘してこの韮崎家を去つた實母の菊と實兄の俊政。仇敵のやうに父を呪ひ、典子を憎んでゐるといふ彼等。
これが世の中といふものなのか、何んといふやるせない、何んといふ腹立たしい、そしてやり場のない憤懣。

3

或は今夜の舞踏會が、典子の惱みや悲しみを救つてくれる一つの機會となるかも知れない。だが……。

誰が、……、一體誰がこの神にも誇りたい青春の姿態を奪ひ去るといふのか。愚劣で貪婪な野獸のやうな若い男等……、と言ふ典子の考へ方を知つて、社交界の若い紳士や淑女達が、あの成り上り者の高慢ちきな娘、と彼女を稱んでゐる。それを典子も知つてゐる。

どうすればいいのか、どうしろと言ふのか、誰が負けるものか、フン……。

典子が立ち上るのといつしよに浴槽のふちを越して湯がザーッとこぼれた。まるでその一個の肉體をもつてすべての悲しみや惱みにぶつつかつて行かうとでもするかのやうな荒々しさ。そして其處に立ち上つた淸純にして傲慢なその青春の姿態。

典子は湯槽を出て其處に膝をつき、舶來だぞと父傳右衞門が威張つてゐた白い乳色のシャボンを無雜作に肌へすりつけた。やがて乳色のシャボンの泡が典子の肉體を包んでしまつた。」

明治三十四年四月、春のある日の午後のことである。

その一月前の三月。北海道の冬の終り。

白銀色のにぶい微光を空に仰いで、函館の港内に一隻の移民船が慌ただしく石炭を積み込んでゐた。

灰色の冬の季節が綠の朝の夜明けとなるにはまだ日が遠かつたが、しかし明治政府の言ふ新天地開拓の機運に乘じての移民船の活躍は、もう既に半月も前から開始されてゐた。昨日は內地から運ばれて來た移民の集團が、函館の棧橋を黑々と埋め、今朝はその船が陸蒸氣のエネルギーの爲の石炭を內地へ持ちかへる。

內地の人間は北海道を知らない。だが、舊德川幕府の失業士族は、政府の言ふ新天地北海道に、彼等の誇り、彼等の足枷である士族の肩書にこだはらぬ自由の天地を夢み、其處に一旗あげる最後の機會を摑もうと焦せり、そして內地を食ひつめた商人はそれらの移民を相手に一旗を夢みる。

北海道舊土人保護法が發布されたのは一昨三十二年の三月二日のことだつた。それは北海道へ北海道へと雪崩れ込む內地人の生活力のたくましさに押されて、除々に原始林の中へ追ひつめられてゆくアイヌ族の嘆願に依り、新天地開拓の思ひもかけぬ副作用に驚き慌てた政府の窮餘の策だつた。だが、ひとたび堤を切つた流れはただ一片の勅令に依つてせき止める術もなく、今年も雪解けを待ち切れずに、移民船は生理作用の如くに函館の港、北海道の玄關口に內地人移民の集團を吐き出しては去

る。

函館の町の賑はひ。

その函館の旅館瓢屋の最上の客間で、物慣れた手付で出發の支度を調へてゐる一人の客があつた。宿帳には、北海道開發株式會社手代西村要助と彼の名が記してある。

「おそくなりまして申し譯ございません。お受取書でございます」

閉め切つた室内の煖氣を逃がすまいとするかのやうに手早やく障子をしめて、菊と呼ばれる五十餘りの年齡の女中がそこに手をついた。差し出された盆の上には宿泊料の領收書と、その上にのせたのし紙に包んだ藍の香も新らしい宿名入りの御手富貴。

「それに唯今は過分なお祝儀を頂戴いたしまして」

それには答へず

「ほう、瓢屋のお土産手拭もなかなか上等になつたねえ、此の前の時よりは大分ましぢやあないか」

氣さくに無遠慮にのし紙の封を切り、糊氣のきいた新らしい手拭をぱつと擴げての品定めの言葉は同時に、彼の前に畏まつて控えてゐる女中に對しての……俺はこの宿の常顧客なのだぞ……と言ふ、下司な優越感の誇示でもある。

「何んですか、東京へ注文しておきましたのが、つい先頃の船で着きましたのださうでございまして……」

「ほう、成程、東京製の手拭か、道理でねえ。いや、北海道も總てが斯うならなくてはいかん。東京の文明開化がこの北海道へもどしどし流れ込むやうにならんとねえ……」

と、たたんだ手拭を信玄袋の中へ納めながら「お菊さんは東京者かね、此の前泊まつた時には居なかつたやうだが……」

「はい、半年程前から此處へ勤めて居りますので、……どうぞ御ひいきに御願ひ申し上げます。こんなお婆さんでは張合ひもございますまいが」ホホホ……と、世慣れた調子で笑つて「札幌と東京を行つたり來たりではさぞお疲れでございませうねえ」

「うむ、疲れるねえ」

「でも、たまに東京へお行き遊ばして眼の御保養をなさいますのも」

「いや、札幌に居つた方がいい。こつちに居りやあ、社長が來ん限りはお山の大將だからなあ。東京へ行くとさうはいかん」

「社長樣と申すものはやはり煙つたいものでございませうか、ホホホ……」

「煙つたいどころの騒ぎぢやない。うちの御前樣と來たら頑固で慾張りで、まるで岩山に鐵のたが

でもはめたやうな人だ。お菊さんも名前だけぐらいは知つてゐるだらう。韮崎傳右衛門と言ふ人だ」

「まあ、あの韮崎といふ……。左樣でございますか」

女中は話の間に鐵瓶の湯を急須に注ぎ、出たての熱い茶をすゝめながら「お客樣方のお噂話にちよいちよいうかがつたことがございます。有名なお方ださうで……。そのお方が社長樣ではさだめしねえ」可笑しさうに笑つた。

西村は、氣さくでらいらくなお客樣だと言ふ、彼に對しての旅館の女中たちの定評を知つてゐる。それがまた彼にしてみれば得意な處でもある。此の函館の港にかつてなき殷賑を來たさしめた北海道開發株式會社といふ。內地からの移民招致に最大の功勞のある會社の一番手代、彼ほどの地位にありながらしかも尙かつ、彼ほどの氣さくでらいらくなお客樣が何處にあるか……。今も彼は、彼の主人韮崎傳右衛門の强慾を誇張しその下に仕へる者の辛らさを道化役化することにより、話相手の女中を笑はせた。彼も同時に聲を上げて笑つた。だが待てよ……。西村はお菊といふ女中の、彼の眼前に於ける笑ひ聲の中にふと寒々としたものを見つけた。彼の期待したものは、尊敬とお世辭のこもつた彼自身を滿足せしめる類ひの笑ひである。所が、今彼の眼の前にあるのは、はつきりとは判らない。しかし、何處かに憎惡と輕蔑らしいもののふくまれた、期待したものとは反對の笑ひ聲。

西村は急に口をつぐんで不機嫌に茶を啜つた。

――厭な女だ。

だが西村は、その厭な女である年老いた女中の名が、彼が韮崎傳右衞門の手代となる以前すでに韮崎家から離緣されたと聞いてゐる先妻菊の名と同じであることに未だに氣づいてはゐなかつた。と言ふよりも、この函館といふ新開地の旅館の老女中の名前から彼の主人韮崎の先妻にしてあの美くしい典子といふ令孃の母親である菊といふ名の女を聯想するのは無理だ。と言ふのが正確な記述の方法であるのかも知れない。

やがて、菊といふ女中が西村の信玄袋その他を階下の帳場まで運んで引き下つたのと入れちがひに此の宿の主人が揉手をしながら入つて來た。

「唯今はどうも御丁寧な御心付を頂戴いたしまして……」

四角ばつて兩手をついたその姿には答へず、西村はチョツキのポケツトから銀鎖のついた懷中時計を出して、

「時間は合つてるかなあ、私の時計は八時十分だが……」

「左樣でございます」と、主人は自分のそれと照らし合はせて「きつちりでございます。まだ出帆までには五十分ばかりございますからどうぞ御ゆつくり遊ばしまして……、お荷物は先に船の方へお運びするやうに申し付けておきましてございますから……」

「歸り船だから空いてるだらう……」

「左樣でございます。昨日の棧橋の混雜と來たら大變なものでございましたが、內地行はそれに引きかへまして……」

「儲かりすぎて仕樣がないだらう、斯う內地からの客が多くては……」

「おかげ樣で……、全くもう開發會社のおかげだと、いつも同業者の連中と話し合つてゐる次第でございます」

「開發會社は他にもあるからなあ、うちの會社のおかげばかりとは言へまいが……」

得意な笑ひ聲だつた。

さつき女中に言ひつけて、寒くても構はぬからと開け擴げさせた窓の下には、函館の町の賑はひが、東京からの文明開化の匂ひと北邊蝦夷の地のアイヌ族の風習とを混亂させて、薄汚れたシャランぺを着たアイヌ族の波止場人足を押し合けて走る二頭立乘合馬車の雜沓の街と化してゐた。官員服を着た八字髯の横を赤毛布を着た移民が急ぎ、その路傍に仕事にあぶれたアイヌ族が北邊の哀調を歌つてゐる。

「ああ、いい時候になつた。北海道の雪解けももう直ぐだなあ」

「左樣でございます」

と、主人は心易立てに西村から煙草の火を貰ひ「今度の御上京は　」

やはりお仕事の事でと聞けば

「うむ、鐵道が敷けるのだよ、もう一つ會社が出來てね、やはり韮崎の御前樣のお仕事なのだが」

主人は女中と異なり商賣上手に合槌をうち

「ほう……、と、申しますと、韮崎の御前樣は今度は鐵道の方にも手をお出してなつて……」

「うちの親爺は儲けるのが好きだからねえ」

「いえどういたしまして……、北海道の開拓はあなた、政府の大臣樣方も是非ともやれと仰有つて居られる御事業でございます、御前樣の御事業のおかげで斯うしてこの函館の町も賑はつて參つたのでございますから……。唯もうお儲け遊ばすだけなら他にいくらでも御事業はおありでございませうとも……」

その宿の主人の言葉に符節を合はせるが如く、西村の主人韮崎傳右衞門は彼自身の會社北海道開發を自らの砦として、東都に於いて北海道開拓の國策協力を呼號し、その急務を政府よりも先んじて推進する良心的な事業家であることを、自らが謳つてゐる。或はこの瓢屋の主人の言葉も彼自らの商賣の御利益から離れた純眞な讃嘆の言葉であるのかも知れない。だが、その良心的な事業家韮崎傳右衞門が、旭川事件に依つてあらゆる東都の新聞から攻擊をうけた人間であることは、山間僻地の人は知

らず、少なくとも東都の知識人ならば誰でも知つてゐることである。

昨三十三年四月二十五日付の某新聞の記事を此處に拾ひ上げて見よう。

東京富豪の飽くなき貪婪の魔手

アイヌ安住の地を捲き上げる

標題は斯う言つて讀者に訴へてゐる。そして……。

『北海道に於ける刻下の問題二あり、一は小樽港海面埋立の紛擾にして、一は石狩國上川郡近文土人給與地の奪略事件是れなり。海面の埋立、給與地の奪略、二者何れも澤田北海道廳長官が施政上の一大失態としてその責任を問ひ、更に醜文私曲の行爲として速かに處決する處なかるべからず、土人給與地奪略の不法命令の取消請願に關しては日來舊土人總代川上コヌサイ外三名出京し、主務省及び民間有志の間に立ちて專ら運動中なるが、今回事件の顚末を明かにして而して後、澤田長官が職權濫用の不法を質さんとす。

（中略）元來その土地は近文原野の南西端に在りて石狩川にのぞみ旭川市街に相對し、師團地に接したる處にして地味豐沃、以つて農業を盛んにすべく、以つて舊土人保護の道を立てしむるに足る。（中略）生存競走の極、漸次其種族の減少し來たれるアイヌ人の撫育の方法として、土地給與開墾奬勵の甚だ至當なりしを認む、土人始めて心を安んじ乃ち太平を謳歌するに至る。

近年に至り官設鐵道敷設せられ、十勝天鹽の兩線漸次開通して、旭川の市街俄かに繁榮を來たし、第七師團もまた移轉せられ、旭川近傍の地價大いに騰貴して將來有望の衝地となるに至れり、此に於てか東京の小倉喜八郎。韮崎傳右衞門等の貪婪飽なきの徒、同地方の探險を爲し、舊土人給與地即ち上川郡鷹栖村近傍一帶の土地の甚だ利すべきものあるを認め、市街建設の理由を以つて土人給與地の貸下運動に着手し、諸種の惡策を以つて漸やく其の目的を遂ぐ。本年二月十七日澤田長官、近文舊土人に對して發したる命令に曰く。

來る五月を期し鷹栖府を立ち退くべし。

と、同時に同月二十八日を以つて同長官より喜八郎。傳右衞門等の徒に對して、同地貸下許可の指令を與へたり。（中略）巧みに質朴の土人を欺きて移轉請願書に調印せしめ、僅々六千餘圓の金額を以つて土人の移轉費に供したり。

給與地の總面積四十五萬坪餘、此の價格約十餘萬圓に對し、斯る些少の金員を以つて、最も憐むべきアイヌ人が祖先以來住み慣れたる墳墓の地よりの放逐を企て、自家の懷ろを肥さんとの所爲は、亂暴狼籍殘忍酷薄……（中略）國民の與論に徴し、併せて監督官廳の參考に供せんと欲す』

つまり、陛下の思召に依る北海道舊土人保護法に依りアイヌ族に與へられた保護地を、小倉喜八郎韮崎傳右衞門の兩富豪が、澤田北海道廳長官と結托する事に依り、アイヌの手から奪略したのだと、

此の新聞は輿論に訴へてゐるのである。しかも、アイヌ族保護の勅令がその前年に發布されてゐるにも關はらず……。

社長韮崎傳右衛門がそれを行つたのか、或はその手代西村要助がこれを獨斷でやつたのか、それとも新天地開拓に際しての巨大な齒車の進行の、それは止むを得ぬ過程なのか、ともあれそれによつて北邊の地に平和な營なみをつづけてゐたアイヌ族の上に思ひもかけぬ悲劇がひき起されてゐることは眼を掩ふことの出來ぬ事實なのであつた。しかも、その悲劇を土臺石とすることによつて、東京の韮崎家の生活は築かれてゐる。或は此處に居る西村要助の生活も、そしてその上に、或は北海道へ黑潮の怒濤となつて流れ込んで內地人たちの生活も、それに依つて保證されてゐるのかも知れないのだつた。

「實はねえ、今日の船にアイヌの代表者共が乘つてゐるのだよ。アイヌ保護法と、去年の旭川事件で奴等はすつかり味をしめたものだからね」

西村は眉をしかめながら煙草をくゆらせて「どうして奴等には、鐵道が敷ければ自分達も便利になるのだと言ふ事が判らんのかねえ、困つたものだよ」

主人に言ひつけられてゐたと見えて、菊といふ女中が、これも東京からの渡來物である青柳の羊羹を菓子鉢に運んで來た。彼女は主人の背後でつつましく、だが西村の語る韮崎傳右衛門の噂にちらり

と耳を馳せながら濃い綠茶を入れてゐた。

「と申しますと、アイヌ共は韮崎の御前樣の鐵道會社に反對を唱へるとか何んとか……」

主人が菓子鉢をすすめて、斯うした商賣の人間によくある型で聞上手に話をすゝめて行くと、

「うむ、此の前の旭川事件では、アイヌ共の請願と新聞の瘠せ犬共の輿論とかのおかげでねえ、澤田長官は譴責處分を受けるし、韮崎の御前に小倉の御前は當分の間安心して表を歩けないやうな目に會つたのだが、氣の短い江戸ッ子共がうつかりすると投石するのでねえ、ハッハッハッ」西村は笑つて「しかし、そんな事に一々氣を使つてゐちやあ事業なんざあ出來ないからね、うちの御前、今度は札幌の奥の方に鐵道を敷く會社を起こしたのだ。何んと言つても開拓には鐵道が眞つ先だからな」

「左樣でございますとも……」

「所が何んと、地圖に豫定線を書きこんで、土地の拂ひ下げもうけてからだ……其の現地へ行つて見ると、其處には、他の土地から追はれて移住して來たばかりのアイヌの部落がある」

「おやおや……」

主人のその嘆聲には勿論、やがては韮崎の鐵のやうな意志に依つて、その土地を追い拂はれるであらうアイヌ族への哀れみのひびきがこもつてゐる。けれどそれは、我身の上に振りかかる危難に對してのそれではなく、むしろその言葉の意味するものは、何んといふ間拔けな、と言ふ滑稽感でしかな

かつた。

「その部落のアイヌ族といふのがだ、御ていねいな事にはね」と、西村は羊羹をつまみ茶をぐつと啜つて「去年の旭川で近文を追はれて移住した連中なのだよ。つまり近文を追はれやつと其處に落ついたと思つたら、また其處へ鐵道が敷かれるといふわけなのだよ」

西村は相手に與へた彼の話の効果を見定めると同時に破れるやうな聲で笑つた。

「成程ねえ」主人は流石に快よくは笑ひ切れない氣持で「全く御ていねいなアイヌ共で……、何んと言ひますか、手數のかかりすぎるとでも申しますか」と、しかし調子を合せて笑つた。

「此の前の事件で酷りてゐるし、今度は北海道廳の若い役人共までが、餘り非道すぎると、アイヌ連中に加勢してゐる始末なんでね、……今度は連中より先に東京へ着いて、新聞社などの要所要所には金を摑まして打つだけの手を打たにやならん、……どうも開拓も鐵道も儲かつていいには違ひないが、一番手代はなかなか忙がしいよ」と、もう一度、むしろ愉快氣に西村は笑つた。

事業家といふものの心理は判らない。けれど、韮崎傳右衛門のやうな人非人だからこそ金儲けの爲にはそんな酷薄無情な事をして、あの穩和なアイヌ人たちを苦しめるのだ。傳右衛門のやうな奴だからこそさうなのだ。どうして彼のやうな惡者が榮えるのか……と、宿の主人の背後で〝菊といふ年老いた女中は憎惡の視線をひそかに西村にそそいでゐた。だが、このやうな年老いた女中の感情なぞは

西村にとつては何んの關はり合ひもないことであり、瓢屋の主人にとれば彼女は使用人の一人にすぎない。彼女の不機嫌は何んの關心をひくこともなく、やがて主人が、

「そろそろお時間でございます」

と、彼の時計を出して出發をうながすと、

「では、歸りは四月に入つてからになるかも知れんよ」

と、西村は立ち上つて、無言でインバネスを着せかける老女中の前に背中を向けた。

棧橋まで菊を引き連れて西村を見送つた主人は「惡るい人ではないが、少し切れすぎるので朋輩衆にも受けが惡いさうだよ」と、歸る途で西村を批判した。

「やはり御主人が御主人だからでございませうか」老女中の笑ひには冷たい反抗のひびきがあつた。

瓢屋の主人は彼女が何者であるかを知らず、唯内地の方々の宿を渡り歩いて、次第に給金のいい新開地へ流れ落ちて來た女だとのみ知つてゐる。何處かにひがみつぽい處のある女だと思つた。

菊といふ女中、彼女は西村の主人韮崎傳右衞門のかつての妻だつた女である。

彼女はその夜おそく、彼女の任務を終へ女中部屋に下つてから、東京に居る彼女の長男に手紙を書いた。まだ大地の凍へついてゐる北海道の、三月の夜の冷たさは、卷紙を左手に持ち右手の筆をたゞ

たどしく運ぶ彼女の指を、窓の雨戸から洩れる一條の風となつてしばしばかじかませてはゐたが、彼女はともすれば筆も卷紙も投げ捨てて寢床へもぐり込みたくなる寒さに耐えて、年老いた肉體に微かに殘るあらゆる精力をかき立ててその手紙を書きつづけて行つた。

彼女を十數年前に古草履の如く棄て去つた韮崎傳右衞門への、永い年月の間一貫して變らぬ復讐の願望、唯一つのそれが、この年老いた女中にその努力を强いてゐるのであつた。

——俊政どの

前便で申したごとく、母がお前を大學にやり、その大學をそつぎようさせるために、斯んなに苦勞してながい間宿屋から宿屋を渡り流れて、少しでもたくさんお金をおくるようにしたのは、ただひとつあの憎い傳右衞門に仇をうちたいばかりになのだよ。

お前が大學をそつぎようして、えらい官員樣か、えらい實ぎようかになり、あのにくい傳右衞門にそれみたかと言つてくれるのをたのしみにしてゐたのだよ。

それだのにお前は、やつと大學をそつぎようしたかと思つたら、しんぶんきしやと言ふ商賣をやると言うて來た。しんぶんきしやとはどんな商賣か母は知らぬ。そんなものになつて、あのにくい傳右衞門に仇がうてるのか、

傳右衛門は十何年前に、自分がえらくなるのに都合がいいように、母やお前を捨ててその後、しし
やく家から今の淺子といふ出戻り女を嫁にもらうたのだよ。
お前はそのうらみを忘れたのか、母のお前を育てるための十何年の苦勞をわすれたのか、お前はど
うして官員樣か實ぎようかになつて、あのにくい傳右衛門に、それみたかと言ふてくれぬのか、
傳右衛門はこの北海道でもわるいことばかりして金もうけをしてゐる。今日も傳右衛門の手代がか
あいさうなアイヌをいぢめるために東京への船にのつて行つた。
アイヌのかなしい氣もちは母にもようわかる。
俊政どの、母の長い間のくるしみがわかつたら、必らず傳右衛門に仇をうつておくれ、官員樣か實
ぎようかになるといふ返事をして母を安心させておくれ

三月八日

母より

菊は韮崎傳右衛門が貧しい一介の鼻緒行商人であつた若い頃の彼の妻であつた。彼女も傳右衛門と
共に行商の荷を背負つて東京の町々を歩るいた。それに依つて得た小金で傳右衛門は寂びれた工場を
買ひ、學用品のズックの鞄を製造し、その餘暇に絹織問屋から安く買つたさまざまの彩どりの絹布で

船來物に似せたリボンを作つた。それが當つて次の工場を買ひ、ぐつと商賣手を擴げた頃に傳右衞門は彼の妻に嫌氣がさして來た。彼にはもはや彼と共に荷を背負つて歩るく共稼ぎの妻は不必要で、内助の妻こそがこの時期の彼には必要なのだつた。にも關はらず菊は鼻緒行商人の態度と言葉とをそのまゝに持ち越して彼の工場へ顏を出し、或は既に社長といふ肩書をつけた彼の會社の事務室に姿を現はす、そして時としては彼の事業に言葉をさしはさむ。

その頃、傳右衞門は彼の收益の一部を利用することによつて、窮境にあつた某といふ子爵家の財政の破綻をその一歩前で食ひとめてやつた事がある。勿論彼の事業に便宜を與へ得る要路へのとりなしが條件であつた。

彼は彼自身と性格の相等しい菊を離別して、その子爵家の娘淺子の再緣を迎へ入れた。そしてその後日淸戰役を機に、彼の相棒小倉喜八郎と共に、中央の財界にのし上つて來た。

菊は傳右衞門の許に五才の典子を殘し、十才になる俊政を引き取つた。彼女の手ひとつでは典子までは育てきれないのがその當時の典子を殘した理由であつた。だが彼女はその内にその當時の事情をも忘れて、母と行動を共にしない典子を、父傳右衞門と一緒くたにして罵しるやうになつた。

言つてみれば、唯の普通の世間の、ありきたりの離婚沙汰にすぎない彼女の運命を、男よりも强い菊の性格は、子爵の出戻り娘に見返へられた屈辱と解釋し、彼女の敎育の淺さが、彼女と傳右衞門の

子である俊政を復讐の選手に仕立て上げやうとする歪んだ道へ走つたのである。だが俊政は彼女の十幾年の長い願望である官員樣にもならず實業家にもならうとしなかつた。この春の……、北海道の季節で言へば春のあけがたの或る日に着いた俊政からのその手紙は、傳右衞門に棄てられた妻、菊といふ老いたる女中に耐えがたい失望と悲しみと、やり場のない憤懣とを與へたものだつた。

――十何年の苦勞は何んの爲だつたのか、やつと學校を卒業させてやつたと思つたに。

彼女はただ一人、女中部屋でその手紙を握りしめ、身を慄はせて俊政の名を罵しり、そして口惜しがつた。その姿は愚ろかしくもあり滑稽でもあり、しかしまた哀れでもあつた。

彼女は昨日札幌から着いた西村といふ客が、韮崎傳右衞門の最近の事業である北海道開發會社の手代である事を知つた。そして今は彼女の敵である韮崎の噂を憎惡の内に聞いた。

「畜生奴……そのアイヌ人が二度と世の中へ出られぬやうな恥をかかしてくれればいいのに……」

そして菊は、寒さにかじかむ手に息を吹きかけながら、俊政への再度の哀願の手紙を書いたのである。

3

津輕海峽の蒼黑い寒流の波濤に身もだへながら、内地の陸影にあこがれてひたすらに走りつづけ、

てゐる移民船。

その三等甲板の朔風のなかに立つて、內地の沿岸から出漁してゐる漁舟の行き交ふ姿を物珍らし氣に眺めてゐるアイヌ族の一群があつた。その五人の內の一人は可愛らしいつぶらな眼をしたメノコである。彼女は娘らしい恥じらひからか、他の若い男達から離れて、祭りの日以外には着たこともなかつたであらう美くしいシヤランベを潮風に惜し氣もなく濡らしてゐた。

昨日この船に彼等が乘り込んだ時、彼等の旅行に興味を持つた他の內地人の相客が、何處へ行くのだと聞くと、彼等の中で二人だけ內地語の判る上川サムロツオと彼の妹のマカリナが、東京へ行くのだと答へた。しかし彼等は東京は言ふに及ばず內地へ行くのもこれがはじめての旅行なのである。

——心細い。

しかし、種族の生きて行く權利を主張する爲に、そして內地人(シヤモ)の惡黨が北邊の地で多くの人の眼にかくれて何をしてゐるかを中央の人々に訴へる爲に、はやすべてをアイヌの神の定めた運命だと諦めてゐる老人達にかはつて、彼等は心細くともこの旅を成功への道に、種族の幸福への道につながなくてはならないのだつた。その責任を感じてか、一行の代表格である上川サムロツオの廣い白皙の額と情熱的な眼は、粗朴と純情の蔭からやり場のない悲しみを訴へかけてゐた。

春にはまだ間のある三月の寒風が、移民船のへさきで波のしぶきを白薔薇の花片のやうに吹き散ら

し、檣の繩梯子の端で口笛を吹いては洒落すぎる。

「よう……、ザムロツオぢやないか、おやおや他にも仲間が居るのか、おう、何んだマカリナまで居るのが」

一等甲板の上から聲をかけた男が居る。昨日から出帆以來夜毎に話しかける機會を狙つてゐた西村である。彼はこの船の中での邂逅を偶然らしく裝ほつた。西村にとつて都合のいいことには、シャランペを着た若者達は、西村要助を北海道開發會社の手代とのみ知つてゐて、その北海道開發と、今度の北海道開拓鐵道株式會社とが同じ人物に依つて經營されるものであることを知らなかつたのである。

「西村のニシパですか……、今日は……」

サムロツオは意外な邂逅にむしろなつかしげな聲をあげた。

「ニシパはよせよ、俺やまだ貴人と呼ばれる程の身分ぢやないからな。ハッハッハッ……」

西村は三等甲板への階段をゆつくり降りながら氣さくに笑つた。

「不思議な場所で會つたねえ。何處へ行くのだ？　青森かね……」

西村は白ばくれて聞いた。

「いゝえ、東京です」

「東京？　東京へ行くのか、ほほう……。道理で皆が綺麗なシヤランベを着てゐると思つたよ」

「西村のニシパ、今日は……」

マカリナが人なつくこく進み出て挨拶をした。

「相變らず、綺麗で可愛いくてやさしい娘さんだ、ハツハツハツ……」西村はマカリナの肩を愛撫するやうに輕るく叩いて。

「それで？　……皆揃つて東京へ何しに行くのだね、見物かね？」

氣輕なその言葉の底に陷穽があるとも知らず、サムロツオは正直に窮情を訴へた。未知の土地東京へ行く心細さが、惡人ではないかも知れないが決して善人ではない筈の西村にまで縋りつきたい氣持を起させるのだつた。サムロツオ達は去年の旭川事件に際して、北海道開發會社手代としての西村要助がどんな人間だつたかを知つてゐる。彼等の部落の者は酋長以下全部が、その爲に、何物にも替えがたい祖先墳墓の地を失なふ悲しみを味はつたのだ。だがしかし……と、サムロツオ達は考へるのだつた。

――この人は何かの都合で心にもなくあんな事をしたのだ。自分達だつて本意なくも他人と爭ふことがある。

サムロツオは部落の若者の中では、一番の物識りで、一番の利巧者だつた。そして最も正義漢で、

しかも部落の青年の中では娘たちの人氣の的となつてゐる男らしい美くしさのある容貌の持ち主だつた。しかし、未だ彼は他人に一度も騙された經驗がなかつた。

彼は西村の「東京へ何をしに行くのだね」といふ質問に對して斯う答へたのである。

「ニシパは覺えてゐらつしやいますね、去年私たちの旭川の部落（コタン）が、あなたの會社に追ひ拂はれたのを……」

「おう、覺えてゐるとも」西村はらいらくな言ひ方でさも恐縮したらしいしぐさをして「いやあ……、あの時は君達の抗議（チャランケ）をうけて、この西村要助大分參つたからなあ……、しかし、あの時は、俺は君達の爲に會社からうんと澤山の償金（アシンペ）を取つてやつたんだぜ」

「さうでせうか、六千圓といふ金を貰つて、我々の部落（コタン）の者は喜こんで山の奧へ移住しました。所が後で內地人（シャモ）の噂話を聞いたら、六千圓といふ金は氣ちがひみたいに安い値段だ、あのアイヌ共は馬鹿だと……」

「何を言ふ……、そんな事はない、馬鹿を言ふてはいかん」西村は態と荒々しい聲で「誰がそんな事を言ふのだ。恐らくそりやあ、うちの會社の商賣仇が……」

「或はさうかも知れません。たとへばさうでなかつたとしても、世の中の事を知らなかつた……、知らうともしなかつた我々にも落度があるのです。もうその事は言ひたくはありません」

と、聞くと、西村は逆に

「しかし、決して高い償金(アシンペ)ではなかつたとも言へるかも知れん、その後のいろいろな樣子から考へ合はせるとね、……いや、その時は高いと、立派な値段だとこの俺も信じてゐたのだよ」緩急自在に相手の氣持にとり入つて「しかし、今になつて考へると、もう少し取つてやれたらよかつたなと思ふことがあるよ。君達にしてみればそれ所ではない悲しさだつたらう、先祖からの土地をはなれたのだからな」

西村はしみじみとした調子で言つて、サムロツオとマカリナの蔭から、言葉は判らない乍ら、眞劍な表情で何かを聞きとらうとしてゐる仲間の者達に、二言三言同じ意味のアイヌ語で話しかけた。仲間のアイヌ族たちの表情は微かに柔らいだ。

サムロツオと彼の妹マカリナをふくむ五人のアイヌ族の若者は……彼等の粗朴な正直さは……彼等にしみじみと同情の言葉を吐いてくれる男への、むしろ涙ぐましい程の親愛の情となつて、去年と同じやうにふたたび西村の擴げる手の中にたぐり込まれて行くのである。

「それで?」と、西村に後の言葉をうながされてサムロツオは

「私達はやつと新らしい土地へ移りました。其處でやつと腰を落ちつける氣持にもなりました。所がつい此の間、今度新らしく出來た鐵道會社の者だといふ内地人(シャモ)が來て、此の土地に鐵道を敷くのだ

から立ち退けと言ふのです。たつた一年前に旭川を追はれて、やつと腰を落ちつけた私たちの部落に……、その內地人は立ち退けといふのです」

「何、鐵道會社？」と、とぼけて「そりやあ怪しからん話だ」

「西村のニシパ……、新らしく鐵道會社をつくつたのだといふ。その東京の內地人は私達に死ねといふのでせうか」

サムロツオは激しい口調で叩きつけるやうに言つた。彼の眼からほろほろと淚がこぼれ落ちた。萬感迫つての淚なのであらう。

アイヌの神に祈ることだけですべてを解決しやうとする彼等の父母達。また現實に於いては、狩獵と鮭獲り以外には生活の糧を得る術を知らぬ同種族の仲間たち。內地人が農業の耕作技術を敎へるにも關はらず、土地に播いた籾の芽生えや成長よりもずつと早い雜草の草取りをやらず、秋になるとやつと、それでもどうにか丈高い雜草にまぎれてぽつぽつと貧弱な實のりを見せる穀物を摘んで、それで萬事終れりとして農業などは性に合はぬと愚痴をこぼすアイノやメノコ。其處へつけこんで土地を寸土でもへずり奪らうとする內地の一旗組。……實を言へば彼等自身にも責任の無くはない種族の衰微が、若くして純情なサムロツオの、內地人への憤怒に尙一層の悲しみをつけ加へてゐるのかも知れないのだつた。

サムロツォの激情に氣怖じのした西村がふと眼をそらして見ると、マカリナまでが波濤のしぶきをその可愛らしい頬にうけながら、波のしずくとも見まがふ涙をその眼に浮べて泣いてゐた。

寢覺めの惡るさ……。だが、西村にしても社長韮崎傳右衛門の言葉は至上命令にも等しいものなのだつた。その事業を遂行させる爲には、彼は人非人ともなり惡黨ともなる。たまには事業の好調が嬉しい餘りに、彼自身の惡事業家振りに醉ふ眞實の惡黨にまで道を踏みはずして行く。彼もまた人間であるが故のその弱點に押されて相手の涙を見て心にひけ目を感じながらも、彼自身の生活の爲に、彼自身の榮達の爲に、その心のひけ目から眼をそらせてしまふ。

「成程、それで君達は東京へ行くと言ふのだね……、勿論その鐵道會社だつて君達を食ふに困るやうな目に合はせるのが目的ではなく、北海道をいい土地にしようといふ氣持からの、つまり必要に應じてそれをやるのだらうがねえ……。で、何かね、君達は東京へ行つて、その會社に鐵道を敷かないやうにと嘆願でもするつもりなのかね」

「はい、さうするつもりです。會社と政府とに賴んで、今度こそは私達の部落(コタン)が移住しなくともいいやうにして貰ふつもりです」サムロツォは堅い決意を見せて「北海道廳の若い役人さんのある人が言はれました。會社も政府も若し相手にしてくれぬやうだつたら、新聞社といふ所へ行つて賴め…と

……」

内地人の移民やアイヌ族を下僕の如くに見下げてゐる道廳の官員樣の中にも、その氣風に染まぬ正義の士が居たのか、韮崎や西村達にとつては手痛い王手の差し方を教えてゐた。それが官員樣の入れ智惠と知つた西村は手痛い入れ智惠であるだけに、彼等が日頃からその尊大な態度に恐れをなしつつも尙かつ輕蔑してゐる役人といふものへの反撥を感じて

「新聞社か、新聞社にねえ」と、荒々しく笑つた。

「駄目でせうか」

「駄目なことはないがね」

飽くまでも今度は新聞社との連絡をとらせまいといふ氣持になつた。

「よし……、サムロツオ、どうだ俺にまかせないか、去年の事もあるからその謝罪の意味でだ。この西村要助が君達の東京での運動をとことんまで援助しやうぢやないか」

「……」

「東京へ行つたつて、君達は何んの勝手も判るまい。宿屋の心配までするのぢやあ大變だ宿も俺がとつてやらう」

「西村のニシパはそれを本當にやつて下さるのですか」

「去年の件に關しては俺は重々責任を感じて居るからな、その謝罪の意味でだ……」

と聞いて、サムロツオは彼の仲間の方にくるりと向きを變へて、口早に西村の好意を說明しはじめた。そのサムロツオの肩を西村は輕るく叩いて

「但し、新聞社のことも何もかも全部俺の差圖に從ふのだぜ、決して惡いやうには計らはんから」

ふたたびくるりとふり向いて、仲間と共に西村の顏を見つめるサムロツオの眼は輝やいてゐた。

「西村のニシパ……。あなたはいい人だ。私達はあなたのことを思ひちがひして居たかも知れません」

西村の胸に湧いた强い自責の念がふつとサムロツオの眼から視線を傍にそらせた。其處からはマカリナまでが感謝のまなざしを送つてゐた。

「西村のニシパ、有難うございます」たどたどしい內地語が、西村の胸をグツと衝いて哀れだつた。

「マカリナ……、お前も代表の一人なのかね」

「いゝえ、私は兄さんが內地の人と喧嘩しないやうに……、喧嘩なんて、そんな悲しいことをしないやうに、私達のお母さんが、一緖について行けとさう言つたのです」

「お母さんがかね？」

「はい……、アイヌは喧嘩することは嫌ひなのです。でも、兄さんは氣が强いから……。西村のニシパ、兄さんたち助けて上げて下さい」

西村は視線のおきどころを失なつてしまつた。彼にも娘がある。丁度マカリナと同じ年頃の、今年十八になる娘が……。にも關はらず、彼は目の前に居る可憐なメノコやアイノ達を卑怯な陷穽に、實に卑怯な陷穽に引ずり込んでしまつた。

寒々とした潮風が彼の自責の心を吹き拔けて行く。その風の來る向ふの陸地ははや緑の山の頂に白い殘雪の名殘りを見せるみちのくの港、本土の入口である。船はこの人々を東京へ送り込もうとしてその合圖の汽笛を鳴らした。

それから一月の後、四月の或る夜が舞踏會の當夜である。

4

櫻花滿開の候……と、舞踏會の招待狀は宛名の人に呼びかけてゐたが、その文字通り、會場の前庭には蒼白いアーク燈の光りを浴び、櫻の老樹が重なり合つて花びらの雲を擴げてゐた。

馬車が來る、馬丁が主人の名を叫ぶ。二人曳きの人力車が來る。マーガレットの令孃が下りる。受付係の囁く言葉を聞けば、今しがた彼等の前を通りすぎて場内へ行つたのは、何某といふ大臣だと言ふ。

華麗にして絢爛の饗宴。催しの主人は韮崎傳右衞門。饗宴の名目は「北海道開拓鐵道株式會社設立記念祝賀舞踏會」だと言ふことである。

メヌヱット風の舞踏曲が未熟ながらも樂しくこの受付のあたりにまで流れて來る。その音樂の流れを逆のぼつて場內へ入つて行くと、幾つめかの扉口を越した大廣間の床の上では、はや多くの來客達が、女は裾の長い洋裝を引ずり、男はフロックコートの威儀を正し、その襟元の高いカラーに首の曲りかねる不自由さを忍びつつ踊つてゐた。

廣間の入口に近く、人々の會釋に答へてそれが禮節であると敎へられた微笑を以つて報ひてゐる一人の娘……典子である。そしてその傍らに彼女の現在の母淺子が、四十路をすぎた感情の冷却の中にも丹麗な姿で佇ずんでゐた。

「典子さん……、あそこの柱の横でお友達らしい方とお話をなすつてゐらつしやる方が克己樣でゐらつしやいます」

「……」

「あちらのお話がお濟みになつたら、必らず此處へお相手をなさりにおいでになりますからね、ダンスも御たんのうでゐらつしやいますから、きつと典子さんのお氣に召すと存知ますよ」

「どの方?……」

「あの柱の横に……」

と、淺子夫人が言ひかけた時には、典子はその言葉を無視して、折柄彼女の傍近くへ來た女學校時代の同窓の令孃に向つて小走りに遠のいて行つた。淺子夫人の額をさつと蒼ざめた怒りが走りすぎる。しかし、それはほんの瞬間のことで、

——無智な成り上り富豪の娘なのだ。彼女の母だつて、無敎養な女なのだ。

まるで自分が韮崎傳右衛門の妻である事を忘れたかのやうに、彼女自らを離れた立場において、靜かに冷靜に元の落ちついた表情に戻る。

それを知つてゐて、暫らくして淺子夫人の傍らに戻つて來る典子の眼には、感情を强いて殺さうと努力する母への嘲笑が美くしい顏の片頰にちらりと浮ぶ。母の言ふ如く父傳右衛門は無敎養な成り上り者かも知れない。典子自身にしても父を厭な人間だと思ふ事がある。だが、その人は自分の父親なのだ。母にとつては良人ではないか。妻といふ立場を忘れて、まるで自分達親娘の敎師か何かのやうに。母親が母親でなく、韮崎親娘の家庭敎師であるのなら、彼女が思つてゐる通りに、成り上り富豪の娘はそれなりに思ふ通りにふるまつてやる。

しかし、典子はさり氣なく

「お母樣御許し遊ばせ、女學校の同窓生の方でしたの……」

「さう……、それはようございました」
「それであの……、克己様つてどのお方でしたかしら」
「あの向ふの柱の横に……」怒りを不自然に耐えてふたたび同じ言葉を繰り返へす可笑さに
「あ、さうさう……、さうでしたわね」
典子はクスツと笑つた。
「あら、母様の顔に何か汚れたものがついて居りましたかしら……」
「いいえ……、どうして？」
「今あなたがお笑ひになつたから……、ついてゐなければようございます。でもそんな時には教へて下さいましよ」
ホホホ……と、微かに笑ふ冷たい應酬だつた。
「典子さん、克己様はいいお方でゐらつしやいますよ」
「北海道長官の澤田様が……、たしか、お話においでになりましたのね」
「左様でございます」
「でも……、あの克己様と仰有る方、餘りにも隙のなささうなお姿ですのね」
「まあ、隙のないお姿だと言ふことを典子さんはおけなしになるのですか」

「別にけなしはいたしません。でもお母樣、……どうです私には一分の隙もないでせうと、それを自慢氣にふるまつてゐる人つて却つて滑稽ぢやございません？　フフフ……」

「典子さん……」淺子夫人の聲がかすかに慄えた。

「若し假りにお母樣があの方の許へお嫁ぎになるのだとしたら、何んて窮屈な人だらうとはお思ひになりません？」

「典子さんはあの方がお氣に入らないと、またおつきあひにもならない内から仰有るのですか」

「いゝえ、決して……、まだおつきあひもしない方のことを氣に入らないだなんて、そんな言葉は失禮ですものね……、たゞ、一番はじめにあの方のお姿を拜見しての印象だけを申し上げたのでございますの……」

母と娘との間に交はされる言葉のはしばしには、輕蔑と反撥とが火花を散らしあつてゐる。その間にも大廣間へ入つて來る招かれた客は、この母娘のにこやかな歡迎の挨拶をうけ、大廣間の床にメヌエットの足どりを踏む來客たちは、この大饗宴の主人側の親娘の間にそんな風な會話が交はされてゐることは夢にも知らなかつた。それはまた知る必要もない世間の儀禮といふものなのだ。

淺子夫人は典子の小ざかしげな反抗の言葉を聞き、丁度この頃他の廣間で、踊りや音樂に興味を持たない年寄達に、つまり政治家だとか實業家などの實力階級に向つて一場の挨拶を試みてゐる筈の彼

女の夫の姿をちらりと思ひ浮べた。

「典子さんは結婚といふものをどうお考へになつてゐるか存知ませんけれど……、たとへどんなお方と御結婚になるとしてもです。殿方には女とはちがつて絶えず他處の方との交渉がおありなのです」

「つまり……、彼處においでになる克己樣のやうなしつかりなすつた方でなくてはと仰有ひますのね、ホホホ……」

その笑ひを無視して

「たとへばお父樣です。お父樣はお金がおありになる。そのお金の力で教養の低さや、お金儲けの爲には手段を選ばないやり方の總てを隱くしてゐらつしやる……、けれど、若しお父樣にお金がなかつたとしたら……」

ホホホホ……と、典子は絶えず流れてゐる音樂や床をする足音の中でさへも聞こえる程の聲で笑つた。

「お母樣は、私がお父樣を嫌つてゐるのをよく御存知ですのね」

「……典子さん」淺子夫人はこのやうな舞踏會の儀禮にはずれた典子の高笑ひをとがめやうとしたが、思ひ直したやうに「それは……、私達は一緒に生活してゐるのでございますもの」

「そして、お母様はお父様を輕蔑してゐらつしやるから……。さうでしたわね」

蒼ざめた淺子夫人の面に向つて典子の勝ち誇つた笑ひ聲が……、丁度その瞬間に音樂の終つた廣間にひびき渡つた。エチケツトにはずれた高笑ひの主を求めていつせいにふりむく舞踏會の紳士や淑女たち。

淺子夫人は氣絶しさうな恥かしさを耐へて

「典子さんそれはちがひます」

聲を押し殺したのも、彼女の貧しいながら子爵家の娘だといふ自負心からだつた。

次の瞬間にはもう新らしい舞踏曲が演奏されはじめてゐた。

「お孃様、お相手を願へませうか」

成り上り者の娘とは知りつつも典子の容色に魅力を感じる何某大臣の次男坊が、窮屈なフロツクコートの兩手を典子に向けてさしのばしてゐた。

「ふつつかな踊りでよろしければ……」

典子は小腰をかがめ羽扇で微笑をかくすしほらしさを見せて、はやその腕のなかへ身體を辷らせた。

「あ、典子さん……」

浅子夫人は克己が人の波をわけてこつちへ近づいて來る姿を認め急いで留めたが、だがその時は既に、典子の嬌慢な胡蝶の姿は多くの踊る人達の群の中へ消え去つてゐた。

「お嬢様は踊つておいでになりますね」

「あ、今迄お待ちしてゐましたのでございますけれど」

浅子夫人は言ひ譯がましい言葉を態と避けて「典子は踊る事が好きなもので、きつと克己様よりも踊りの方を選んだのでございますよ」

ホホと笑ふ浅子夫人の姿には困難な立場に動じない落着きがあつた。

「ほんとにまだほんの子供……で」

と、夫人は如才なく克己を廣間につゞいた休憩室へ誘なつた。

「踊りの席上で文學の話をしかけて來る無法者が居りますのでねえ。文學の話はサロンでするべきものだと言ふ作法を知らない男なのですよ。……典子さんが御機嫌を損じはなさらなかつたかと心配して居ります」

克己はゆつくりウエストミンスターといふ英國煙草を出して「喫つても宜しいでせうか」

許しを得て丹麗な姿で靜かに紫色の煙をくゆらせはじめた。彼は父の園井伯爵と共に昨年の秋歐米漫遊から歸つて來たばかりだと言ふだけあつて、ロンドン仕立の夜會服がぴつたりと身につき、禮儀

作法の正しい點から言つても、今夜の貴賓たちの内では僅かに數本の指を屈するそのなかの一人だつた。その彼の一分の隙もない極立つた姿が却つて典子に厭味な感じを受けとらせたのかも知れなかつたし、或はさうではなく、淺子夫人が彼を結婚の對照として推薦したことに對しての反撥から、譯もなく彼をこきけなした典子なのかも知れなかつた。

淺子といふ韮崎傳右衞門の妻は、彼女の生家である子爵家のおつとりとした家風に相等しいこのやうな貴公子的人物と對座してゐる時だけ、はじめてほつとしたくつろぎを感ずる女性なのだつた。

「克己樣はお聞き遊ばしたでせうか」

「何をです」

「典子の評判でございます」

「と、仰有いますと」

「お聞きにならなければそれでお宜しいのでございますが」

「たとへて言へば、高慢ちきだとでも言ふ……」

「やつぱりねえ……」

「母と妹が申して居りました」

淺子夫人のがつかりした表情に克己はほほえみかけて「しかし、私は母や妹に申しましたのです。

高慢な性格であればこそあれだけ美くしい。そののびのびとした美くしさを無理に押さへて何の益がありませうかと……」

「克己樣はどんな時にも隙を見せないお方でゐらつしやいます」

「私がですか」

「これは典子が申した言葉でございますよ」

淺子夫人はよみがへつたやうに明るく笑つて「では、そのやうな評判をお知りになつた上で尙かつ典子を貰つてやらうと仰せになるのでございますのね」

「實は私といふ男は隙が有りすぎるのかも判りません。尊敬する女性に對してはね」

「まあ……」

各自の言葉にそれぞれが滿足し合つた者同志が、下品にならない程度に抑制した聲で笑つた。

克己は煙草を灰皿の中に捨てて

「奥樣、あちらの廣間へお伴いたしませうか、あの老人達の集まりの場所では、確か……御主人の今度の鐵道會社に對しての御說明が……或は演說かも知れませんが……、はじまつてゐる筈でございましたね」と立上つた。

「それは？　あちらへ行つて韮崎の餘り面白くもないお喋舌を聞かうと仰せになるのは？……克己

様の、やはり一分の隙もない社交術のおひとつなのでございませうか」
「恐れ入りました。この方は正に仰せの通りですが、私は典子さんをいただく爲には、御主人の御演說も聞かなくてはならないのです」克己は笑つた。
「ほんとに典子は幸福です。幸福になれる筈なゝです。だのにあの子はまだ子供でそれがよく判つては居りません」
淺子夫人は突然さう言つて寂しさうに笑ひながら立ち上つた。それは彼女の實は僞はりのない氣持なのである。彼女の韮崎家に對する家庭敎師的な心は心底から典子の幸福を希つてゐる。彼女が考へて居るやうに伯爵家の嗣子園井克己の許へ典子が嫁いで行つて、果たして幸福になるかならないかは別問題としても……。
そして克己は……まだつきあひもしない前から典子が自分に好感をもつてゐない。と言ふことを知つた。
彼の言ふ「老人達の廣間」へ、淺子夫人と二人で入つてゆくと、正面の奧の壁には大きな北海道地圖が揭げられ、それを指さしつつ傳右衛門が精力的な事業家らしい姿で、熱辯をふるつてゐる姿が眼についた。政府の開拓捉進の方策が共感を呼んでゐるのか、北海道といふ土地の名が物珍らしいからか、どちらかと言へば韮崎といふ事業家個人には好意を持たない人が多いにも關はらず、聞く人は意

外にも多く、廣間の殆んどを埋めた實業家や政治家の中には、小倉や韮崎と提携して旭川事件を惹起したために譴責處分をうけたといふ澤田長官の細面の顔も見られた。

暫らく聞いてゐるうちに克己は

「なかなか熱辯ですね、それに、なかなかどうして立派ではありませんか」と、淺子夫人に、彼女の夫の演說を批判して聞かせた。

若いくせに思ひ上つた賞め言葉である。……と、普通ならば思はねばならないところであるが、淺子夫人はそれを惡い氣持ではなく受け入れた。

「案外でございますね」

彼女は自らの夫の實業家的な手腕の一切を默殺してゐた。どんなに事業の經營に才能があらうとも彼のやうに無敎育な無敎養な、紳士的でない人間は輕蔑すべきであると……。しかも彼女の現在の豪奢な生活は、その傳右衛門の手腕のおかげであり、彼女はその生活に滿足してゐるのであることを忘れてしまつてゐた。彼女の其處に、自分の夫を尊敬しきれない妻の悲劇があり、其處からその家庭の悲劇が生れるのであることに氣がついてはゐなかつた。

言ふならば克己のその不遜な言葉は若氣のいたりである。若い精神は正義を愛するが故に傳右衛門のやうな男を好まず、彼よりも一段と高い所に立つて、自分よりも人生の經驗の多くを經てゐる彼を

批判する。と言ふ點から見れば典子の、……隙のないのを自慢する厭な男だといふ……第一印象は狂つてゐなかつたかも知れず、また逆な考へ方をすれば隙だらけの青年なのかも知れなかつた。

傳右衛門は熱辯のうちに、人々の背後に佇ずんで彼の演説を聞いてゐる妻と、娘の夫になるかも知れない伯爵の嗣子の姿をちらりと認めた。青年は他の人々と共にしばしば彼の演説に拍手をおくり、妻は何時もの冷たい表情を今日は不思議にもほころばして聞いてゐる。

彼は、妻が彼を輕蔑してゐるのと同じやうに、今では妻を輕蔑してゐた。何んだ子爵の娘なんてこんな程度のものか、華族だなんて言つたつて高が上品ぶつて腹を減らしてゐる狆ころみたいなものぢやないか。俺は事業の完遂に、鐵のやうに強い努力をかたむける土佐犬なのだ、お前等のやうな狆ころに俺の大きな姿が判るものか。

だが、その傳右衛門が、廣間の後の隅に妻の姿と克己といふ典型的な華族の息子の姿を認めてからといふものは——妻が見てゐる。あの青年が聞いてゐる。この演説はうまくやらなくちやあ——と、さう思ふのは、彼の冷たい家庭生活に、まだ一縷の希望を托し、絶えず嘲笑的な表情を見せる妻に對しての、金儲けをすることだけしか知らない成り上り富豪の、自分では意識しない悲しい反撥の姿なのでもあらうか。

拍手の中で彼の演説は結論にまでたどりついてゐた。

「滿堂の紳士並に淑女諸氏におかせられましては、最早私などが長々と辯舌をふるひますまでもなく、既にはや、皆樣の御高邁なる御識見によられまして御推察遊ばされてゐることとは存知まするが。御一新以來の數多くの困窮者を救ふの道は、北海道の開拓、これ以外には方法がないのでございます。今までは北邊蝦夷の地として見捨てられてゐましたる所の北海道といふ土地に對しての鐵道の建設による文化の注入と資源の搬出、これこそが我が國に富をもたらせ、多くの困窮者を救ふ唯ひとつの止むに止まれぬ道なのでございます。その道を通じます爲には如何なる犧牲をも拂はねばならぬのでございます」

傳右衞門は彼の演説に最後の力を注ぐ爲の一息を入れた。それをいたはるやうに拍手が激しく起つた。最初に手を拍つて他の拍手を誘つたのは澤田長官であつた。

「滿堂の紳士淑女諸氏……、どうかこの私の背後に掲げましたる北海道地圖をもう一度御覽下さいませ。此の地點より此の地點まで……」と、彼は地圖のある地點を指さして「その延長九十八英里の鐵路こそが我が北海道開拓鐵道株式會社の豫定建設地でございまして、此の中間には人跡未踏の原始林がございます。それを伐り開らき鐵路を敷く爲にはどれ程の人力が必要であるか、どれ程の金錢が必要であるか、充分にお察しの事と思ひます。その犧牲を敢へて拂はんとする私の會社に對しましな、世上ややもすれば惡罵の聲が放たれるのを聞きまするが、誰が好きこのんでこんな所に、莫大な

る犠牲を忍んでまで鐵道を敷くか、誰が喜こんでこんな犠牲に甘んじるか、全くそれは私共の苦衷を知らぬ無責任の言辭として、私としましては痛憤に耐えぬ次第でございます」

傳右衛門は昂奮して卓を激しく叩いた。これも彼の眞實の心であるのかも知れず、同時に旭川事件の彼も、資本家としての醜い姿なのであるのかも知れなかつた。

聽衆である政治家や實業家は、彼の純情と稚氣に一應の好感をもつ者もあり、その反面に、言ひ譯なしてやがる……と、にやつと冷笑する者もあつた。

傳右衛門は語を繼いで

「勿論、その建設豫定地にはアイヌ族の住む部落も存在いたす事と想像いたして居ります。がしかし、その場合にはアイヌ族にも鐵道建設の福利を分け與へよ。……即ち、それに伴なふ仕事を分け與へてやれと、私は會社の者に斯う命じて居る次第でございます。……何卒この不肖韮崎傳右衛門の微衷を御信用あつて我が鐵道會社の事業に心からなる御賛同を御與へ下さりまするこ とをお願ひしてこの貧しき説明を終ることといたしまする」

と、卓に兩手をついて頭を下げた彼の姿はいかにも商人らしくて滑稽だつたが、しかし拍手は意外にも強く、彼の事業を支持する聲の多いのが、今夜の催しの成功を物語つてゐた。だが、傳右衛門の演説が終るやいなや、まだ拍手の音が途絶えぬ内に、

「どうぞ皆樣、あちらでは若い方々が盛んに踊つて居られます。ダンスを御愛好の方はどうぞあちらの廣間へ……、こちらの小部屋には洋酒の用意がございます。辛黨のお方はどうぞこちらへ……」

廣間の入口に立つて叫んでゐる西村の姿が、まるで博覽會の案內係か何ぞのやうで、韮崎を蔑視する政治家や、彼の仲間の實業家たち、傳統や儀禮を重んじる連中は

「見世物小屋へ行つたやうだな」と、苦笑してしまつた。

人々のざわめきのなかで傳右衞門は澤田の細面に描いた八字髯を見つけて

「どうだね澤田君……、今の演說は」

「いやあ、今も園井伯爵の御令息と話し合つてゐたのだが、仲々立派な出來榮えなので、園井さんも感心して居られたよ」

「思ひもかけず立派だつたので、つい私までが」

と、淺子夫人浮々として言ひかけ、ホホと笑つて「但し、あなたとしてはでございますよ」

「私としてはか……、こりやいいほめ言葉だねえ」

しかし傳右衞門は機嫌よく笑つた。とにかく成功したのだ。

「私はこちらにゐらつしやる澤田長官の演說を一度拜聽したことがありますが、長官の演說が六十點とすれば唯今のは八十點、或は八十五點かも知れません」

と言ふ克巳のヅケヅケとした言葉に對して
「六十點はひどいですよ園井さん」
克巳の父親のひきたてで現在の地位まで登つて來たといふ平凡な官僚の一人である澤田は、その息子に對しても頭が上らなかつた。
「いや、あなたのは六十點です」
「六十點かなあ……、どうも當代の若紳士にかかつては北海道長官もかたなしですよ」
卑屈な調子のてれくさい笑ひ聲にかぶせて
「しかし、克巳君といふ公平な審判官のつけた成績表だから仕方がないだらう」
傳右衛門は無遠慮に笑ひながら「と言ふことになると澤田君に氣の毒だから白狀するがねえ。今の演說は借物なのだよ」
「と言ふと？」
「あの演說の草稿といふのか何んといふのか……あれはその」
「誰かの代作なのかね」
「うむ、うちの會社の大學出の男がね、私から要領をきいてそれをうまく並べて書いてくれてね」
と、傳右衛門は咽喉をクックックッと言はせてさも嬉しくて仕方がないといふ風に笑つた。「私は唯、そ

れを覺えて喋舌つただけなのだ」

「こりやひどい」

「うまくしてやられました。審判官も……」

三人の男は期せずして爆笑の聲をあげた。

今夜の北海道開拓鐵道會社設立の宴會は完全に成功したのだ。……とすれば、たつた今の、この「韮崎傳右衛門の白狀」は、確かに面白い座興である。だから三人の男は朗らかに笑つた。……だが、淺子は笑はなかつた。それがむしろ傳右衛門の正直な一面でもあり、粗野な人間の取柄でもあるのだと解釋してやるだけのゆとりがなかつた。「道理でいつものあなたに似合はない立派さだと存知ました」

冷たく笑つた。

「しかし淺子……それを正直に白狀した所は私もなかなか神妙な人間だらう。うん？」

傳右衛門は彼自身の「白狀」が此の場の座興としてもなかなか結構なものだと思つてゐるのに、その座興の面白さが通じない妻の冷やゝかな心の流れが、彼の胸に冷たく突き刺るのを感じたが、しかし、彼はこの好機嫌を損じたくはなかつた。

「左樣でございます。神妙と言へば言へませうけれど、でも、澤田樣や克己樣に對してお恥しく存知ます……ねえ、左樣でございませう。ホホホ……」

彼女のその冷笑の如く皮肉な言ひ方をすれば、今夜のやうな場合には、代人の書いた草稿に依つて演說をしておきながらも、それを最後まで自分自身の書いたものの如く裝ふ人間のみが彼女の肌に合ふのかも知れない。世の中のあらゆる場合をすべて儀式の如く嚴肅に高尙に渡らうとする女！

一瞬にして白けきつた空氣を持て餘して「どうです。舞踏場へでも參りませうか。久しぶりで奧樣にお相手をお願ひいたしたいものです」と、澤田がこの韮崎夫婦の斯んな風な空氣には慣れてゐるらしく、しかも傍に居る克己に氣を兼ねて、この場の感情を柔らげさせやうとつとめてゐた。

場所柄の見境もない、しかも、表面は靜かにとりつくろつた、この鋭い感情の對立は、恐らくは韮崎夫婦の今迄の永い家庭生活の中で、ぱつと勢よく燃え上ることもなく、消えることもなく、絕えずくすぼりつづけて來たものにちがひない。この父とこの母との間にはさまれて苦悶をつづける典子というふ娘が、若しも內氣でしとやかな娘だつたら或は一日として生きてはゐられなかつたのではあるまいか、彼女の高慢ちきな振舞の原因が此處にある。或は彼女は哀れな娘なのかも知れない。……克己は、今はもう何氣ない豪快な笑ひによつて感情の露出を隱くしてゐる韮崎や、すでにもう取り濟ました表情でゐる淺子夫人や、澤田等と共に舞踏場への廊下を步きながらそんな風な感想を得てゐた。

舞踏場にあてられた大廣間へ行けば、其處にはきらびやかな衣裳と、香料の香りと、美くしい音樂が流れてゐる。その絢爛たる舞踏會の夜の雰圍氣が、もう一度みんなを幸福にしてくれる。韮崎夫婦

のたつた今の爭ひは、今夜の舞踏會の中でのいささかの瑕瑾ではあるが、しかし催しそのものはともかくにも大成功だつたのではないか、……と、皆はさう思つてゐた。事實その次の事件が起るまでは、この韮崎傳右衞門主催の舞踏會は誰の眼から見てもうらやましい程の大成功を收めてゐたのだつた。

つまり……、事件は彼等がまだあちらの廣間に居る頃にはじまつたのである。

會場の入口にゐた受付係は、表門から供待ちの馬車がずらりと並んだ砂利石道をヅカヅカ踏んで走り込んで來る四人の異形の風體の者を慌てて遮切らうとした。するとその異形の風體の者達は意味の判らない言語で罵しりながら受付の者を突き倒し、昂奮した叫び聲を發しながら場内へ突入して行つた。彼等がいくつかの扉をくぐり拔けて大廣間の舞踏場へたどりついた時、受付係の若者達はやつと其處へ追ついた。

「何處へ行くのだ、此處はお前達の來る所ぢやない」

「此處へ來るのは招待されたお客様だけだ、歸れ歸れ」

「おい、早く此奴等を追ひ出せ」

若者達は口口に叫んで、四人の異形の風體の者達を外へ押し出さうとした。

その頃から舞踏場の人々の間に、何事であらうかとのざわめきが起りはじめた。音樂はまだカドリ

ールを奏しつゞけてゐたがそれにも關はらず踊りの手や足を留めて大廣間の入口を注視する人々もあつた。

「出ろッ……出て行けつ」

受付係の一人が焦ら立つて遂に喚めき立てて力づくで異形の闖入者を押し出さうとした。

「拔つとけッ」

闖入者の一人が明瞭な言葉で叫んだ。

「何」

その瞬間に、彼を毆らうとして手を出した受付係の若者は廣間の床の上に突き倒された。

令孃達のきらびやかな姿がきいきい聲で恐怖の悲鳴を上げ、そして音樂が中止された。今しがたまでカドリールを踊りつゞけてゐた人達は廣間の端まで急いで引下つて、其處で蒼ざめた沈默を守つた。

シーンとした靜けさの中を、その大廣間の中央まで……、上川サムロツオと彼の三人の仲間、四人のアイヌ族の青年達はツカツカと歩いて行つた。此の一ケ月の間、彼等は何をしてゐたのか、彼等が狩勝のヌプリから身にまとつて來た一張羅のシャランベは垢と汗にまみれ、彼等の表情は追ひつめられた者の憤怒によつて歪んでゐた。

彼等が歩み寄つて行つた大廣間の中央にたつた一人、廣間の端の方まで逃れて行つた貴公子や令孃達から取り殘されて佇ずんでゐる人物があつた。……典子である。

彼女はさつきからの舞踏の合間に、いくたびか父傳右衞門に對しての惡評の囁やきを耳にした。或は成り上り者の高慢ちきな思ひ上つた娘といふ、彼女の耳に態々聞かせるための意地の惡い女達の囁きをも聞いた。

――フン、負けるものか

彼女は羽扇をひらひらとさせて、それを器用に持ちかへ持ちかへて踊りつゞけた。或る時は態とその羽扇の先でその高尚な意地の惡い令孃や夫人達の鼻をくすぐり、そして、あら失禮、御免遊ばしませ。

そして今……、此の、たしか寫眞で見てアイヌ族の服裝だと見覺えのある衣服を着た青年達は何をしに來たのだらう。この無禮な若者達までが、此の上にどんな恥を自分にかかさうといふのだらう。父親は野卑だ、母親は冷淡だ、自分は成り上り者の娘だ。けれど何が起つたつて驚くものか……。

典子は、此の席の何百といふ上品な高尚な人達の眉をひそめた視線が自分の身體に意地惡るく注がれてゐるのをはつきり意識しながら、胸をはつて彼等を迎へ、靜かに言つた。

「あなた方は、何處のお方なのですか」

むしろヨーロツパ人にも似た骨格のたくましい美青年サムロツオは、激しい昂奮で唇をふるはせながら叫んだ。

「ニシパに逢はせて下さい。此處のニシパに逢はせて下さい」

喘へぎながら息をついた。

「ニシパ？」

ホホホ……と典子は笑つて「私にはさう言ふ言葉は判りません。ニシパとは何んの事ですか。あなた方は何んの御用で此處へおひでになつたのですか、此處は韮崎家主催の舞踏會の會場です」

「ニシパに逢ひたいのです、逢はせて下さい」

「お歸りなさい。御用があるなら晝間おいで下さい。私共の屋敷へ……」

「歸りません、歸れないのです。ニシパに……」

「私が此の舞踏會の主人です。今夜はお客樣方の爲の舞踏會です。御歸り下さい」

「逢はせないといふのですか韮崎のニシパに……。私たちは韮崎のニシパに騙まされたアイヌ族です。旭川に住んで居つたのを韮崎のニシパの會社に騙まされて追立てられたアイヌ族の代表です……」

「……」

典子の背筋を冷たい惡寒がズーンと走りすぎた。典子は去年の春の新聞記事を讀んで旭川事件を知

つてゐた。その時父に聞きただしたら「根もない噂だよ」と、父は笑つてゐた。彼女は今でもそれを信じてゐる。だのに、今彼女の眼の前には、その時の被害者が姿を現はした。彼女は廣間の端にかたずをのんでゐる彼女の一家を侮蔑する人々の中に好奇心にみちたざわめきが起きたのを知つた。

「お孃さん、韮崎のニシパは何處へかくれたのです、敎へて下さい」是が非にも押切らうと焦せる言葉に

「お歸りなさい、今夜は舞踏會です」典子は激しい聲を相手の顏に叩きつけた。

無言のままで腕を組んで彼女を睨み据えてゐる仲間を背後にして、サムロツオは相手の銳い聲に對してもつと昂奮した。

「お孃さん、あなたは誰ですか、韮崎のニシパがどんな人間か知つてゐるのですか」

「韮崎傳右衞門は私の父です」

「父？　あなたのお父さんですか、あなたのお父さんは私達を騙ました。あなたのお父さんは嘘つきだ。私達はあなたのお父さんに騙まされて土地を奪られて、やつと山の中へ移住した。さうしたら今度あなたのお父さんは、韮崎のニシパは、新らしい鐵道會社を作つた。此處の表に看板が出てゐるあの名前がさうだ。北海道開拓鐵道會社といふのがあなたのお父さんの會社だ。その會社が、今度は山の中まで入つて來て、折角其處に落ちついた私達の部落にもう一度立退けと言つて來た。私達はそ

れが韮崎のニシパの會社だとは昨日まで知らなかつた。韮崎のニシパの家來が、西村といふ和人(シャモ)が、私たちを騙まして、俺にまかしておけとさう言つたのだ。昨日はじめて新聞社の人にきいて、騙まされてゐた事を知つたのだ。西村といふシャモはそれまでは私たちを誰にも逢はせなかつたのだ」

何んといふ悪辣なやり方なのだ。廣間の各所にそんな囁やきが起つた。僅かに典子に同情を抱く彼女の同窓生なども、今は全く韮崎傳右衛門とその娘である彼女とを混同して憎悪の感情を抱くにいたつたらしく、ざわめきと共にさも汚らはしい場所を立ち去るやうな姿でさうさうに廣間を去つて行く人もあつた。

典子はその氣配を身體にひしひしと感じ、孤立の悲憤にむせび泣きさうになりながらも、しかし、今の言葉が若し僞りでなかつたとしたら、このアイヌ族の人達は氣の毒な人達だと同情した。だがしかし、彼等の責める韮崎傳右衛門は彼女の父親なのだ。

「お孃さん、韮崎のニシパに逢はせて下さい」

「お父さまは……」彼女は胸の中に何かのかたまりがつまつてゐるやうな思ひで言つた「お父さまは此處にはゐません」

「嘘だ。此處のニシパは嘘つきだ、あんたも嘘つきだ。內地の人間はみんな嘘つきだ。アイヌは嘘をつかん。私たちは狩勝のヌプリから出て來てもう一月にもなる。このまま歸れば私達は部落の笑ひ

者になる、ニシパに逢はせて下さい。嘘つきのニシパに……私達は逢はねばならんのだ。もう騙されはしないのだ」

「お歸りなさい……、晝間おいでになればようございませう」

典子は取り亂すまひとしながらも必死になるのだが

「歸りません……」サムロツオは鋭く叫ぶ

「お前なんかには判らん、韮崎のニシパに逢はせろ、嘘つきのシヤモに私は逢ふんだ」

と、典子を押しのけやうとした。

瞬間……。典子の右手がサムロツオの頬に激しい音を立てて觸れた。

「あツ……」

だが、サムロツオは殺氣立つてアイヌ語で口口に喚めきながら典子に摑みかからうとする仲間を、兩手を擴げて制した。

「いかん……、よせつ……、亂暴しちやあいかん。相手は女性だ。亂暴しちやあいかん」

そして、奥の廊下へつづく廣間の入口に何を見つけたのか、彼は右手を鋭く指差して叫んだ。

「あツ……、西村が居る。韮崎が居る。彼處に嘘つきの和人たちが居る」

指差された其の位置には、急を聞いて慌ただしく酒場のある部屋から駈けつけて來た西村が、彼自

身の策謀の失敗を知つてきよとんとした姿で
「お前達何しに來たのだ。歸れ歸れ、どうして私の言ふことを聞かん」と、慌てた。
だが、その西村は憤怒によつて赭くなつた傳右衛門の激しい叱咤をうけた。
「西村、巡査を呼べ、巡査を……」
「はい」
西村は走り去つた。アイヌ族の青年達は韮崎の前へ走り寄つた。
「韮崎のニシパ……。あんたは私達に死ねと言ふのか」
「何ツ……、お前達は何の用があつてこの東京へ出て來た。何の必要があつて私の宴會をぶちこわしに……私に恥をかかせに來た」
「去年はあなたの開發會社が旭川で私たちを追ひ出した。今度はあなたの鐵道會社が新らしい私たちの部落を追立ててゐる」
「そんな事は私は知らん……、去年の話は納得づくだ。今度の話は西村にまかしてある」
「卑怯者ツ」
サムロツオは咽喉も破れるやうな聲で叫んだ。彼の制止も間に合はず、彼の仲間は暴力を以つて韮崎に挑みかかつて行つた。それを澤田が防ぎ、宴會の手傳ひに來てゐた社員達が防いで小ぜりあいが

起つた。

「やめろツ、亂暴しちやいかん」サムロツオは必死になつて亂鬪を引き分けやうとして、血迷つた社員の一人に毆られた。彼は憤怒してその社員を床の上に叩きつけた。其處へ巡査が駈けつけて來た。何時の場合にも明治政府の巡査は强い者の味方でしかなかつた。內地人もアイヌ族も弱い者は必らず捕まつてしまふ。……アイヌ族の青年達の面にさつと恐怖の色が走つた。

「逃げろツ」サムロツオは叫んだ。

彼等は廊下や、窓から散り散りに逃げ去らうとして或る者は捕はれた。

その醜くい爭鬪を、冷笑の內に、輕蔑の眉をひそめ、他の多くの物見高い貴公子たちの嘲笑の群に交じつて眺めてゐる淺子夫人の姿を……、まるで赤の他人のやうな冷たさで眺めてゐる母のその姿を……、典子は見た。この廣間の床が裂けて、そのまま大地の底へ墜落してゆくやうなはかない悲しさだつた。

彼女の周圍には誰も居なかつた。彼女は廣間の中央に身動きもせずに佇ずんだままだつた。彼女の下半身は、彼處で怒號してゐる父への憎惡と、他人行儀に冷笑してゐる母への憤激と。取りかへしのつかない恥辱をうけた彼女自身の悲しさの爲に、押さへても押さへても押さへ切れぬ激しい身慄ひにおそはれてゐた。心は精神的な打擊の爲に虛脫してゐた。

その時、靜かに床を踏む靴音がして、彼女の傍に立ち留つた若い紳士がある。この立場に居る典子に話しかける人間は、彼女と同じ恥辱を分ち合ふ人間でなくてはならない。

その歐米的な敎養を身につけたといふ青年、園井克己は靜かに典子に話しかけた。

「典子さん……、園井克己でございます。紹介もなしにお言葉をかける失禮をお許し下さい」

彼はまだ廣間に多く殘つてゐる人々の、新らしい好奇心の注視を浴びながらていねいに一禮した。

典子は激動をうけた心を强いて平靜に押さへつけながら會釋を返へした。しかし、その相手が誰であるかを思ひ出せない程、實は氣持は無慘にもうちひしがれてゐた。

「典子でございます。はじめまして……」

だが、滿座の誰もが話しかけてもくれないそのなかで、彼女にたつた一人だけ言葉をかけてくれるその紳士の氣持が、心にしみ入る程の嬉しさだつた。彼女が若し此處でこのまま氣を失なふやうなことがあるとすれば、彼女は喜こんでその腕の中に倒れるであらう。

「典子さん……、さあどうぞ。あちらへ行つてお身體をお休め下さい。踊りでお疲れになりましたでせう」

「有難う存じます」

しみじみとした言葉に嬉しさを感じながらも、それを嚙みしめるだけのゆとりもない典子はふらりむ

きもせずに無表情に答へた。

「……お父様の事をお恥じになることはないのですよ。あなたには關係のない事なのだ。またたとへば關係があつたとしても、事業をやつてゐらつしやる人には此の位の事は有勝ちなことなのです。或はお父様の商賣仇、たとへばさういふ人達がお父様を傷けやうとするのかも知れませんからね……これをあなたの恥辱と感じる必要はない」と、言はれて

典子の花びらのやうな唇がひくひくと慄えて、今にも涙が頬をつたひさうになつた。だが彼女は泣くまいとして懸命になつてゐるのが克己には判つた。

「お泣きになつてはいけません。あなたにも似合はない」

「私……、私、泣きませんわ」

典子は遂に克己の方をふりかへらなかつた。優しい心を持つ人だとは思ひながらも、その優しい青年が誰であるかを遂に見なかつた。そして、彼女は飽くまでも嬌慢に、しかも言はれる通りに涙も流さなかつた。だが、そのまま此の狀態を耐えてこの場に居るのには餘りに心が傷みすぎてゐた。だから彼女は其處からゆつくりゆつくり歩き出した。廣間の入口で社員達や澤田や西村に取り圍まれてゐる傳右衛門の傍へ行つた。

「お父様……」

しかし、傳右衞門は昻奮してゐて西村を叱りつけるのに忙しくてふりかへらなかつた。その怒號しつゞける父に呼びかけて何を言ひたかつたのか、典子は自分にも判つてはゐない。父親にだけこの悲しみを訴へたかつたのであるかも知れないし、或は父の不道德な事業のやり方を面罵したかつたのかも知れない。彼女はふりかへりもしない父親の横顏にジーツと長い間視線をそそいで無言のまま立ちつづけた。

その後姿を克己は見てゐて哀れな娘だと思つた。

やがて典子はちらほらと立ち去つて行く人影のある廣間の入口から、玄關の方へ向つてゆつくり歩いて行つた。しかしその特長のある高慢ぶつた、兩肩を張り胸をはつた歩き方は、決して、悲しくも決してくずしはしなかつた。

會場の玄關から塀の内側いつぱいへかけての櫻の老樹の花の雲は、この會場へ來た時と同じやうに蒼いアーク燈の光りを浴びて、ほの白い匂ひの幕をたなびかせてゐたが、その蒼白い美くしさは、まるで今夜の自分の心のやうに悲しい眺めだと、典子は思つた。

「御歸館でございますか」

典子の姿を見て屋敷の馬丁の一人が走り寄つて來た。

「お一人でお歸りでございますか」

「ええ、先に歸ります」

彼女は出來るだけ平靜に答へた。

馬車を玄關へ横着けるために走り去らうとする馬丁を留めて

「そちらへ行きます」

さつきの騷ぎ以來、呼びよせられてそのあたりを警戒してゐる巡査たちや、彼等の馬丁や車夫が車を玄關にまはすを待つて佇ずんでゐる今夜の貴賓たちに、また何か言はれるのが氣が重く、典子は砂利道を歩いた。街路にまではみ出して供待ちしてゐる馬車の行列の、その中の一臺、黑塗りの定紋付の扉を馬丁が開けたので、典子はスカートの裾をつまみ、踏段に足をかけやうとして、ぎよつとして身を引いた。……内部に誰かがうずくまつてゐる。

馬丁はさつきからずつと玄關の供待部屋にゐたらしく何も知らぬ表情だつた。

——殺されたつていい。今よりはましかも知れない。

典子はそのまま首をかがめて座席の中へ入つた。馬丁が扉をしめた。彼女が眼をとぢて身を固くしてゐると、馬がただらを踏む音が聞え、待つ間もなく、輕いわだちのきしむ音と共に馬車が動き出すのが判つた。箱型の車體には幌がかかり、馬丁の坐してゐる馭者臺は外部に露出してゐて、主人と馬丁のお互の聲は先端がラッパ型に開いて管に依つて通じるばかりで、何の交渉も持たれてはゐなかつ

た。

カツカツカツと間斷なく聞えるひづめの音に交じつて、傳聲管を通じて馬丁の聲が聞えて來た。

「お孃樣……、さつき御宴會を荒らしに參つた者がございましたさうですが、その亂暴者がまだ全部捕まつては居りませんので、どうかお氣をおつけ下さいまして……」

さう言へば、夜の町のあちこちで巡邏の鳴らす呼笛が聞えるのは、會場から逃れ去つたアイヌ族の青年達が追はれてゐる氣配なのでもあらうか。

典子の返事がないので年をとつた馬丁の聲は重ねて「どうぞ物騷でございますから、お氣をつけ下さいまし(」怖びえたやうに聞えて來た。

暫らく行くとそのあたりまでは警戒線を擴げてゐないのか、呼笛の音が聞えない道を馬車は走つてゐた。

典子は閉ぢてゐた眼を開いて、座席の床の敷物の上にうづくまつてゐる人の影に視線をおくつた。狹まくるしい所で典子の身體に觸れるのを恐れてでも居るやうな、そのアイヌの青年は、怖れと疑惑との眼でさつきからずつとさうしてゐたらしく、典子を見凝めてゐた。

典子は無表情に眼をそらせてジツと前方を見凝めたまゝ、押し殺した聲で

「あなたは何處まで行けば安全なのです……」

ひずめの響きとわだちのきしみの中で、サムロツォは口をつぐんでうなだれてゐた。

「あなたの都合のいい所で下ろしてあげます」

「濟みません。私はこの馬車があなたのだとは知らずに……」

「靜かに仰有いまし」

「私は悪い事をしたとは思ひません。しかし、あなたが私を助けて下さつたのは意外でした」

意外なのは典子も同感であつた。恐らくは摑みかかられるであらう、若しかすると殺されるかも知れないと恐れてゐたこの青年は、ついさきがた彼女自身の右手で頬を打たれたのにも關はらず、默つてゐたら永遠にそこにうずくまづてゐたのかも知れぬ程穩和であつた。しかし乍ら、彼は典子に死ぬ程の恥辱を與へた敵なのである。その敵が氣怖じしてゐるのならば、こちらが逆に警察へ突き出してやる事も出來るのである。だが、典子の嬌慢な誇りがそれをさせなかつたのである。彼女は相手の感謝……、思ひがけない人に意外な恩誼を蒙むつたその視線を意識しながら、それを無視してゐた。それを意識したり、それに神經を使ふには餘りにも強い打擊を打けてゐたのだつた。

「あなたの都合のいい所でお降りになつて下さい」無表情な聲で言つた。

「あなたは私を捕まへさせないのですか」

「……」

典子は答へなかつた。さつきこの青年の頰を打つたばかりだのに、その上にもつとひどい目に合はせる。あの厭な巡査などに引き渡す……、そんなにまで非道い女だと、この青年は思つてゐるのだらうか。

「……」沈默がつゞいて……。

「有難うございました。このあたりからなら宿へ歸る道が判ります」

サムロツオは小窓から夜の道を見て、其處に見覺えがあるらしく聲を低めて言つた。

典子は彼女の膝にかけた毛布を彼に默つて渡し、命令するやうに、

「その姿では眼立ちます」

サムロツオも無言で典子の冷淡な親切をうけとつた。彼は禮の言葉を述べやうとして焦せつたが、何も考へつかなかつた。唯一節に純朴なだけである彼の心が譯もなくその兩眼に淚をみなぎらせて

「內地のメノコにも、あなたのやうないい人が居る……。あなたはアイヌのやうにいい人だ……」

そして、慌ただしくシャランベのうちふところから、刺繡をした細長い小布を取り出して典子の眼の前につきつけた。

「熊狩りに行く時に私はこれを頭に卷くのです。私のお守りです。あなたに上げます」

熱心にすすめるその眼が美くしく澄んでゐた。

「お嬢さん、あなたは美くしい、あなたはいい人だ……。左様なら」

典子はその小布を無言で受けとつた。その時はじめて、そのアイヌ族の青年の純朴なたくましい眼を見た。だが……。

「柏原……」彼女は傳聲管に呼びかけた。

「忘れものをしました。停めて下さい」

速度がゆるむのを待つて扉をあけ、そしてバタンとしめた。

「いえ、ありました。思ひちがひです。やつて下さい」

再び速度をはやめる馬車、その彼女の座席の後尾の窓に、逃れて降りたアイヌの青年の視線を感じながら、典子はふりかへりもせず……、そのまま眼を閉じて、ベルベットのマントの襟に深く顔を埋めてしまつた。その右手の指が何の意識もなく、たつた今、名も知らぬ青年がくれたアイヌ模樣の刺繍のある小布を握つてゐた。

わだちのきしみの音に搖れながら走つてゆく馬車の座席の中に、ほのかな花の匂ひがただよひはじめた、それは典子の衣裳にふりかけた香料の匂ひかも知れなかつた。しかし、それとはちがふ鈴蘭の花と、ライラックの花の香りの入り混り……、或は、典子の右の手の指が握つてゐる、アイヌの青年の頭飾りの小布からただよふそれかも知れなかつた。

花の灯影の　ゆらめきに
くだけて散りし　わが涙
心むなしき　なきがらに
アイヌの里の　鈴蘭が
ほのかに匂ふ　夕まぐれ

馬車が遠くへ走り去り、町角の坂をゆつくりゆつくり曲つて登つてゆくのを、サムロツオはいつまでも佇ずんで見送つてゐた。

本郷の下宿

「松坂さん、お客樣ですよ」
といふがさつな聲と同時に襖があいて、其處に下宿屋のお内儀さんが顏を出した。
「お客さん？　ほう誰です」
俊政は學生時代からずつと使ひつづけてゐる勉强机に向つてあぐらをかいたままの姿で、身體を捻じ向け、讀みかけの本に栞を挿さんだ。その栞は蝦夷松の薄い板片にアイヌ模樣を彫刻した娘のかんざしのやうなものだつた。
「誰ですか、通して下さい。かまひません」
「さあ、誰でせう。當ててごらんなさい。
今日は松坂さんに奢つていただかなくちやなりませんよ」
じらすやうなお内儀さんの言葉に
「今日は日曜日だし、友達はみんな閑なわけだから見當がつかないなあ……、山下ですか」と、彼の勤務先である朝野新報の、たしか今日は非番で休んでゐる筈の同僚の名を言つた。

「いいえ。女の方ですよ」

「女？　妙だなあ……、そんな、女なんて來る筈がないのだが」

彼はふと本に挿さんだ栞に手をふれて微かに赭くなり、その栞をくれた主のを事考へた。だがその人は勝手も判らないのに絕對に此處へは來る筈はないのだと思つた。

「なあんて眞面目な顏をしてとぼけて。どつちにしたつて奢らなくちやあ承知しませんよ。他の下宿人の方にも皆にさう言つておきますからね、甘豆かせいぜい高いもので大福で結構。鹽瀨のちまきを買へとは言ひませんからね。ハツハツハツ……」

寒い頃にはからつきし意苦地のない悄氣かたをしてゐたお內儀さんだつたが、四月の花見がすみ、五月の聲をきき、此の安下宿のたちならぶ菊坂界隈のせまくるしい路に、陽炎がたつ頃になると、俄かに元氣を盛り返へして來て、何か事ある每に若い下宿人の學生や、俊政のやうに學校時代からそのまま居ついてゐる勤人をからかつては、快哉を叫んでゐるのだつた。

彼女がたてつけの惡い襖をしめて、古びた階段をパタパタと上草履の音をさせながら下りてゆく音を聞くと、

「誰だらう、女の客といふのは」と、俊政は考へた。

母親の菊からは三月の終りの頃に、韮崎の鐵道會社の事でアイヌ族の若者たちが東京へ上るといふ

意味のことと、例によつて、官員樣か實業家になれと哀願した手紙が來たつきりで、その返事は出したのだが、それ以來、あんなにしげしげと、老ひの身であるのにもかかはらず手紙をよこした母が、ぷつつりとたよりをよこさなくなつてゐた。女だと言ふから或は母ではあるまいか、手紙が來なかつたのは上京の支度や何やかやで……。だが、それならば、あの人の好いお内儀さんが彼に問ふまでもなく、今迄の例によれば、帳場のあたりか、階段の下あたりで、あたり近所かまはぬ大聲で、さも喜こびなさいよと言はんばかりに知らせてくれる筈だつた。

俊政はこの春、學校を卒業した時、彼の學友達が官界を第一に目指し、其處には見込のないと自ら卑下する連中でさへ實業界にいい地位をねらつてゆく中に、彼だけは、世間の人が性の惡い野犬だと稱し、ごろつき稼業だとさへ誤解する新聞社に衣食の道を求めた。彼は母親の菊が、彼の幼ない頃から耳に栓をかいたくなる程敎へ込もうとした韮崎傳右衞門といふ彼の實父への復讐の義務を、幼ない頃は眞劍になつて、その通りに實行するつもりでゐたが、今ではそれを馬鹿氣た事だと思ふやうになり、唯それだけの爲に官員樣になり、實業家になるといふ愚かさを、母に手紙を出して拒否してしまつた。しかし現在では除籍された母について松坂姓を名乘つてゐる彼としては、彼の母の同意も得ずに强いて離緣してしまひ、立場の弱い女の氣持を、其處までに歪めさせてしまつた、韮崎といふ父親に道德的な憤りを感じてゐたから、つまり彼は世の中のあらゆる弱者の味方になる氣持から新聞記者

といふ職業を選んだのだつた。

昨四月の中ばの韮崎家の大舞踏會の夜の醜態を聞きつけて、それが母の知らせて來たアイヌ族の青年達だつたのかと、直ぐに記事をとりに走り、先輩の記者達の助手となつて働いたのも彼であり、その翌々朝の新聞で大々的に、韮崎傳右衛門を責め立てる記事を扱つたのは、彼の居る朝野新報であつた。

勿論俊政としては母の言ふ如く、それを機會に個人的な復讐を遂げる氣持ではなく、單なる一個の社會人としての正義感から父親である韮崎に社會的な刑罰を加へやうとしたのである。しかし、新聞社にもそれ相當の缺點があり、俊政の思ふやうに社會正義一筋によつて成立つてはゐなかつたから、彼の社の主筆は實父を相手に攻撃の鋒を向ける松坂俊政がわが社に在ることをでかでかと書き立て、しかも、新聞の賣れ行きをよくする爲に、あの夜の事件で警察に留置されたアイヌ族の青年の一人、上川サムロツオの妹が、宿に殘つてゐるのを引き受けて一切の面倒を見る事にして、他の新聞へ記事の材料を渡すまいとした。

俊政の立場は苦しかつたが、しかし彼は新聞社の命令の通りにはマカリナの行動を制約せず、三日に一度か二日に一度、彼女が寂しくなる頃を見計らつては宿へ訪ねてやつてゐる。そのマカリナの與れた蝦夷松の頭かざりが、栞となつて彼の机の上の本に挿んである。

訪ねて來た女の客が母でなかつたとしたら、マカリナの他には心あたりがなかつた。馬鹿氣た噂をされるのを恐れて、昨日宿へ訪ねてやつたばかりの今日、日曜日ではあつたが俊政は態と訪ねて行かなかつた。或は他に知り人もない寂しさから、敎へてやつた所番地を賴りにして彼の下宿を訪れて來たのであらうか。

俊政は五月の風の爽やかさを訪問客に御馳走するつもりで、街路に面した窓の障子をいつぱいに開いた。そして、ふと街路を見下して其處に、此の薄汚れた下宿街にはふさはしからぬ何處かの屋敷のおかかえ馬車が停つてゐるのを見た。彼の下宿の軒先にである。

——典子だ。

俊政の腦裡には、その瞬間に、このところもう四年間も逢はない彼の驕慢な妹の、美くしいがしかし何の兄妹愛も持てない顏がひらめいた。

——典子が何をしに來たのだらう。

丁度その時「こちらでございます」といふお內儀さんの聲が聞えて、廊下の襖があいた。……其處には、四年前にたつた一度逢つたきりの典子が、あの時よりはずつと成熟した娘となつて佇ずんでゐた。

「さあ、どうぞ遠慮なくお入り下さいましよ。松坂さんもきつと待ちかねてゐらつしやつたんでご

ざいますよ。今日の日曜日をお約束の日になすつたりして、ほんとにようございましたねえ」

典子の傍をすり拔けるやうにして部屋へ入つて來て、下宿のお内儀はべらべらと御あいそを並べながらも、甲斐甲斐しく俊政の座蒲團を客に向つてすゝめやうとしたが「ねえ、松坂さん、これぢやあ餘り汚れてるから、階下から私んちのを持つて來ませうねえ。それからお茶も今持つて參りますよ。さあお孃樣、どうか御入り下さいましよ」

と言はれて、無言のまゝ座敷の中へ入つて來た典子が、俊政の他處他處しい凝視を浴びて坐りもならず、彼女もまた他人行儀に、そしてまた高慢ちきにそのまゝ其處に佇ずんだ。

「小母さん……、座蒲團は要りません。お茶も持つて來る必要はありません」

「まあ……、どうしてえ?」

意外な俊政の見幕に、お内儀は坐つたまゝきよとんとして二人の姿を見くらべた。

「まあ、まあ、此の前が喧嘩別れなんですね、きつと……、いいぢやありませんか、仲好くなさいましよ。今、お茶を持つて參ります……。松坂さん、こんな綺麗なお孃にあたり散らかしては罰があたりますよ」

下宿人の許へ美くしい娘が訪ねて來たのを我事の如くに喜こぶ下宿のお内儀の心理は科學的には分拆する術もないが、しかし、氣持の好い浮かれかたで、彼女は襖をしめて階下へパタパタと去つて行

つた。そして彼女は帳場のあたりで新聞を讀んでゐる書生つぽに「松坂さんの所に來たお客さんは何處の人だらう。馬車に乘つて來たのだよ、松坂さんその內に入り婿になるのかも知れないね」と、囁やいてゐた。

その間、俊政も典子も無言のままだつた。典子は座蒲團のない疊の上にきちんと膝を折つて坐つてゐた。

俊政が四年前に典子に逢つたのは、その年の年の暮だつた。その頃はまだ、菊が東京の旅館で女中奉公をしてゐたので、學生であつた彼は一日の暇を貰つた彼の母と共に銀座の勸工場でささやかな買物をしてゐた。そしてそれが終つて街路へ出た時、彼は年の市の雜沓の中を通りかかる典子を見た。

「典子……」

と、俊政は、たしかに見覺えのあるその娘を懷かし氣に呼びとめた。菊は、彼女等が黒崎家を去つて以來、平然として父親と共に暮らし、新らしい母になついてゐるらしく見える典子を憎んでゐたので、彼女の連れて出た息子が前の家に殘した妹と逢ふのを喜ばなかつたが、しかし、俊政は學校へ行つてゐる頃の典子としめし合はせては時々公園などで遊んだ事があつた。其の後どうしたものか典子は兄との約束を守らなくなり、姿を見せなくなつたので、最近はもう二年ばかりも逢つたことがなかつたのだつた。その年の暮、典子はたしか十七才だつた。

俊政に呼ばれてふりかへつた典子は、同時に母親の菊の姿を見た。その顔にはありありと困惑の表情が流れてゐた。

——何處かこの近くに新らしい母親が居る。

と、菊は女親らしく敏感にさとつてゐた。だが俊政はそれには氣がつかなかつた。

「典子……、お母さんだよ。御挨拶をおし」

俊政は菊の手を引かんばかりにして、典子の前へ押し出した。

「嬉しいだらう、典子……。お母さんに逢へて……」

典子は彼女の身體に行きあたつては人々の往きすぎる雜沓の中で、にこりともせずに母親の顔を見つめてゐた。その面からはもう困惑の表情は消え去つてゐた。

「倖はせなのかい」と、菊にたずねられると、「ええ、倖はせです」はつきり答へた。

菊は意地になつたらしく躍起になつて

「淺子といふ人は厭な女だつて言ふぢやないか」つい下卑た言ひ方をして「可愛いがつてくれるのかい」

典子は、その頃からすでに美しくととのつた美人型の眉をひくりと寄せて、菊の方を蔑すんだやうに見た。

「ええ、とても可愛がつて下さいます」
その間にふところから出した手帳の切れはしに、本鄕の下宿の所書をかきしるして
「此處に居るのだよ。十五日に來ればお母さんにも逢へる」と、俊政がその頁をちぎつて渡すと、
典子は、何か汚らはしいものにでも觸れるやうに急いで帶の間にそれを挿さみこんだ。
「典子さん、此處にゐらしたのですか、探しましたよ。どなた此の方たちは」
瀧子夫人が人混みの中から現はれたのは此の時だつた。典子は白々しく
「いゝえ、知らない方ですの」
「さう……」
と、瀧子夫人と典子は、俊政や菊たちの方を振り向きもしないで、雜沓の向ふの方へ去つて行つてしまつた。
典子はその後この下宿へは一度も顏を見せたことがなかつた。あれ以來逢はない典子なのである。
その典子が四年後の今日になつて何の用件があつて來たのだ。
長い間の沈默の後に、典子はポツンと、
「此處には、お母樣はゐらつしやらないのですか」と、言つた。
「お母樣？」俊政は机の前に坐つて典子に背中を向けたまゝ、本の頁をめくつてゐた。讀んではゐ

なかつた。

「君のお母様は君のお屋敷にゐらつしやるのぢやないのかね」

典子の眉がひくつと寄せられた。

「ええ、お母様は私の家にゐらつしやいます。……私が伺つてますのはお兄樣と私の……」

「お兄樣と私の？……僕には妹なんかない」大人氣ないとは思つたが行きがかり上さう言つた。

典子は暫らく默つてゐたが「ええ、ですから」と、切口上で「私の伺つてますのはあなたのお母様のことですの」

「ああ僕のお母さんか、僕のお母さんなら、今は北海道の函館といふ港の町で……」

「北海道？……」

典子の面を悲しげな色がさつと走つたが、彼女はそれを瞬間にして何氣なく消して「さうですの、北海道にね」

「さう……、お母さんは北海道の函館の、瓢屋といふ旅館に勤めてゐられるよ。お母さんは勝氣な人だからね、韮崎傳右衞門といふ君のお父さんに捨てられた後も、決して悄氣ちやゐないんだ。僕を一人前にする爲にね、稼ぎの多い旅館から旅館に……」

俊政はふと勝氣なうちにも、年齢からくる肉體の疲れを見せてゐるにちがひない菊の姿を想像して

胸の中にこみ上げて來るかたまりをぐつと呑み込んだ。

「勿論、昔の婚家に殘した娘の事などは、恐らくは忘れてゐるんぢやないかな」

「恐らくね……私がさうなのですもの……」

言葉だけは、心の動きからはなれて、兄に向つて惡たいを吐いてゐた。それは俊政にしても同じで典子の心が悲しくもつれてゐるにちがひないと知りつつ、或は珍らしくも肉身のふところの溫かさを求めて來たのかも知れないのにと思ひながら、今はかたく閉ざしてしまつた心の扉を、彼はいつこうに開こうとはしなかつた。

俊政の机の上の置時計が秒針のきざみを聞かせてゐる長い時間、典子は無言で、陽にやけて褐色になつた疊の上を見つめてゐた。そして……。

「私、あの時敎へていただいた此處の所番地を目あてに、今日はお訪ねしましたのよ」

その折角の心の橋渡しを

「と言ふと……韮崎傳右衞門さんや、君の……、君のだよ。君のお母さんと樂しく暮らしてゐる間も、あの紙つきれは偶然にも失なはれずにあつたといふわけだね。」冷酷に受けとめた。

「ええ……、全く不思議にもね……」言葉はふたたび冷たい刄物の切先となつた。

「それで？」

「それでと仰有いますと」

「それでどうして此處へ來たの？」

「……………」

「韮崎典子は、韮崎傳右衞門といふ富豪の家の娘なんだ。その富豪の家の富豪の家らしい生活を愛して、それに生甲斐を感じてゐる娘なんだ。君は歸つた方がいい。こんな所へ來ないで……。君のお父さんをやつつけて、あの舞踏會の夜の醜體をあばいたり、アイヌの青年たちに味方をした記事を書き立ててゐるのは僕の居る新聞社なんだぜ……。僕は勿論、復讐とかなんとか、そんなけちな根性でやつてるんぢやないんだが……」

兄と妹の心と言葉は、結び合ふことを欲しながら遂に結び合ふことが出來ず、悲しくもつれ合つたままぷつつり切れてしまつた。

「さうね……、私、どうして今日は此處へ來る氣になつたのか？、何かの間ちがひだわ、きつと……

……」

ホホホ……、と、典子は口をハンカチでかくして笑つた。そのハンカチはそれ以外に彼女の悲しみをも隱くしてゐる。

「私、お暇しやうかしら……」

典子は元氣よく……、その姿だけは全く元氣よく立ち上り、「このあたりの家つて隨分汚ないのね」と、憎まれ口をきいたりした。

そこに佇ずむ典子の胸に、窓の外を吹きすぎる五月の風は何かしら物悲しくやるせなく。下宿町の陽あたりのせまい路をゆつくり通つてゆく苗賣りの聲は泣きたい程に哀愁にみちてゐた。

結局は用件をはたさずに、憎まれ口だけをきいて歸つてゆく典子は、何が言ひたくて四年間も逢はない俊政の許へ訪ねて來たのか……。

婚約を前に

1

西村は舞踏會事件に關する韮崎家の醜聞といふ新聞ダネと、留置されたアイヌの若者達の悲劇を東京に殘して、雲解の北海道へ去つてしまつた。彼もまたあらゆる醜聞や悲劇を默殺して冷酷にするすると延びてゆく鐵道線路の……つまり、建設時代の巨大な歯車の唯一個の傀儡にすぎないのである。彼は事情の如何に關はらず、冷たいレールの先端に立つて走らなければならない。

ある日、四谷の韮崎御殿として有名な、彼の自邸の宏大な築山を背景にして、傳右衞門のふてぶてしい笑ひ聲が、泉水に跳ねる緋鯉眞鯉の群がりを愕かせてゐた。

春の日の來客は澤田長官である。彼はもう北海道長官ではなく、今は本省の隱居役に左遷されてゐるのだつたが。

「笑ひ事ぢやないぞ……、僕にしてみれば双六の振出しに戻つて、何時サイコロが振れるか判らない身分になつたのだからな」

その澤田の神經質な苦笑を見て

「ほんとうにあなた、そんな無遠慮な聲でお笑ひになつて、澤田様に對して失禮でございますよ」

淺子夫人がたしなめた。

「心配するな……、北海道長官の古手の一人や二人、この韮崎傳右衞門が何んとでもしてやる」

彼はまたしても笑つた。

傳右衞門といふ男は、あの舞踏會事件以來連日の新聞の攻擊を、まるで新聞などは讀んだこともない無智盲昧な人間のやうに平然として受け流してゐた。彼は仕事を好み、その仕事に沒入して行く事にだけ興味を感じ、その他の事柄には全然無神經な機械のやうな男なのであらうか。彼は彼自身の幼友達である澤田の紹介に依つて、淺子夫人の實家に金を貸し、その傳手に依つて中央の財界に乘り出し、今その眼の前に澤田をおいて、彼自身の犧牲となつて中央政府から處罰的な待遇を受けた彼を笑つてゐるのである。

「いや、西村といふ男は非常にしつかりした奴なのだが、どうも今度のアイヌ達のねばり強さには負けたらしいよ。それに去年と同じで、どうも新聞どいふ奴がねえ」

「君の方には政府から何も言つて來なかつたのかね。」

「來たよ……、開拓への協力も結構だが、北海道舊土人保護地法を遵守することを忘れるなといふ意味の通牒がね」

「………」

「だが、儂に言はせればだ……、さういちいち細かい所にこだはつてゐたのでは、何も仕事は出來やせんと言ひたいね。此の間の晩餐會で儂がその說を吐いたら、文部卿は厭な顏をしとつたが、陸軍卿は大きにその通りぢやと贊成しとつたよ」

「しかし、人道問題だからね、君が其處まで行き屆かなければ、せめて君の手代が氣を使ふべきぢやないか」

「……と、言ふ言葉が、旭川事件の共謀者殿から出て來るやうになつたかね、ハツハツハツ……」

「いや、あの時だつて君……、僕は……」

絕えず卷き添へを食はされては損をしてゐるこの幼友達は、傳右衞門の押しの強さを恨めし氣に眺めた。

「あなた……」

と、此時までひとり離れて池の鯉に餌を與へてゐた淺子夫人が

「松坂俊政といふ人が居なければ、新聞もあれまでには騷がなかつたのでございませうね」

傳右衞門にとつては痛い一刺しの言葉だつた。彼は妻の言葉の裏に流れる冷い意味を每度の事ながら不愉快に受けとつた。

「馬鹿な……。子供が親を責め立てる。それを世間が面白がつて囃し立てる……。お前もその仲間かね」

「でも、あなたがその原因を作らないやうな方でしたら、立派でございましたと、私は思ふのでございますよ。ホツホツ……」

澤田は韮崎夫婦の永年の感情のもつれを知つてゐたから、彼の判斷で、その原因であると思はれる典子を、園井伯爵家へ嫁がせることをかねてから夫婦に向つてすすめてゐたのだつた。

「またはじまつたね……」と、彼は笑つて

「その意味から言つても、典子さんを早やくお嫁にやるに限るなあ……」

彼は話題を轉換させやうとした。もうひとつその理由を言へば、現在逆境にある彼としては、園井克己の懇望に應じることによつて、彼はもう一度、その父である伯爵の口添へを得て、世の中へ浮び出なければならないのである。

彼等はその話をする爲に、傳右衛門が自慢する洋風の應接室へ行つた。

其處にも傳右衛門の、成り上り趣味がはびこつてゐて、所謂鹿鳴館式の豪華な椅子や卓の下には、北海道産の黒熊の毛皮が敷かれ、煖炉の下には、舶來の置時計が無關心に時を刻んでゐた。

「ほんとに先日のことは、親としては申し譯のない醜體を典子に見せたわけでございますからね……

……」
と、淺子は澤田の言葉に賛意を表し「今日は珍らしく自分の部屋に居るやうでございますから……、と言つて、直ぐに返事をいだしますかどうか判りませんが」
傳右衛門の同意を求めて後、彼女は典子の部屋へ向つて去つた。
淺子の去つた後の扉を見つめてゐる夫の眼には、彼の事業の華やかさに比して、氷室のやうに冷たい家庭生活への呪咀があつた。言葉はなくとも、それの判る澤田が
「俊政君にも困つたものだな……、勿論、私情でやつてゐるわけではなく、大義明分を考へての行動なのだらうが……十何年前の君の私生活の反應が、今になつてかへつて來たのでは、君も困るだらうが、淺子さんにしても面白くはあるまい。あの時の離婚が無理だつたのではないのかね……、今になつてそれを言つたつて仕樣がないが……」
苦笑しながら慰さめやうとした。
「……菊といふ女の氣性は君には判らんからな……」
傳右衛門は嚙み捨てるやうに言ひのけたが、
「澤田君」と、彼は突然語調をかへて「園井伯爵家ぢやあ、克己君をうちの婿には呉れまいかね」
「典子さんを先方へやらずに、克己君にこつちへ來て貰ふと、斯ういふのかね」

「つまりね……」

さりげない傳右衞門の、ふてぶてしい面がまへのなかに、澤田は不思議にも弱々しい人間の惱みを見た。

——この男は寂しがつてゐる。

と、澤田は思つた。

「どうしてだ？　典子さんを他處へやりたくないのか、父性愛といふやつか、今日は珍らしい日だ」

澤田は腹をかかへて笑つた。

「典子は若しかすると、儂を嫌つてゐるかも知れんぞ……」と、傳右衞門はかつてただの一度も典子としみじみと語つたこともない。彼の日頃の忙がしさを考へてゐた。

——父親の得手勝手かも知れないが

と、彼は考へてゐた。

「事業の爲になら、他人が首をくくる位は平氣で見てゐる奴が、不思議な事を言ふぢやないか」

だが、傳右衞門の意に反して、澤田は自分をもう一度世の中に出す爲には、典子を園井家へ嫁がせるやうに努力しなければならないのである。彼女が喜こんで嫁いでさへくれるならば……。

傳右衞門は相手のその氣持を知り拔いてゐて、そして苦澁にみちた表情で

「つまり、强いだけで何んのとりえもない喧嘩犬がだ、自分の生んだ小犬だけは可愛くて仕方がないといふ……、さういふ氣持かも判らんがね」自分で嘲けるやうに笑つた。

「韮崎傳右衞門は典子さんといふ味方が欲しいといふわけなのだね、この屋敷の中の私生活においては……。さうだらう、淺子夫人との間がうまくいかんのでね」

「…………」

「さう言はずに、何んとかして夫婦和合の方法をこうじるのだな」

澤田はなだめるやうに言つた。

結局はその方が典子自身にとつては幸福である……と、信ずる方法を澤田も傳右衞門も執らうとしてゐるのだが、しかしそれは、その兩つの方法が同じやうに双方とも發案者自身の身勝手から割り出されたものであつた。傳右衞門は典子といふ血を分けた娘を自己の味方とすることによつて彼の夫婦生活の寂しさをまぎらはせやうとするのだし、澤田は典子によつて己自身が浮び上ることを考へてゐる。

……と、言ふ意味から言へば淺子夫人こそが、實は典子の幸福を眞劍に考へてゐるのかも知れなかつた。

彼女は典子に向つて、

「私はあなたが好きではありません」と、はつきり言ひ切つた。

「あなたもきつと、私に對して母親としての愛情をお感じになつてはゐないと思ひます。」

だからあなたは御結婚なすつた方が、きつと幸福になれるのだと私は信じる。それには園井伯爵家といふいい嫁ぎ先がある。あの家庭ならば私は責任をもつて、あなたを幸福への道へ送り出したものとして、安心する事が出來る。

淺子夫人は典子に向つてその意味の言葉をはつきりと述べた。彼女は眞劍だつた。

何時のまにか庭の築山のあたりには夜が薄闇のとばりを降しかけてゐて、ほの明るい薔薇の花の形をした灯の下で、典子はその美くしい頬に薄笑ひを浮べながら、さつきからしきりにオルゴールをいぢつてゐた、母親の眞劍な言葉をきくと言ふよりも、オルゴールの小函の中から流れ出る音樂の音色をたのしんでゐるといつた姿だつた。

「典子さん……、でもこれは、あなたの一生の内で一番大きな問題なのでございますよ」

何んといふ不眞面目な娘なのだらうと、

「そんな、薄笑ひをしたり、惡戯をしたりしながらでなく、眞面目に返事をしていたゞきます」

淺子夫人はむつとした腹立たしい感情を、遠慮もなく表情に現はしてゐた。それに答へるやうにガ

ダリ……、オルゴールの小函の蓋が必要以上に荒々しく閉ぢられて、典子の殊更に生眞面目に口をつぐんだ顔が、淺子夫人の方へ向つてきつと振り向き、眼だけが相手をさげすんだやうに笑つてゐた。

「典子さん……、私は無理にと申してゐるのではございません。結婚といふ重大な事柄を、あなたに無理に押しつけるやうな事があつてはならないからと、特に注意して、あなたの心からの御返事を聞きたいと申してゐるのです」

「判つて居ります。ですから……、お母様にもう一度はつきり御返事を申し上げます。」

典子は改まつた切口上で、それも斷じて負けまいとする敵意をこめて

「私は克己様の許へ参るといふ御返事をいたすつもりでございます。全くお母様の仰有い ます通り、お母様にもお父様にも愛情の持てない私が、さも愛情を持つてゐるやうな顔をして此の屋敷に留まつてゐるのは、お互に不幸でございますからね、私は克己様の許へ参るつもりでございます。その方が餘程幸福でございますから……でも。その前に、克己様にお眼にかかつて……誰にも立ち會つていただきたくはございませんの……、克己様に御承諾いただかなくてはならないことがございます。お母様、御返事はこれで宜しうございませうか」

淺子夫人は相手を見据えたまゝホホホと笑つて「よく判りました。では仰有る通りに、澤田様にお取次いたしませう」

しかし、彼女の唇は激しい怒りでひくひくと慄えてゐた。

――何んといふ不遜な態度、愚ろかな娘なのだらう。

それは彼女の夫傳右衞門との永年の確執にも關はらず、眞劍になつて典子の幸福を計らつてやつたのに、その誠意をむげに踏みにじつた相手への、若しもそんな無教養な態度をとることが出來るものなら、毆りつけてやりたいやうな憤りだつた。

――誰に聞かせたつて、人は典子といふこの馬鹿娘を責めるだらう。

淺子夫人のその憤りは、彼女が心から典子の幸福を希つてゐるといふ、その意味に於いては正しい。しかし彼女は二つの誤まちを犯かしてゐることを、自分で氣がついてはゐなかつた。

園井家へ嫁いでさへ行けば典子は幸福になる……、と、彼女はさう信じてゐる。だが、信じてゐるだけで、確實にその通りであるかどうかを彼女はまだ一度も考へて見た事がなかつた。典子の立場に立つて考へて見た事はなかつたのである。それからもうひとつ。自分は何時の場合にも典子に愛情を持たうと努力したのに、相手は生さぬ仲の母親である自分に對して、唯の一度も娘らしい愛情をもつて接しては來かつた。典子は自分になついてはゐない……と、彼女は彼女自らが家庭教師的な態度に誇りをもつてゐることを忘れ、自らの頭の好さを信じ切つて、はつきりと斷定してゐる。

果たして典子は、淺子夫人の努力にも關はらず、かつて一度も、夫人に對してなつかうとはしなか

つたのか。

それに就いては、典子は悲しい思ひ出を持つてゐる。四年前の年の市の賑やかな街で、兄の俊政や生みの母に出會つたあの時のこと。彼女は肉親のさしのばす愛情の手をふり切つて、淺子夫人に向つては「いいえ、知らない人なのです」と答へ、そして年の暮の街に肉親を捨て去つて、夫人と共に屋敷へ歸つた。

何故さうしたのか。

典子は彼女の生みの母を何處かへ去らせてしまつた父親が嫌ひだつたが、その父親を彼女の新らしい母である淺子夫人が輕蔑してゐると知つた時、……それは彼女が女學校へ入つて三年經つた頃であつたが……彼女は自分の嫌いな父親を輕蔑する人を憎んだ。そして俊政の誘ひに應じて、彼と共に公園で遊びながら父や新らしい母を罵しつた。その内にふと、淺子夫人には輕蔑され、俊政や菊達にぼろくそに罵しられる父親を、ふつと可哀想だと思ふやうになつた。それは、或る夜のことだつたが、宴會からわが家へ歸つて來た直後のことで、淺子夫人がその宴會の席上での父親の不作法に就いて執つこく皮肉を浴びせ、一人きりで寢室に去り、後にのこされた父親が不思議にも彼の寢室に行く前に、典子の頭を撫ぜて「典子はいい子だな」と、いくたびもいくたびも言つてくれたから。

彼女は父と新らしい母とが不和なのは、自分が母になついて行かないからそれでなのだと判斷し

た。

——自分さへ努力すれば、母が父親を輕蔑したり、父が母を罵しつたりしなくなる。

彼女はさう思つて、それ以來、淺子夫人に對しては極力氣に入られやうに努力して、もう俊政とも遊ばなくなり、年の暮の街で俊政達に出會つたあの時も、彼女は淺子夫人に對して……努力して……氣兼ねをした。

「いゝえ、知らない人なのです」

さう言へば自分の心がいくらかでも淺子夫人に通じるかと、彼女はさうも思つたのである。

だが、その言葉に對して、屋敷へ歸つてから淺子夫人は何んと答へたか、

「典子さんは、私があのお二人の方を知らないと思つてゐらつしやるのですか。私お二人の顏をよく存知てゐるのですよ。……子供が大人を騙まさうとする。怖ろしい事です。あなたがあのお二人の方の無敎養な物の考へ方の影響から未だに拔け切れないのはいたしかたもありませんが、しかし、立派な高尙な女性にならうとお思ひになつたら、出來るだけはやく、その影響から脫け出さなければいけません。大人を騙さうなどとは勿つての外です」

親切に……　實に親切に夫人はこんこんと悟してくれた。

典子はその晩、彼女の寢床の中で聲をあげて泣いたのである。」

そして四年……。典子は二十一になつた。彼女は不和な狀態をつづける兩親の間にはさまれて、父親を輕蔑し、そして愛し、母親を憎惡し、そして輕蔑した。舞踏會の夜は遂に自らの家庭の生活に絕望を感じた。

そして彼女は……、ひとたびは父親とその新らしい妻との幸福の爲に、彼女自らの肉親の愛情をまで絕ち切つた松坂俊政の下宿を訪れた。……實母と實兒の溫かいふところ、溫かい心を求めて、其の溫かい心にすがつて心ゆくまで泣く爲にである。……だが、其處には菊は居ず、俊政の冷たく醒め切つた肉親の憎惡が待つてゐた。典子は俊政に突きはなされて、空しく韮崎家へ戾つて來た。

——どうすればいいのだらう。

典子が韮崎家の生活の中で誰にもひけ目を見せず悲しみをも見せず生きてゆく道は、ひたすらに我意をはり、我慢いつぱいにふるまひ、出來るだけ高慢無禮な態度を押し通す事、ただそれだけしかないのだ……と典子は思つた。

彼女は園井克已の人物をよく知らなかつた。何時かの舞踏會の席上で、言葉をかけられたやうな氣もする。しかしよくは覺えてゐない。にも關はらず……婚約を結ぶであらう……と、彼女は淺子夫人に向つて約束した。

つまりそれは、淺子夫人に對して、出來るだけ憎々し氣に應答してゐる間に、ふつと口からすべり

出た言葉なのである。つまりそれは、彼女自身の無理に裝ほつてゐる高慢無禮な態度と、それを裝ほう爲に力みすぎた自分自身の力に依つて、遂に其の約束にまで追ひつめられてしまつたのである。

典子は……、哀れでそして愚かな娘なのかも知れない。

築山の向ふの玄關のあたりで馬車の去つてゆく音がしてゐる。淺子夫人の返答を得た澤井が、この屋敷を辭して行くのである。典子は窓ガラスに額をすりつけて、その音を、……不覺にも彼女の唇から洩れ出た返事が園井家へ向つて屆けられて行くその音を、ジッと耳を澄まして聞いた。

典子は泣くまいとした。しかし、彼女の足許に一滴二滴……淚が落ちた。

2

明治二十年代に伊藤博文夫人や下田歌子女史などの主唱によつて、「演劇改良會」といふ、華族の子弟たちの道樂半分の、演劇向上運動が行はれたことがある。園井克己はその會員であつたとかで、典子と二人きりの會見の場を、新富座の團十郎見物の席上に選んだ。

「お芝居を御覽になるのははじめてなのですか」

「ええ、……ですから、ただもうびつくりしてしまつて……」

典子は舞臺の上にくりひろげられる團十郎の荒事の、その絢爛さに興味をひかれ、大向ふからの

「大統領ツ」の揚幕に何事がはじまつたのかとその方を振り向き、克己からその理由を説明されて、自らの無知識に顔を赭らめた。典子の性質としては、このやうな赤毛布的立場に自分をおくことは我慢のならない出來事である。しかし今夜の彼女は、いろとりどりの華やかな棧敷のなかの一人物であることに滿足して、何時もの自分の性質を忘れてしまつてゐた。

「面白いですか」

「ええ、生れてはじめての」

「それはようございましたね」

幕間には廊下へ出て、賣店の土産物を買ひながら二人はこんな會話を交はしたりした。

典子にすれば、母親が「お芝居見物？まあ園井樣の若樣ともあらう方が」と、意想外な克己の申し出に不滿を洩らしたのが可笑しかつた上に、第二には今までは母親に禁じられてゐた芝居見物といふものが、實はこんなにもたのしいものだつたのかと、この娯しみを自ら封じて高尙ぶつてゐる淺子夫人の謹嚴ぶりが、急に間が拔けて見えて愉快だつた。

――世間といふものは、こんなにも明るくて、樂しいものなのか。

園井克己の計畫は、典子に明るさを敎へた點に於いては大成功だつた。

芝居が終つて、混雜する道を彼等を乘せた馬車が走り出した時、克己ははじめて、今夜の用件につ

いて口を切つた、

「典子さんは園井克己の妻になることを御承諾下さるのだ……とさう思つて宜しいのでせうね」

典子は芝居小屋の中で得た樂しい雰圍氣が、夜の風の冷たさを浴びてふづと消え去らうとするのを感じた。現實が馬車のわだちの音と共に典子を包んで走つてゐた。

しかし、園井克己といふ青年は、決して彼女が最初に思つたやうに不愉快な人物ではない。

「私、母に約束をさせられたのです」と、彼女は言つた。

「いづれにしても私は克己樣の許へ參りますと、さう申して……」珍らしく明るい聲だつた。

「無理やりにですか、それはいけませんねえ」

典子の聲の明るさに應じて、克己も冗談のやうにして言つた。

「でも、仕方がありませんわ」

「仕方なく、僕の妻になつて下さるのですか、それは困りました。第一、あなたらしくもない」

「でも……、仕方がありませんわ」

「二度もそれを仰有るのですか」

「ええ……」

典子はひよいと克己をふりかへり、同時に顔を見合はせて二人は聲を出して笑つた。

「しかし、その程度には氣持が進んでおいでになるのですね」

「若し、この程度のお答へで、今夜はお許しを願へるのでしたら……」

典子は正直に答へた。自分でもおどろく程の素直な言葉だつた。

「有難うございます。僕は、或は拒絶されるのではないかと、その時の心がまへまでして居りました。……唯今のお言葉は今夜の大收獲です」

この緣談が、淺子夫人から半ば强制されたものでなく、典子自身が克己といふ人物を探し出したのだとしたら、或はその氣持はもう少し突き進んだものになつてゐたかも知れなかつた。克己といふ青年の貴公子らしいたたずまひには典子は好意を持たず、淺子夫人に言はせれば「園井樣の若樣とあらう方が」と、眉をひそめる彼の半面の人間らしい優しさにこそ、彼女は好感を持つたのである。その氣持は克己にも通じてゐるらしく、彼は浮々とした樣子で

「勿論、僕は今後も努力するつもりです。典子さんのお心持が……あなたのお心持がですよ……誰の强制もうけずに僕の希ひをうけ入れて下さるやうになるまで……」

自ら誓ふやうに言つて「で、たとへばです。たとへばあなたが快よく僕の希ひを聞き入れて下さる時が來たと假定してです……何かそれに就いての條件がお有なのだ……と言ふことをたしか、澤田さんから伺つたのですが」と、ためらひながら「それを伺ふのはまだ早いでせうか」

克巳はその心の中の、物をねだるそわそわと落ちつかない少年のやうな氣持を思はず外に表はし、自分でもそれと氣づいたのか「やはり、それを伺ふのはまだ早いでせうね」と、てれくさそうに笑つた。

典子はその相手の態度に、俊政と遊んだ幼ない日の樂しさを思ひ出したので思はず笑つて「條件だなんて、ほんとうは何んでもないことですのよ。實は澤田様やお母様にすすめられたこのお話に餘り氣乘りがしなかつたので、さう申しただけなので……」

「さうでしたか」と、克巳は嬉し氣に「しかし、それが典子さんを幸福にするお話なら……」

「實はお話がいよいよさうと決まりましたら、韮崎家を出て他家へ嫁いで行きます前に、北海道へ一度參りたいと存知ましたの……」

「北海道？」

「ええ……」と、答へたきり典子はその理由を述べなかつた。

夜の街路にほのかな灯影をこぼしながら、馬車はひずめの音を追つて走りつゞけてゐた。

克巳は北海道と聞いてすぐに、不思議にも、いつかの舞踏會の夜のアイヌ族の青年を思ひ出した。不思議にもといふ言葉は或はあたらないかも知れない。と言ふのは、その夜の出來事に就いて典子と語り合つたのはついさきがた、新富座の棧敷での事であつたから……。

典子が膝の上においてゐる風變りな小さな手提袋に就いて「珍らしい刺繍の手提袋ですね、何處でおもとめになりましたか」と、克己が聞くと、彼女はあの夜の話をして、助けてやつたアイヌの青年が無理に置いて行つたのだと言つた。

「後で見ましたら、珍らしい布なので、自分の手提袋に仕立ててみましたの……」と、笑つてゐた。

克己は舞踏會の夜の、あのアイヌ族の青年たちの先頭に立つて叫んでゐた、若者の熱情をうらやましいと思ひ、典子に頬を打たれた彼をむしろ幸福な奴だと思つた位だつた。と言ふ心理は、彼がアイヌ族の青年に對して嫉妬をすら感じてゐるといふ説明に通じるのだ。あの熱情は溫室育ちの彼の體内には求めて得られるものでもなく、あの青年のやうな野性のたくましい肉體にのみ宿るものである。典子のやうな激しい氣性を持つた娘が、或場合あの熱情にひきよせられて行つたとしてもそれは不思議でもなんでもなく、むしろ當然の出來事であるかも知れない。典子は北海道へ行きたいと言ふ。あの青年を救つてやつた馬車の中で何等かの約束があつたのではないのか……まさか……、僅かな時間に克己はこれだけの事を考へて、彼自身の思ひすごしを思はず心の中に苦笑してゐた。

やがて典子が、プツンと切れた會話の糸をつないで、

「でも、北海道と言ふ所は寂しいのでございませうね」

「多分ね……、僕は開拓なかばのあの土地の事情を、淺學にしてよく存知ませんが、恐らくお芝居

が見られない事だけは確かでせう」

克己の教養が彼の心を押さへこんな冗談を言はせた。それには典子も笑つて「北海道には實母が居ります?……韮崎家に居ます間にも、既に縁の切れた人なのですけれど、他家へ參りますれば尙のこと……。ですから、全く無緣になりますその前に一度だけ逢つておきたいと思ひます」

初めて氣持を明かした。

克己は、澤田に聞いて韮崎家の家庭の事情を一應は知つてゐたので、典子のその氣持をもつともだと思つた。それはごくありきたりの感傷的な娘心なのではあるが。

——何んだ、そうだつたのか。それよりも、克己の心をもつと明るく氣樂なものにしたのは、典子の北海道行の原因が、彼女の膝の上にあるアイヌ模樣の手提袋とは全然無緣であつたといふことである。

「典子さん、その節は僕も同行させていただいても宜しいのでせうね」

「私の氣持が克己樣の許へ參りますことに定まつた揚句に、……北海道へ參ります時にはね」

「勿論です……」

「ホホホ……、結構ですわ」

「有難う……」

「但し、お母樣やお父樣には內緒です」
「北海道行の名目は」
「お父樣の會社のお仕事を見學に……」
「つまり、韮崎さんや淺子夫人をお騙しするといふ譯ですね」
「お厭でせうね、そんな事は……」
「いえ、それが典子さんの御心を幸福にする上に効果があることなら……」
「まあ……」
幌をはずした馬車の座席で、その聲に馬丁が驚いてふりかへる程、たしなみも忘れて二人は笑つた。
克己は旣に典子といふ新妻と同車してゐるやうな錯覺を起してゐたし、典子もまた、或はそれに近い氣持になつてゐたのかも知れなかつた。
だが、典子の膝の上で、彼女の白くふくよかな無心の指にまさぐられてゐる手提袋は、彼女の北海道行に就いて決して無緣ではなく、この若い二人の今後の運命に大きな影を落してゐるのだが、克己も典子もただそれを知らないだけの話である。
馮車はだらだら坂を昇りはじめて、直ぐ其處に韮崎家の窓の灯が見えて來た。何時もはこのあたり

まで來ると必らず侶爵にとざされる典子の心の暗さが、今夜は思ひなしか何時もほどではなく、態々馬車を廻して見送つて來た克巳に

「お寄り下さいますか。若しおよろしければ」

「お邪魔でさへなければ……、また典子さんのお氣にさへ觸らなければ、お母様にも御挨拶を申し上げたいと……。」

ハッハッハッ……と、悪戯ッ子じみて克巳は笑つた。彼は典子よりももつと幸福だつた。

3

同じ時刻に、と言ふよりも典子達の乘つた馬車が新富座の表を離れて、芝居歸りの客の雜沓する道をゆつくり走つてゐた頃に、その雜沓の中を歩いてゐた二人の人物がある。その内の一人は松坂俊政だつた。彼はすれちがふ馬車の上の典子の姿を見て、無意識に聲をかけさうになり其處へ立ち止まつた。彼を立ち止らせ、聲をかけさうにさせたのは、流石に血のつながる肉親の情のなせる業であつたかも知れなかつたが、しかし馬車は無關心に走りすぎてしまつた。

「今の馬車に乘つてゐた、綺麗なシャランペのお姫様は知つてゐる人ですか」

背の高い俊政に向つてマカリナが不自由な内地言葉で聞いた。

「さう……」俊政がうなづくと
「どうして呼留めてお話ししなかつたのですか」
「話？　話なんかする必要はないのです」
「どうしてですか？」
俊政は笑つて
「君は何か云ふと直ぐにどうしてですかと聞くねえ……まるで子供みたいだよ」
「いけませんか」あどけない感じで首をかしげるマカリナの可愛い微笑に
「いや、いけなくはないが……」思はずこつちも笑つて、俊政は夜の雜沓の物見高い人達に圍とまれて、ともすれば彼とはぐれさうになり、慌てて泣き顔をするマカリナをかばつた。
――アイヌ人だ。
――アイヌの娘だ。
――いれずみをしてゐないぢやありませんか。――
――北海道から來たのでせうか、
などといふ囁きが周圍の人達の間に交はされた。
「見ないで下さい」

と、俊政はその人達に向つて叫んだ。マカリナは彼の肩の下にぴつたりと寄り添つて心細げだつた。それでゐながら彼女は俊政と言葉を交はすのが嬉しいらしく……、

「でも、あの人が、若し松坂のニシパのお嫁さんにでもなる人だつたらいけないから」と、眞面目くさつて言ふのに對して「大丈夫だよ。あれは僕の妹なんだ。今ではもうずつと離れた遠い世界に住んでゐる愚かなね……」

言ひかけてぷつんと言葉を切つた俊政の顏を……マカリナはじつと見上げた。

――ああ、妹さんなのか

何か悪い事を無理に聞き出したやうな氣がしてうなだれてしまつた。彼女の兄のサムロツオやその三人の仲間を、あれからもう半月の間も警察に泊めてしまつた韮崎家といふものと、今此處に居る松坂俊政とが、血縁のつながりがあるとは、彼女にはどうしても考へられないのだつた。

俊政の暗い顏色を見て

「御免なさいね」

「何が……」

「でも……」

「馬鹿だなあマカリナは……」

俊政は笑つた。

今日警察からの呼び出しをうけ、俊政に付き添はれて出頭したマカリナは、署長から「明日の朝になるとサムロツォ達は釋放されるよ」と聞かされ、小躍りして喜こんだ程の小娘だつた。

彼等は日が暮れてから警察を出た。俊政の新聞社が、釋放後の青年達の身元保證人となり、彼自身が、青年達が北海道へ歸るまでの一切の世話をする事を誓つて了解を得たのだつた。そして其處から歩るいて、新富町の宿屋へマカリナを送り屆ける途中に、芝居のはねる時刻とかちあつたのである。

立ち留つては囁き合ふ物見高い人々に「見ないで下さい」と、マカリナの肩を抱いて俊政はいくたびも叫んだ。

彼等は程なく人の流れを横切つて靜かな横町の通りへ入つた。軒燈の影もまばらな薄暗い町だが、しかし宿は直ぐそこに近づいてゐた。

俊政はたつた今すれちがつた馬車の主を妹だとマカリナに說明しながら、典子と並んで乘つてゐた若い貴公子を……誰なのだらう……と、ふと疑問を持つた。或は典子の婚約者とでも言ふやうな立場の男かも知れない……。その解釋は當つてゐた。だが何れにしても彼自身はもはや典子とは何んの關係もない……韮崎傳右衞門の非人道的な行ひを攻擊する朝野日報の一新聞記者……なのである。だから、殘るところのものは、自分の血緣關係の者に……今は無關係だとは言ひながら……ひどい目に會

つたサムロツォ達への申し譯のなさ、ただそれだけなのである。

「マカリナ……ほんとに申し譯がないね、彼等はあんなぜいたくな暮らしをしてゐながら君達の部落の人を苦るしい立場に追ひやつてしまつて……」

「ううん、そんなこと……」と、マカリナはかぶりをふつて「私の兄さんがいけないのよ。アイヌは皆誰でも……男(アイノ)も娘(イコ)も大人(カチナ)も子供(セカチ)も……誰でも神樣の思召のままに從つてゐるのに、兄さんや兄さんの友達だけがあんな事をして、私、部落(コタン)へ歸つたら、折角一緒に行つたのに、何故兄さんを留めなかつたかと言つて、酋長やお母さんに叱られるわ……」

「だけど、君の兄さんのやつた事は正しい事なんだぜ……、唯、方法が亂暴だつただけだ。僕達がもつと早やくから知り合つてゐたら、もつと上手な理窟に合つたやり方で、堂々と鬪ふことが出來たんだ」

「ほんとにね……、ほんとにもつと早やく松坂のニシパを知つてゐたら、こんなに心のいい內地の人を知つてゐたら……よかつたわ……、ほんとによかつたのにね」

この言葉をマカリナは暗闇の中で、胸を打つはげしい動悸を意識しながら、せいいつぱいに意味をふくめて、心からの熱情をこめて俊政に訴へた。そして顏の色などはほのかにも見えない薄くらがりの中で赭くなつた。

東京へ出て來てからの一ケ月間のマカリナの生活にはサムロツオも居たし、仲間の三人も居た。しかもその上に、北海道鐵道會社に對してはどう手を盡くしても無駄だから旅費が無くならない内に北海道へ歸れと、三日にあげず宿を訪れて來る西村要助も居たが、舞踏會事件以後といふものは、マカリナは宿に唯一人で放り出されてゐた。そしてその後の、見知らぬ土地の毎日の樂しみは、新聞社といふ所からやつて來る松坂のニシパの顏を見る事にだけ限られてゐた。マカリナは何時の間にか、俊政といふ優しい内地の青年を戀してゐた。

……と、言つても彼女はそれを意識してゐるわけではない。意識しないばかりかアイヌには他民族の男に戀をしてはならないと言ふ昔からの嚴しい掟がある。マカリナは年頃にも似合はず、アイヌの神を信じ、掟を守り、古い言ひ傳へに生きる無邪氣で純朴な娘だつた。自分は堅い純潔な娘だと自らの心を強く信じてゐた。にも關はらず、彼女は俊政を戀してゐた。それが戀だとは知らず、自分はただ松坂のニシパに感謝してゐるだけなのだと、さう思つてゐた。

だから彼女のその次の言葉は

「私ね、アイヌばかりが可哀想だとは思ひませんのよ。此間宿屋の人が言つてゐましたよ。内地の人だつてたくさん困つてゐるのですつて……困つてゐる人がたくさんたくさん居るのですつて……」

「マカリナ……」

俊政は相手の餘りの純情さが哀れになる程いぢらしかつた。彼はマカリナの手をとつて「君はどうしてそんなに心が美くしいのだ。僕は内地の人間であることが恥かしくなるよ……君はやさしいね」その可憐さを抱きしめてやりたい程の衝動にかられて言つた。その心はマカリナにも通じて行つた。

「ニシパ……、そんな事ないわ、ニシパはいい人よ、やさしい人よ」

強くとられた手に力を入れた。彼女の手は俊政の手の中にあつたから、マカリナは僅かに彼女の指と俊政の指とが觸れ合ふ部分に力と心とをこめたにすぎなかつたが……。

其處はもうマカリナの泊つてゐる宿屋の直ぐ前の街路だつた。軒下にさし出た四角いガラスの軒燈の「旅人宿越前屋」赤いペンキ文字が、知らぬまに漂よつて來た白い夜霧のなかにうるんでゐた。

「ではおやすみ……、明日の朝は警察へ行くのだから……。兄さん達が出て來るのだから、早起きだよ、いいかい」

俊政は手をはなした。

「松坂のニシパ……兄さん達が歸つて來たら、その次には北海道へ歸るのだけど……、ニシパも一緒に行つて下さるのね」

俊政は北海道開拓鐵道にからまる醜聞事件を飽くまで追求する新聞社の特派記者として北海道の現

地まで行く事になつて居たので、そのかたばらアイヌの青年たちを狩勝の部落までを送つてゆく事になつてゐた。

「うん、一緒に行くよ……」

「私、嬉しいの……」

マカリナの眼の中には熱つぽいものがきらきらとかがやいてゐた。俊政はそれをおぼろげに……、そしてそれと同じものが彼の心のなかにもあることを知つてゐた。だが……、

「マカリナ……、おやすみ」

「おやすみ……、ニシパ」

俊政はくるりと向きを返して、すたすたと歩き出した。歩きながら口の中で呟やいてゐた。

——正義とは何んだ。正義とは何んの報酬をも求めずして正義を實行する事ぢやないか、それだのにマカリナに戀をしたりして、馬鹿な奴だ。

けれど、十數歩も行かない内に彼は立ち留つて後をふりかへつた。

夜霧の中にぼんやりと赤い看板の文字が浮かび、そのほの赤い光りをあびて、マカリナがまだ其處に佇ずんでゐた。俊政のふりむいた姿をみると、霧の中で彼女は急いで手をふつた。

「おやすみ……、ニシパ」

「おやすみ、マカリナ」

俊政はしばらく佇ずんだまま、相手の姿を凝視しつゞけた。可憐で純情でそしてアイヌの刺繍をしたシヤランベをまとつた西洋人形のやうに美くしいマカリナ……。

俊政はぐつと息を飲み込んで、向きをかへた。今度はふりかへらずに歩きつづけた。

（京京篇）終

菊といふ女中

二月の中ばすぎに梅林が風流の客を集め、三月には桃の花咲き、四月に櫻花が爛慢の裝ほひをこらす……、その東京の三ケ月間の季節の暦を一ケ月間に短縮して、しかも同時にすべての花が開花を競ふのが北海道の春、五月の歡喜である。

或る日の移民船から吐き出された乘客達の中に、韮崎一家の豪華な姿が混じつてゐた。彼等の稼業になみなみならぬ恩惠を降らせてくれた韮崎傳右衛門を迎へる爲に函館の旅館業者の代表が棧橋まで一家を歡迎し、函館の町の代表者が船から下りた東京の富豪に挨拶を述べた。まるで北海道といふ土地が彼の領土ででもあるかのやうに……、

傳右衛門の得意の姿を見る時、淺子夫人は何時の場合も冷笑を浮べる。

――此の町だと韮崎のあの姿が、歡迎をうけるのにふさはしく人間に見える。もつと山の奥へ行けば、もつとよく似合ふかも知れない。

彼女も、典子も、そして園井克己も北海道は初めての土地だつた。それにしてもこの函館といふ港は、活氣はあるとしても何んといふ場末の町だらう。

與子の意味もない我儘を受け入れて、では僕達も一緒に行かうと、欣こんで旅装を整へた傳右衞門を愚かしいとは思つたが、此處へ來て見てその彼の氣持が判つた。つまり、傳右衞門は此處へ來てはじめて生彩を放つ自分の得意の姿を妻や娘や、同時に娘の良人となる青年に見せる機會が來たのが嬉しかつたのだ。しかし、淺子夫人には園井克己の氣心が知れなかつた。いかに新歸朝の歐米流儀か知らないが、彼ほどの身分の青年が、未來の自分の妻に對してそれ程にまで機嫌氣づまを取る必要が何處にあるのだらうか、それが本當の歐米流儀といふものならば、そんなものは柔弱の代名詞でしかない。紳士であり貴公子である爲にならばもつときちんとした女をしつける嚴しさこそが必要なのに……と、貧しい大名子爵の娘である淺子夫人は、彼女の生家の家風から割り出して、克己に今までとは逆の批判の眼をそそぎはじめた。彼女の不幸な物差しから見れば、傳右衞門は短かすぎ、克己は長すぎるのである。

瓢屋に一行が落ちつき、棧橋まで出迎へてそれ以後案内役をつとめて來た西村が

「皆樣、御疲れさまでございました」

と、改めて兩手をついて挨拶をのべた時にも、夫人は尙も不機嫌に押し默つてゐた。

此の前に西村が泊まつてゐた時に比べると、空も海も函館の町全體も見ちがへる程明るく、明け放つた窓からは、町の屋根屋根を吹き渡る五月の微風が蝦夷の匂ひを持ち運んで來てはまた何處かへ流

れ去つて行つた。

「丁度内地の四月の氣候ですね」

と、克己に言はれて

「お珍らしゆうございませう、この北海道といふ土地柄が……」

西村は得意になつて「此の町はまだほんの玄關口でございますから、まだまだ北海道の特長は出ては居りませんが、もう札幌まで參りますと、風物がまるで内地とは變つて居ります」

「札幌といふ町は、此處よりはいくらかでも勝しなのですか」

澁子夫人の不滿は長い汽車の旅路の間にもあからさまに現はれてゐたが、今のはその愚痴を押し殺した靜かな皮肉な質問なのだつた。それに答へる西村の言葉の横で、克己と典子はお互にだけ通じる微笑を渡し合つてゐた。

「そりやもう奥樣、何んと申しましても札幌は道廳の所在地でございます上に、同じよい景色といふ言葉でも、内地のとはまるでちがつた雄大な風光でございまして……」

札幌には韮崎の別莊が設けられてあつた。年に唯の一度か二度傳右衛門が泊る爲のその別莊を、人は韮崎の札幌御殿と呼んだ。それは内地から來た移民達の事大思想に向つて北海道開發會社の巨大さを敎へ、道廳の役人達の官員風に對抗する政策的な目的をもつものであつた。澁子夫人がそこへ到着

すれば、又もや斯う思ふであらう。

――韮崎は私達にこの別莊も是非見せたかつたのだ。

その傳右衞門は此宿へ着くなり、洋服を丹前に着換えて、湯殿へ行つてゐたが、やがて顏をほてらせて、行儀の惡い湯上り姿を現はした。

「どうだ、克己君……、風呂へ入らんかね、旅の疲れがいつぺんにとれてしまふよ」

と、自分だけがさつさと先に濟ませてしまつた非禮を詫びるでもなく、氣にするでもなく、彼は窓際に佇ずんで、まだすつかりは汗の乾き切らぬ肌へ拭れ手拭をあてながら、獨り言のやうに言つてゐた。

「ああいい氣候だ。北海道の春は短かい、夏も短かい、せつせと鐵道を敷かんと直ぐ冬になるぞ」

氣持は既に鐵道建設の現場へ飛んでゐるらしかつた。

西村がその言葉について

「奥樣、御前樣は直ぐあれでございますからね、もう全く仕事の虫みたいなお方で……」

それには答へずに、淺子夫人は湯加減を知らせに來た女中について、無言で湯殿へ去つて行つた。

女中がこの座敷のお客樣の爲に湯殿は二組とも用意が出來てゐると知らせたのを聞いて、

「西村君……、一緒に入るかね」克己が言ふと「いえ、滅相もない」と、西村は辭退した。

克己は「馬鹿に遠慮なさいますね、では一人で行つて參りますかな」と、立上りながら「西村さん、

此の宿は瓢屋と……、表門には看板が出てゐましたが、この函館の旅宿では大きな方でせうね」
「左様でございます。此處では一番の宿でございまして……」
「瓢屋といふのは此處一軒でせうね」
「他にはございません」
「典子さん、お聞きになりましたか、此處は瓢屋といふ屋號で函館一の宿ださうです。西村さんはやはりこちらの事は御くわしくてゐらつしやる」
と、克己は西村への會釋ともつかずお世辭ともつかぬ言葉を殘して
「では後程また……」
と、傳右衞門と典子に挨拶して、彼にあてがはれた隣接の座敷へ、湯へ入る爲の化粧道具をとりに去つた。
典子さんお聞きになりましたかの言葉は勿論典子に或る意味を持たせて殘して行つた言葉である。克己が西村に向つて行なつた質問は典子自身に代つて彼が試みてくれたもので、典子もこの宿の表門を入る時、虫喰ひの舟板に記された文字「瓢屋」に、はつと顏色を變へた位であつた。
典子が俊政の下宿で、母の消息を聞いた時、彼はたしかに「函館の瓢屋といふ旅館に女中奉公をしてゐらつしやる」……と、實母の菊の、その時現在の消息を傳へた。典子が心配したのは、その實母

が今にも此の座敷に姿を現はしはしないだらうかといふ不安である。しかも克己の質問に答へて西村は、瓢屋といふ名の旅館は函館に此處が唯一軒だとさう言つた。

この旅館の同じ屋根の下に實母が居る。彼女を捨てた以前の良人が、最上等の部屋を四部屋も借り切つて泊まつてゐる所に、彼に捨てられて仇敵の如く呪つてゐる昔の妻が女中をして働いてゐる。

傳右衞門はそれを知らないからこそ、此處へ一家揃つて泊つたのである。二人を逢はせてはならない。自分だけが秘かに逢つて、明日はさり氣なく札幌へ發たう。數日を其處ですごして東京へ歸り、韮崎家とそして彼女自身の薄暗かつた青春に暇を告げて、園井家へ嫁がう。それがせめて、父親とその妻と、そして實母へのほんの僅かな自分のまごころなのだ。……典子は北海道へ來た目的が餘りにも早やく達せられてしまふので、いささかまごついた氣持で……。

「お湯殿はどちらでせうか」

丁度其處へ來て、傳右衞門に向つてしきりに歡迎の言葉を述べてゐる宿の主らしい男にたずねた。

「娘だよ……、典子と言つてね、もう直ぐ嫁に行くのだが、その相手の伯爵の伜が一緒に來てゐる。何んのことはない、結婚前の新婚旅行だ」

傳右衞門が紹介をかねて冗談を言つて笑ふと、

「あ、左樣でございますか。手前、瓢屋の主人でございまして、御緣談がおきまりの由で、まこと

にお芽出度う存知ます。新婚の御旅行にはちと遠うございますが、是非ともう一度この北海道まで……」

如才のない主人の言葉に

「此處まで來たんぢやあ、何しろあの長い汽車の旅だ。花嫁も花婿もトンネルの煤でまつくろけになつてしまふぞ」破れるやうな聲で爆笑する傳右衞門の聲には、此の場に淺子夫人が居ない氣安さと現在の彼にとつてはのるかそるかの仕事場である北海道に身體をおいた氣持のくつろぎがにじみ出てゐた。

「しかし、北海道にもいい溫泉がございますよ」西村が言ふと、

「ところが典子は、今度の旅行でそれをすつかり見物してしまふのだからな、結婚したらもう北海道へなぞへは二度と來られないのを覺悟しとるんだらう、ハツハツハツ……」

典子は次の間で入浴の身支度をととのへながら、彼女の旅行の目的を少しも疑つてゐない父親の言葉に何かしら責められるやうなものを感じた。淺子夫人の言葉には針があるが、父親の言葉にもそれがない。何故父は前の妻を離緣したりしたのだらう。

「お風呂をいただいて來ます」

こんな風に優しい父親である時の彼に對しては申し譯のない程の、だがそれが今では習慣になつて

ゐる冷たい物の言ひ方をして、典子は宿の主人の案内につれて座敷を出た。
長い廊下を渡つてなかばまで來ると、
「小父様……」と、典子は宿の主を呼び留めた。
「私、お風呂はいただかなくとも宜しいのです」
けげんな宿の主の顔に
「何處か、お父様やお母様達に姿を見られないお部屋はございませんでせうか」「と仰有いますと」
それには答へない典子の冷たい美くしさに
「では、あのどうぞこちらへ……」
主は典子の氣持が理解出來ないまま、奥まつた離れ座敷に誘なつた。
高臺に建てられたこの旅館の一番端れの部屋で、港がその直ぐ下に一望の景観をひろげてゐた。
「何か特別な御話でも……」
落つかない様子で主人がきくと
「こちらにゐらつしやる女中さんの事で少々おたずねしたいのですが」
「あゝ左様で……」富豪の令嬢の不思議な質問に「どうぞ、何なりとおたずね下さいまし、お役に立つ事でございましたら……」

「實は人を探してゐるのですけれど……」

典子はためらつて

「こちらに……、松坂菊といふ年をとつた女中さんがゐらつしやる筈なのですが」

「松坂菊……」

主人が首をひねつてゐるので

「その人は私の實母なのです」

思ひつめた典子の言葉を聞いて、宿の主はしばらくその顔をジーツと見かへした。彼は、この三月に西村が此處へ泊まつた時、その部屋付になつてゐた菊といふ老女中の姿を思ひ出してゐた。彼は韮崎には現在の妻の以前に離婚した女があることを西村にきいて知つてゐた。あの時も彼と西村とは「まさかあのお菊さんがねえ」と、その同名異人の……と彼等は思つてゐた……老女中の名を冗談の種にして笑つてゐた。あの老女中がさうだつたのか……。

今を時めく韮崎家の私生活の暗い一面の眞實……。この美しい令孃は案外不幸な娘さんなのかも知れない。

「失禮でございますが……、お孃樣にはお兄樣がおありでございませうか」

「……ええ、今は往き來をしてはゐませんが」

「たしか松坂俊政と仰有るお方で……」

「ええ、さうです」

「では、先日おいでになつたのはお孃樣のお兄樣でございました。他の宿にアイヌの若い衆達を四五人連れてお泊りになつておいでになつたのだとかで……」

「お兄樣が此處へおいでになつたのですか」

「左樣でございます。十日程前に……」

「お母樣にお會ひになつたのですね」

「いえ、それが……、やはりお會ひになれなかつたのでございます」

「お母樣は此處にはおいでにならないのですか」

「半月程前に突然此處から暇をとつて……、いえ、暇をおとりになつて、或る內地から來た移民の方と一緒に……」

「何處へゐらしつたのでせうか」

「この北海道のもつと奥の方へゐらしつたとばかりで……、はつきりした事は……」と、氣の毒さうに言つた。

日が暮れる港の空に、何處へ向けて出帆する船か、物憂げな汽笛が春の夕べの哀しさをうたつてゐ

た。春とは言ひながら沖の海面をわたる北の國の風の冷たさが、典子の胸に沁み入るやうだつた。

「それで……、お兄樣は？」

「どうしてもこの北海道に留まつてお母樣を探すと仰有いまして……」

「さう……」

父に言はせれば、心持が歪んでゐるといふ母は、何故唯一人の味方である俊政にまで無斷で行方をくらましたのだらう。實母は、母は、唯一人の味方である兄とまで仲たがひをしたのであらうか。典子は俊政のぎゆつと唇をひきしめたさびしさの勝つた表情を思ひ出して悲しかつた。

暫らくたつて典子が座敷へ戻ると、其處には淺子夫人がすでに浴室から戻つてゐて、

「典子さんは？　どちらの浴室へおいでになつたのですか、お待ちしてゐたのですよ」

「庭を散歩してゐましたの、餘り景色がよろしかつたので……」

「餘程北海道がお氣に召しましたのね」

「ええ、ホホホ……」

典子はさり氣なく無表情に笑つた。

北の國、北海道へ着いてはじめての一日が暮れて來る。

熊の出る里

山の頂にはまだ雪が殘つてゐたが、麓には春の花々が咲き亂れてゐた。その可憐な花びらを踏みにじつて、原始林に斧が打ちこまれ、次々に巨木が伐り倒されてゆく。そして原始林を貫ぬいて山の奥へ向つて進む一條の涌路……。それは都會から、未開と野蠻を押し切つて山の彼方の未知の里にまで飽くこともなく突き進んでゆく文明の道である。其處には鋼鐵のやうな建設の意志だけがある。

北海道開拓鐵道株式會社の鐵道敷設工事は、その意味に於いては正當にして尊敬されるべき目的をもつ事業であつた。だが、その手段に誤まりがあり惡意のあるづるさがあつた。それは最近では札幌の韮崎御殿まで出て來て工事を督勵してゐる韮崎社長の惡意の意志であるのかも知れないし、或は手代の西村の、成績を上げさへすればの非道な行ないであるのかも知れなかつた。

東京から戻つて來たサムロツオ達や、彼等を送り屆けて來た松坂俊政が、森林の傍にある沼澤地帶の、彼等の部落にたどりついた時……、其處は峠を越えた所で、部落が一眼で見渡せる高い地點だつたが……。

「あツ……」

マカリナが悲し氣な叫び聲をあげて彼等の部落を指さした。その聲に驚いた青年達はマカリナの指さす所を眺め、口々に悲痛な叫びをあげた。

鐵道工事は既に開始され、彼等の部落は、その中央部をまつぷたつに切り開らかれて、その中央にあつた家屋は、心なき內地人の土工の手によつて、無慘に引き倒され、片側に掃き寄せられたやうに殘骸をさらしてゐたのである。

部落(コタン)の何處かで、年寄つた男の歌ふアイヌの哀歌が、森の樹々にこだまして胸を裂くやうにこの時のあたりまで聞えてゐた。

サムロツオ達は東京での留置場生活といふ苦澁の代償を支拂つて後、それを見かねた輿論や新聞社や政黨の後援を得て、政府から部落は無事だとの口約を得て、それを土產にして部落へ歸つて來たのだ。政府もまたその約束を、北海開拓鐵道に命令を傳達することに依つて果たしたのだ。だが、その約束も、その命令も、この北海道の山の中では、まるで夢の中の出來事ででもあつたやうに忘れられてゐた。或は未だ此の山の中までは屆いてはゐないのだつた。

その日から俊政は、部落の酋長の家に泊り込み、半月にわたつて、鐵道會社の現場事務所に對して交涉したが埒があかず、札幌の道廳へ直接に抗議を申し込みに行つた。

五月の末……。部落(コタン)の何處かの家の軒下に咲いてゐるライラツクの强烈な匂がサムロツオの胸をや

るせなく焦ら立たしくすぐつて行く。花の匂ひが强烈だからやるせないのか、その他に何か原因があるのか、それがサムロツォには判らなかつた。

「この上は内地人（シャモ）と戰（トミ）ふより仕方がないのだ。やらうぢやないか、皆どうだ」

と、彼は言つたのだが、數人の若者をのぞいては誰も彼の意見に贊成するものはなく、酋長や部落の老人達は、彼を粗暴だと言つて罵しり、父母はサムロツォは鬼ツ子だと言つて泣いて諫めた。そして彼等は部落の廣場に集まつて神に祈り、悲しい節まはしで、種族の平安を祈る歌を歌つた。

農耕を嫌ふ彼等の畑には雜草がはびこり放題にはびこり、それかと言つて狩獵の獲物は鐵道工事がはじまつて以來は山奥へ逃れ込んだきり、姿も現はさなかつた。

「内地人（シャモ）と戰（トミ）して平和を得るか、農耕を覺えて食を得るか、どつちかをやらなくては自分等は死滅するのだぞ……どうするのだ皆は……」

彼の叫びに應じて、默々と土に鍬を振る者もあつたが、多數の者は依然として神祈（カムイノミ）するばかりだつた。……猛り立つ彼をなだめて、俊政が札幌の道廳へ、若い役人の同情を頼みにして直接交涉に向つたのである。

「兄さん……、一寸來て大變よ……」

「どうしたんだ」

マリカナの金切聲を聞いて、サムロツオは鍬を研ぐ手を休め、不機嫌な顏で振り向いた。ともすれば鍬を研ぐ手が鈍る彼の悲しみの想念の中には、つい此の間の東京での苦闘の姿が幻のやうに消えたり浮んだりしてゐた。その幻の中を二重露出の映畫のやうに美くしい馬車が走つてゐる。彼の頰を打つた内地の娘（メノコ）の顏がチラリと浮んでは直ぐ消える。かと思ふと。その神のお使ひ姫のやうに美くしい娘（メノコ）の……この毛布を着てお行きなさい……と、言ふ言葉が幻覺のやうに囁やいてゐる。腹立たしく口惜しい思ひ出と、何故かは知らぬが泣きたい程の憧がれの感情の焦ら焦らとした交錯……、それをマカリナの慌ただしい聲がさへぎつたのであつた。

「兄さん、來てよ……、大變なのよ。皆が若い人達が、馬に乘つて通りがかつた内地人（シャモ）を捕へて亂暴しやうとしてるのよ……、殺すかも知れない」

「内地人（シャモ）？……放つとけ、この部落を通つて行かうとする内地人（シャモ）は間抜け野郎だ」

「だつて、若い人達をそそのかしたのは兄さんだわ……、昔からアイヌにはそんな亂暴者は居なかつたのに……、兄さんが留めなくては誰が留めるの？……だから。だから兄さんは部落（コタン）の長老（エカシ）や貴人（ニシパ）に嫌はれるのよ、兄さんは異端者よ」

「何？」

サムロツオは昻奮して立ち上つた。

「そんなら言つてやる。お前は何んだ……。お前は何をしてゐる。あの松坂のニシパと話をしてゐる時のお前の顔は何んだ。お前の言葉は何んだ。お前はその時何を想つてゐる。……おい、マカリナ」

「あら、兄さん……、私は……」

マカリナは切なく叫んだ。

「俺はお前の心の中は何から何まで知つてるぞ……。だが、俺がお前に一言でも苦情を言つたか」

「兄さん……、私、私……、そんな事、一度だつて……、嘘よ」

「嘘だ？」

「ええ……、私は……、兄さん」

マカリナは自分では今までに一度もさうだとは思つたことのない戀心を、サムロツオの今の言葉ではつきりとえぐり出されてしまつた。これが戀と言ふものだらうか。若しもさうだつたとしたら、自分は、……自分はアイヌの堅い掟をもう既に破つてしまつてゐるいけない女なのだ。

突然……、マカリナは激しい聲で咽び泣きはじめた。

「泣く事はない。松坂のニシパはいい人だ。アイヌみたいにいい人だ。………、それはそれでいいのだ。泣く事はない。……だが、他の内地人(シャモ)はさうはいかん。俺は内地人(シャモ)の奴隷(ウタレ)になつて死ぬよりは、いさぎよく戰爭した方がいいと思つてゐるんだからな……」

サムロツオはマカリナをそこへおいてゆつくり家の中を出て、部落の廣場へ向つた。

廣場で毆打（シャラカムイ）されてゐる内地人をざまをみろと笑つてやりに行くつもりだつた。

「おい、どうしたんだ」

彼は若者達に聲をかけた、

内地人の乘つて來た馬が廣場の隅にいないてゐる。内地人はたつた今馬から引きずり下ろされたばかりらしく、アイヌの若者達にこずき廻されてゐた。アイヌは昔から暴力沙汰を好まないので、まだ誰もその内地人を毆つた者はなく、その前提としての議論（チャランケ）をしかけ、盛んに鐵道會社の不法を鳴らして喚き散らしてゐるのだつた。

サムロツオの聲を聞いて、若者の一人が、大ぜいに圍まれて言葉の通じない不安と、今にも殺されはしないかと怖びえてゐる内地人を指さした。

「此奴は娘（メノコ）のくせに馬に乘つたまま俺達に話しかけたのだ」と、アイヌ語で言つた。

乘馬服を着た一人の内地人（シャモ）の娘……。

「娘（メノコ）？！」

サムロツオはその娘の顏を見た。

「……」

「……」

何處かで見た事のある顔だ。

サムロツォの表情を見て若者達は何かの異變を感じた。

「サムロツオ……、この娘を知つてるのか」

サムロツォの頭の中を幻の馬車が走る。……この毛布を持つてお行きなさい……。そして幻の馬車のカツカツと走る馬のひずめの音。あの時のあの人だ。たしかに。……あの時は暗い夜だつたけれど。櫻の花に蒼いガス燈の色がさしてゐた東京の夜だつたけれど……。

その時、同じやうに典子の頭の中にも、あの時の舞踏會のカドリールの音樂がリズムを踏んで流れてゐる。そしてあの時、ぴたりと止んだ音樂。シーンと靜まつた舞踏場。ピシリと彼女の右手が音を立てる。相手の頬に血の氣が浮ぶ。……亂暴しちやあいかん、相手は娘だ……、この青年は叫んでゐた。たしかにこの青年。

「あツ……」

「あツ……」

双方が同時に叫んだ。

「お孃さん、あなたは韮崎のニシパの所の……」

「あなたはあの時の方ですね……」

「やつぱりさうでしたか」

「此處があなたの故郷なのですか」

何處からか風が吹いて來る。ライラックの強烈な匂ひ。

× ×

馬が二頭……、馬首を並べて走つてゐる。

一頭には典子、一頭にはアイヌの着物を着たサムロッオ。つい二三日前から父親と共に鐵道建設の現場に近い小さな町まで來てゐて、今朝はやくから克己と二人で乘馬を娯しんでゐたのだが、何時の間にか彼とはぐれて沼澤地帶に迷ひ込んだ典子を、現場の事務所までサムロッオが見送つて行くのである。

カツカツカツカツ……、二頭の馬のひづめの音が交互に入り交じて、ある時は速くある時は緩るく、森の樹木に包まれた間道を拔けて走つてゆく。

「お孃さんは何時北海道へおいでになつたんですか」

「半月程前です……」

「何をしに……、見物にですか」

「さう、お父様の鐵道工事を見にね……」

つまり、この娘はサムロッツオにとつては仇敵の娘なのである。

典子には、それまでの彼女の生活の豊かさから、サムロッツオの怒りが、如何なる種類のものであるか判らない。實感となつては迫まつて來ない。彼女は家庭生活を通じての人生の悲しみを惱んではゐたけれど……。

サムロッツオは彼と馬首をならべて走つてゐる典子といふ美くしい内地の娘が、韮崎といふ仇敵の娘であることが悲しかつた。

「でも、サムロッツオさんは斯うして、あなた達にわるい事をした韮崎の娘を親切に送つて下さるやうな方だから……、その方に惡るくは思はれたくないから申し上げるのですけれど……、私はほんとうは、お父様のなすつてゐる事を憎くんでゐるのですよ」

典子はだらだらと下る間道の坂道に、手綱を注意深く引きしめながら言つた。

「今度斯うして北海道へ來たのも……、ほんとうは私を生んだ、お母様に會つて……、もう直ぐお嫁に行くので、そのお別れを言ひたくてなの……」

父を憎んでゐる……と言ふ典子の複雜な思ひをこめた言葉よりも、お嫁に行くので……と、言つた典子のさり氣ない言葉が、サムロッツオの胸を鋭く搏つた。

——さうだらうなあ。どんな美くしい娘なのだ。嫁に行く先はいくらでもあるにちがひない。

そのサムロツオの心を知らず

「人生つて、悲しい事が多いのですね……」

と、典子は言つた。

……と。言つた所で、彼女は彼女自身の惱み多き人生の悲しみに就いての解答をサムロツオに求めやうとしたわけではなく、彼女が一度はその頬を打ち、一度はその危機を救つてやつたアイヌの青年に、彼の立場を同情してゐる彼女の心を……自分にも惱みがあるのだ。だから、あなたの惱みや悲しみが少しは判るつもりだ……といふ氣持で說明してやつたのにすぎないのである。

だが、その言葉は純朴な心を持つサムロツオの胸に、湧き立つやうな激しい涙を、縋りついて、胸の中の不滿や悲しみや憤りを洗ひざらへ訴へて泣きたいやうな感激を與へてゐた。

「お孃さん……」

と、サムロツオは話しかけた。けれどその言葉は同時に發せられた典子の言葉の中に消えてしまつてゐた。

此處まで來ると森林の樹木に接はれた間道の暗さが終り、眼の前には溪流に沿つた平地を埋める緑の草原と、所々に粗朴な蝦夷松のひよういつな立ち姿。カーツと照りつける五月の太陽の下に道は幅

をぐつと擴げて待つてゐた。

「まあ、綺麗な景色……、サムロツオさん、競走しない。私の馬は早いのよ」

それは傳右衞門が、彼の成り上りの金持らしい粗野な愛情から、その愛情のしるしとして、乘馬の得意な典子に、札幌へ來て早速に買ひ與へた駿馬だつたが、金錢の豐かな生活の中で、金錢に依つて現はさうとした、智惠のない愛情が通じる筈もなく、典子は唯いつもの父親のぜいたくを自慢する氣持としか受とつてはゐなかつた。

典子はさう言つて叫ぶが早いか既に馬の横腹に拍車をくれて、手綱を引きしぼつてゐた。彼女の馬は一聲いなゝきを上げて、土を蹴つて走りはじめた。

サムロツオの馬もそれにつられて疾走しはじめたが、その速度の鈍さをふりかへつて典子は言つた。

「どうなすつたの……、そんな鐵砲なぞを背負つてゐるから……」と、氣のきかないサムロツオの鉛彈の鐵砲を笑つて「だから、おそいのよ。早やく……早やく」

カツカツカツカツ……、馬は風をきり、雜草の生へ放題な路を踏みくだく。サムロツオの馬は見る見る取り殘こされて行つた。

サムロツオの獵銃……これは、昔から狩獵に生き狩獵に一生を終るアイヌ族の片時も吾身から放さ

ない生活の糧を得る爲の日用品なのだつた。……その爲に、サムロツオは事實走り憎い思ひをしてゐた。その獵銃がもう直ぐ役に立つにも關はらず。

典子は風をきつて走る彼女の進路の前方に、黑い大きな塊を見たと思つた。それは見る見る內に近づいて來た。ジツとうずくまつて動かない黑い人間よりも大きな塊まり……、何んだらう……と、不審に思つた時。

突然……、彼女の駿馬は怖びえたやうに前足を突つぱつて立ち停つた。

ががガツとひずめが土を押しくだく激動……、しかし、典子は辛らうじて鞍の上に身體を支へた。

次の瞬間、眼の前の黑い塊がむくむくと頭をもたげた。

——熊

馬は恐怖にかられて前足を揃へて高く躍り上つた。この二度目の激動をくらつて、典子は鞍から轉がり落ちた。

月の輪を見せて兩手をひろげて立ち上つた巨大な熊の姿が眼の前いつぱいに擴がつて來た。

——逃げなくてはならぬ。

戰慄が典子の背筋を突き刺すやうに走る。だが、地面に叩きつけられた腰が立たなかつた。

「あーツ……」

典子は泣聲に似た悲鳴を口の中に呑んだ。

何處かから泡を嚙んで疾走してくる馬の足音を聞いた。

ダーン……、ダーン……。銃聲。

典子はそのまま氣を失なつてしまつた。

…………。

さつきと同じ場所である。

だが、典子が身體を横たへた草地の上には名も知れぬ花の咲く樹が佇ずんでゐた。或はアカシヤの一種かも知れぬ。その樹木を塗りつぶした小さな花の幕は、黄色い花粉を粉雪のやうに降らせてゐた。その隣りに佇ずむ樹にはライラツクの濃紫。傍を流れてゐる溪流の上を吹き渡る五月のさはやかな風が、春の花のむせつぽい甘さを流してゐた。

典子は溪流の水が口にそそがれる冷たさにやつと意識をとり戻し、彼女の落馬した個所がそのやうに美しい川べりであるのに氣がついた。

「お孃さん……、大丈夫ですか」

サムロツオの不安な眉をひそめた顏が、直ぐ顏の上にあつた。

典子はしどけない姿を見せた恥かしさにはつとして起き上らうと焦せつたが、身體が痛くて顏をし

かめた。

「動いては駄目です」

サムロツォは、起き上らうとする典子の身體に直接には手を觸れることもようせず、兩手で形だけ押さへるやうな仕科をして首をふつた。典子が氣を失なつてゐる間も、彼女の唇に手をふれることを避けて、その直ぐ上の空間から兩手にすくつた溪流の水をしたたらせらしく、顏から首すじにかけて冷たい水びたしになつてゐた。

典子はそれに氣づいて

「まあ、無茶苦茶に水をかけて下すつたのね」

「すみません。」

やつと右手を動かして顏を濡らした水を拭ひとつて……、典子ははじめて聲を出して笑つた。

「方々水だらけよ……」

そして、サムロツオの申し譯なささうな顏に向つて言つた。

「サムロツオ……、有難う」

「東京では私が救けていただきました。此處では私が救けて上げました。あの時のお禮が出來てようございました」

「あなたは命の恩人ね……」

典子はやつと起き上つて「でも、熊はどうして？」

「逃げました」

「あなたの鐵砲は當らないのね、ホホホ……」

典子の減らず口……。永年の反抗の生活が彼女に植えつけた惡い癖……。

「いいえ、熊はアイヌの神様です。殺してはいけないのです。鐵砲の音を聞かせるだけです。熊もそれを知つてゐて音を聞けば逃げてしまひます」

「御免なさい、惡口言つたりして……」

典子は彼女自身の素直になり切れない性癖を後悔しながら詫びを言つた。

「もう、動けますか」

「ええ……」

と、身體を動かしてみた。痛みははげしかつたが、幸ひにして怪我もなく打撲傷もなかつた。

「動けるわ……、少し休んで行けば。サムロツオさん。ほんとうに有難う。」

サムロツオは赭い顏をして俯向いた。

「私のお父様があなた方にひどい事をしてゐるのに、あなたは私を助けて下すつたわ。」

「しかし、あなたと韮崎のニシパとはちがふ。韮崎のニシパは私達の部落の家を叩きこわしてしまつた。住む所もなくしてしまつた。だけど、あなたはちがふ」

彼は顔を上げて言つた。その眼が、彼の言葉の矛盾を裁き切れずに涙ぐんでゐた。

サムロツオとしては、典子は彼自身の危急を救つてくれた恩人で、しかも心のやさしい、美くしい娘なのだ。典子の父韮崎のニシパは彼の仇敵なのだ。決して同じ人ではない。人がちがふのだ。と、それを言ひたいのである。

「サムロツオさんは泣いてらつしやるのね」

「……」

あなた達のためにどうにかして上げられたら……と、典子は言ひたかつた。けれどそれを言つたところで、實現出來るとは思へなかつた。出來もしない事を言ふのは相手をからかふやうなものだ。サムロツオにいい加減な女だと思はれたくはない……と、典子は思つて口をつぐんだ。しかし、何か言つてやりたかつた。何を言へばいいのか。

黄色い花粉が風に遙れて粉雪のやうに、霧のやうに降つて來る。ライラツクの匂ひは物言ひたげな人の心を亂して、やるせない啞にしてしまふ。

此處には幸福だけがあるやうに見える美くしい眺めと、溪流の囁やき、だのに二人は別々の人生の

哀しみにとざされてゐた。

鳥が何處かで歌つてゐた。……その鳥の囀へづりと溪流のせせらぎとの間から、微かに遠く、新らたな、誰かの馬が驅けて來る音が聞こえる。

典子はその音を聞きつけて、それが誰であるかを推察したらしく

「あ、あの人がゐらしつたらしい……」

と、それとなくサムロツオに別れを告げる眼ざしをふりむけた。

「あなたも御存知かも知れない。舞踏會の時に、私の傍にゐらしつた人ですけど……」

「さあ……、私はあの時は夢中でしたから……、では、今日一緒に馬に乘つておいでになつたのは、お孃樣のお婿樣になるお方なのですね」

「ええ……」

「では、私は此處でお暇出來るかも判りませんね」

サムロツオは何氣なく、出來るだけ平靜に言つた。

勢ひよく眼の前を驅け拔けさうになつて、克己の馬は急に速度を緩めた。

「あ、典子さん……」と、克己は馬をかへしながら息を切らせてゐた。

「お探しになつたでせう、路が判らなくなつたのです……」

と、立ち上つた典子の姿に
「どうなさいました。泥まみれぢやありませんか」
彼はあぶみにかけた足をはずして地に下りた。
「熊が出たのですよ。面白かつたわ……、ほんとは蒼くなつたのだけれど……、この人に助けていただいたのです」
「それはようございました。私がはぐれたばかりに、申し譯のない事になるところでした。……君、有難う」
「いゝえ……」
克巳は片手に手綱を握りながら、はじめて相手の顔を見た。
「覺えておいでになります？」と、典子は笑つて「舞踏會の夜の……、あの時の……」
「あゝ、あの時の人でしたか……」
「亂暴な姿をお見せしまして……」
サムロツオは頭を下げた。
「いや、いいのですよ。それよりも、典子さんを助けて下すつて有難う」
克巳は典子に代つて、と言ふ意味を強く見せて、もう一度頭を下げて「偶然なのですね、ほんとに

有難いです」

「ええ、全く偶然にお目にかかつて、送つて來ていただく途中だつたのです」

「此の近所は熊がよく出る所なのです。だから鐵砲は離した事がないのです」

「天の助けだ……」

「全くね……」

三人は朗らかに笑つた。少なくとも、三人とも朗らかに笑つた……つもりだつた。だが、三人とも何かしら心の底にひつかかるものがあるやうな氣がした。何故さうなのか……、それは誰にも判らなかつたのだが。

話のつぎ穂に困つて「では、歸りませうか」と、典子は言つた。

「では、その内に改めてお禮に來ます」

克己の言葉に「そんな事は……」と、サムロツオははにかんだ。

氣持よく三人は別れを告げた。全く氣持よく……。だが、克己は典子をいたはりながら馬に乘せて町へ歸つて行く途すがら、何かしきりに質問しなければならないことがあるやうな氣がしながら、それはいけないことなのだ……。と、自分を叱つてゐた。

——偶然なんだ。あの美くしいアイヌの青年が偶然の運命によつて典子を助けてくれたのだ。それ

でいいぢやないか。

與子もさうだつた。何か言譯をしなくてはならない氣がするのだが、その實何も言ふ必要もなく、その材料もなかつた。

「左樣なら、ほんとに有難う……」

と、さう言つて克巳と共に頭を下げて、サムロツオを河べりに殘して別れて來たのだから、サムロツオに對してだつて何も言ふことはない。

ライラツクの樹の傍に佇ずんで長い間、二頭の馬が見えなくなるまでその後姿を見送つてゐたサムロツオも、何故こんなに……、何が斯うまで……、悲しいのか判らなかつた。

——部落は滅茶々々だ。老人たちはただ歌つてばかり居る。滅茶々々だ。だが、それはあの二人には關係がないことぢやないか。あの娘は高貴で美しい。そして彼女と並んで去つてゆく紳士の妻となる人ぢやないか、それでいいんだ。何を悲しむことがある。

しかし、彼は淚をこぼした。

花粉が吹雪となつて散り、ライラツクの紫が匂ふ……、むせつぽくて胸がつまるやうだ。すべてはそのせいかも知れないのだ。

典子は何故東京へ歸らうとはしないのか。

それは淺子夫人の長い間の疑問だつた。克己との間がうまく行つてゐないのかと思ふとさうでもなく、二人はまだ結婚してゐないと言ふだけの事で、婚約時代にある男と女との交はりとしては、親密にすぎず、冷淡にかたよらず理想的だとさへ言へる程だつた。

その淺子夫人の疑問を解いてくれたのは、東京の本社へ業務の打ち合はせに行つた西村が、今はむしろ、本據を札幌にうつした形にある韮崎御殿へ歸つて來て、傳右衞門に諸種の報告を濟ませた後に、

「奥樣に一寸お耳に入れたい事がありまして……、こゝは却つてお孃樣のお爲にもならうかと存知ますので……」

と、彼らしい世故に長けた常識を働らかせて、函館の瓢屋の主人から聞いた話を告げたその言葉である。

――菊がその北海道に居る。

さうだつたのか。

淺子夫人は彼女自らも言ふ如く、典子に對しては、決して無駄な愛情をそゝぎもしないし、また典子から母親に對する愛情をうけとらうとも思つてはゐなかつた。むしろ、典子が菊をしたふ氣持を當然だと肯定してゐる。だからこそ、このやうな家庭に居るよりは園井家へ行つて、克己との幸福な新婚生活を營めと、典子にすすめたのであるが。

西村からそれを聞いたのは八月の終りの頃だつた。東京からこの札幌の別莊へ來てからはや三月以上にもなつてゐる。

夫人は或る日、克己と典子を眼の前において、

「もういい加減に東京へ歸つて式を擧げる準備にかからなければ、十一月の間にはあいませんよ」

と、言つたのだが。これに對して克己は、

「もう暫らく遊ばせて下さい。結婚すれば、斯うは參りませんから……」

彼らしい靜かなやさしい言葉づかいで答へた。

――この人は、典子が何をしやうとしてゐるかを知つて居るのだらうか、

淺子夫人には彼の氣持が判らなかつた。

事實は、まだ實母の行方が判らないでゐる典子の爲に、克己が自ら北海道滯在を願ひ出たのである。

菊の行方は依然として判らない。克己は典子の心持を察して、彼女をかばつてやつた。だが、典子の心は、はたしてそれ程までに實母の行方を求めてゐたのであらうか。

東京へ歸れば確實に、克己との結婚式が擧行され、彼との生活がはじまるのだ。それはいい。それは幸福かも知れない。けれど、それは克己と彼女と唯二人だけの生活を假定しての話なのだ。克己には父もゐる。母も居る。妹も居る。園井伯爵家といふ古い寺院の本堂のやうな金ぴかで重くるしい家庭生活。老伯爵と克己自身とは歐米行脚で身につけた氣輕さのある人だ。だが、彼等二人と、氣難かしいといふ評判のある老母堂とを切り離しては考へられない、日本の家族制度。

それを典子が聞きただしたら、何時もはあんなにも明朗な克己が、その時だけは、悲し氣に「しかし、父や母は我々よりも先に生活を終る筈です。だから、それまでの辛抱なのですが」と、言つた。

韮崎家の先妻菊の生活。淺子夫人の生活。種類はちがふが、ちがふだけにどのやうに悲しいものか苦しいものか、判斷もつかないその暗らさの中に……、どうして自分が飛びこんでゆかなくてはならないのか、しかも、はつきり言へば、その生活の中の誰かが、早やく死んでくれればいいのにと祈りながら。

その典子の惱みを知つて、それが自然に解消するまで克己は待つつもりだつた。その重苦しい家庭生活を厭ふ氣持と、彼自身に愛される幸福とを計量器にかけてみて、典子が彼の愛情の方を重くとつ

てくれた時にはじめて、二人は結婚すべきだ。……と、彼は思つてゐた。それからもう一つ。——これは自分の邪推かも知れないが、

と、克己は、典子の胸の中に、あのアイヌの青年の姿があるかどうかを疑つてゐた。若しその邪推があたつてゐたとしたら、それを委細かまはず東京へ連れて歸つて、彼自身との結婚生活を始めることは、やがては互が不幸になる事だ。それに對する典子の氣持がはつきり見透せるまで待たう。待つてみやう。きつと、さう長い事ではない。彼はさうも考へてゐた。

理性に强く、禮節に長けた、そして氣の弱い克己の心の中の悲劇。

典子は克巳を愛してゐた。けれど彼女は、餘りにも家庭生活の暗らさと苦しさとを知りすぎてゐた。夫婦生活のあらゆるものに疑ひを持つてゐた。彼女がもつと年をとつてゐたなら、冷たく憎惡に充ちた夫婦生活の中にも……さうでありながら、何故その生活が打ちくだかれもせずにつづいてゐるのか……といふ、その秘密を知るにちがひない。だが、典子はそれには近よりもせず、そして怖びえてゐた。

淺子夫人にも克己にも、その典子の心理は理解出來なかつた。

淺子夫人にとつては退屈な腹立たしい月日。克己と典子にとつては互に相異なる惱みの月日。ただ一人、傳右衞門だけが

——鐵道建設。

夜も日もそれに明け、それに暮れてゐた。彼も、この北海道に來てはじめて、彼の長男俊政のはつきりとした消息を知つた。アイヌ族を代表して彼に楯をつく彼の息子。どちらも正面切つて戰ふ事を避けてはゐたが。彼にもその惱みがあるにはあつた。

夏がすぎ、秋になつた。北海道は十月に冬が來る。

韮崎御殿のその豪奢な建物の窓にも、秋の深い夜の風が、かさかさと落葉を吹きつけてゐた。

「克己様はあれからもう半年も月日を無駄にすごしておいでになるのでございますよ」

煖爐に石炭のかけらを、たつた一つ、やるせなく放り込みながら淺子夫人が言つた。

「だから、どうだと言ふのだ」

傳右衛門は仕事に追ひまくられてゐる時は別人のやうに頑强な口のきき方をする。彼にすれば、雪が降り大地が凍てつくまでには、鐵道工事を八九分通り仕上げたいのだ。さうすれば、來年の夏頃には開通式の運びになる。

「私は東京へ歸りたうございます」

淺子夫人の冷たい聲に

「フン、東京の伯爵だとか、侯爵だとか、さういふ閑人連中のお茶の會や舞踏會に、早やく出席し

たいだらうね……、歸つてもかまはないのだよ」

「いえ、私はとにかくとして、あなたに歸つていただく事をおすすめしたいのでございます。あなたが御歸京なさらないと、典子が何時までたつても此處に居ると申して居ります。」

「……」

「克己樣と典子の結婚式をどう遊ばすおつもりですか、お伺ひします……。東京の伯爵家から克己樣の許へはもう今までに幾度となく歸京せよといふお手紙が參つてゐるのでございますよ」

數ケ月待つて、既にしびれを切らした淺子夫人の思ひ切つた言葉だつた。

「それや克己君には氣の毒だが、冬になれば僕も歸京するのだから、どうせ惚れてるんだ。もう少し待たせておいたらどうだ。二人とも面白さうに遊んでゐるぢやないか、え？　ハツハツハツ」

淺子夫人が眞實困惑してゐるのだと知つて、傳右衞門としては打ち解けて胸を割つた返事をしたつもりだつた。

ところが、そのふつと氣を緩めた夫の言葉が彼女の行儀正しい神經に觸れて、……それは不幸な事ではあつたが

「あなたは……、どうしてそのやうな野卑な言葉づかいをお改めにはなれないのでせう……、ですから典子までが」

「父親の儀を軽蔑するといふのかね」

「……」

「貧乏子爵の娘が、成り上り者の韮崎傳右衛門に意見をするのかね、え？　淺子……」

機嫌のいい足どりで歩かうとする人間の足もとを、家庭教師の皮肉がつい何時もの癖ですくい上げてしまつた。ばつたり倒れた機嫌のいい人間の激しく燃え上る恥かしさと憤り。傳右衛門は淺子の實家を貧乏子爵と罵しつて腹いせをした。

淺子夫人は蒼ざめた頬をふるはせて唇を嚙んだ。

「典子は、お菊さんと申す方の行方を探すために、實はこの北海道に來たいと申したのでございます。西村に聞いたのでございますが……、私も、克己樣も、そのおつきあひなのです。あなたは御存知ではございますまいけれど」

それは愛情を持たれない。まだ自分から持つ事を無駄だと割り切つて考へてゐる母親の寂しさが言はせた言葉だつた。

「菊が北海道に居る？　ハツハツ……それがどうしたんだ。典子と昔から菊や俊政にはなついちやあ居らんよ。典子は儂が好きなんだ」

「あなたがね」口を歪めて冷笑した。

その冷笑が傳右衞門の心を激しく刺戟した。

「典子は儂が好きなんだ。この北海道に菊がゐようが陸政が居ようが、典子とは何んの關係もない。放つとけばいいのだ。大きなお世話だ。典子は儂が居るから北海道に居るのだ」

「では、あなたにどうしても御歸京をお願ひしなくてはなりません」

「だから、冬になれば……十月をすぎれば歸ると言つてるぢやないか。克己君は典子に惚れとるんだから……」夫は特にそこだけ語を强めて「惚れとるんだからね……待たしておけば大丈夫だ」

「園井樣との緣談がこはれてもかまはないと、あなたは仰有いますのでせうか」

「……」

「かまはないのでございますね」

「かまはんツ……」

傳右衞門は癇癪聲を立ててついと椅子を立ち上り、窓をあけて、秋の夕風の中に、黑々と佇むポプラの木をジツと見てゐたが、やがてそれに話しかけてゐた。

「大分風が冷たくなつたなあ。後一ケ月だ。地面が凍るまでに大車輪で工事をやらんとなあ、ハツハツ」

或はそれは……仕事にだけしか愛されない傳右衞門の、妻にも娘にもかつて一度も愛されたといふ

自信のない彼の、ほんとうの心の底からの悲しい獨白なのかも知れなかつた。……にも關はらず、それを淺子夫人は、「事業の蟲」のやうな傳右衞門の、何等の精神的な救いのない醜い姿なのだと解釋した。

「あなたは、事業がうまへ行つてゐるので有頂天になつてゐらつしやる。結構な事でございます。園井樣との緣談がこはれてもかまはないと仰有る。結構な事でございます。」

ホホホ……と、淺子夫人の嘲笑は悲劇を伴もなつて行つた。

「御自分の足場を得るのに必要な時には、ただ一つ、子爵といふ肩書があるばかりに、私の實家のやうな貧乏な家の娘を、このやうな不束な人間を妻としてお迎へになり、それが出來てしまふと、もう今では、伯爵であらうが侯爵であらうが、そんな名目だけの肩書の力は借りなくともいい。そんなものは必要ではない。との無茶な我ままが氣に入らなければ、園井家などとは緣談は結ばなくともよい……と、斯ういふ譯なのでございますね。もう自分には、そんなものは必要としない程の地位も出來、名譽も得た……と、斯うなのでございますね。ホツホツホツ……、でも、でもあなたにも與子さんにも、財力はともかくとして、それだけの品格は備はつてはゐない。それをあなたはお氣づきにはなりませんのね」

ガタリ……、窓が閉ぢられて、傳右衞門の聲が慄えて叫んだ。

「淺子……、今の言葉をもう一度……、もう一度だけ聞かせて貰はう」

×　　×

傳右衞門は何時にない强い語調で、典子に北海道へ殘れと言つた。

「お前は儂の娘だ。儂の言ふ通りにすればいい」

典子はかつてそのやうな父の恐ろしい顏を見た事がなかつたので怖へてしまつた。

淺子夫人と克巳とが同じ汽車で札幌の驛から東京へ向つて引揚げて行つたのは、十月の末のある寒い朝だつた。

傳右衞門はそれとは無關係に工事の現場へ行き、典子が二人を停車場に見送つた。

半ケ年も彼女の爲に忍耐をつゞけて、今爲すところもなく東京へ引き揚げて行く克巳に、典子は取り返へしのつかない濟まない事をしたと思つた。

底冷えのする歩廊に立つてゐる典子は、汽車の窓から半身をのぞかせてゐる克巳の顏を見て、泣きさうになつた。何故もつと早やく結婚してしまはなかつたのだらう。

「典子さん、僕が自信を持たなかつたからいけなかつたのですよ。あなたを幸福にする爲に此處までお供をして來ながら、肝心の自分の家族たちを、典子さんを明るく迎へ入れる爲に、何故もつと早

やく說き伏せやうとしなかつたか、典子さんと僕と、二人だけが家族達に離れて新生活をする事を考へたつてよかつたのだ。それをやらうともせずにあなたに、我慢を强いやうとした僕がいけなかつたのだ。必らずさうするやうに、東京へ歸つたら直ぐに準備をします。典子さん。十一月には歸京なさいますね。待つてゐますよ」

「私、もう今ではどうしたらいいのか……、でも。歸りますわ。必らず……」

札幌驛のホームにそそり立つポプラの梢に僅かにしがみついてゐるわくら葉の、そよりとも動かない靜けさが、却つて底冷えのする今日の寒さを强めてゐて、ホームに立つ見送人は、典子の他には、ねんねこ袢纏に赤ん坊を負つた三等客の移民の妻のやうな女。ホームは寂しかつた。

淺子夫人は何を思つてゐるのか、ショールに顎を埋めたまま座席のクッションに凭れ、一言も口をきかなかつた。典子は彼女と父親との間に幾度かの爭論があつたのを知つてゐる。それが總て典子自身が原因であると知つて、母に慰さめの言葉を送りたかつた。しかし、母は口をきいてくれない。

――仕方がない。母にも責任があるのだ。

濃紫の被布を着て、頭髮の後半を掩ふエンジ色のリボンをかけた典子の姿を、車中の人々は好奇の眼で見た。

「韮崎の娘だよ」と、囁やく聲も聞こえてゐた。

典子は東京へ歸りたかつた。

淺子夫人は遂に口をきいてくれないのか、ならばそれでもいい。彼女とは永久に和解出來ない宿命にあるのだ……と、典子が母の横顏からふいと視線をそらせた時、丁度發車のベルが鳴つた。

突然、何を思つたのか、淺子はガラス窓を慌ただしく引き開けた。

「典子さん……、十一月ですよ、待つてゐますよ。克己さんはいい方です」

「ええ、それは……」

「典子さん……」何か口ごもつてゐたが「あなたは誤解してゐらつしやるか知れないけれど、あなたに誤解されたまま去るのは寂しい。……私も、本當はいけません。今度それに氣がつきました。お父樣と罵しつて罵しり合つた揚句に……私はお父樣に怒鳴りつけられました。お父樣は永い間、言ひたいのにそれを我慢して耐えてゐたのでせう。……俺は下司かも知れない。野蠻かも知れない。だが俺だつて人間なんだ。下司と言はれれば腹が立つ、もつと下司にしてやらう、もつと野蠻になつてやらうといふ氣になる。お前のやうな貧乏子爵の娘より、強情でひねくれてゐて厭な女だつたが、菊の方がずつと人間らしかつた……。私はそれを聞いて侮辱されたと思ひました。そして今日は東京へ歸ります。……私は實家へ歸らうと思ひました……。けれど、今やつと思ひ直しました。お父樣も惡いけれど私も惡かつたのだと」

浅子夫人はほろほろと涙をこぼした。韮崎家の冷酷な家庭教師浅子夫人がである。或ほもうそれも彼女の良人との間の溝をふさぐにはおそすぎる涙であるのかも知れない。

「お母様……」

典子は叫んだ。

しかし、はや列車は動き出してゐた。

「お母様……」

典子は走りながら叫んだ。次の言葉がもどかしくて出て來なかつた。彼女はあへぎながら走つた。

克己が「典子さん。左樣なら……」と、手をふつた。

典子はホームのはずれまで行つて立ち留まつた。

列車の去つてしまつた驛の構内には、何時降り出したのか、まつしろな雪がサラサラと音を立てて降りはじめてゐた。

雪は典子の濃紫の被布や、エンジのリボンに白くしみついて行つた。

十月の末、初雪である。

「どうです。御覧の通りですよ。道廳はがんがん言つて來るし、あんたみたいな小煩さい人が監視してゐるし、どうもこの現場事務所もやり切れませんよ。ハツハツハツ……」

西村は如才なく俊政の言葉をはぐらかしながら、工事場を指さして細かい說明をはじめた。

今年度の仕事の終りは、地面が凍てついて枕木の敷設が不可能になつた時だといふ。それには後十日か半月を餘すのみだつた。それまでにどんな事情をも押し切つて八分通りは路線を敷設しておきたいといふので、雪の中に工事は强行されてゐた。

掛聲も景氣よくあげてゐるのが內地人の土工で、無言で內地人のする通りのことをコツコツとやつてゐるのがアイヌ族である。

俊政が朝野日報をやめたのは、夏の七月のことだつた。韮崎攻擊の新聞記事もさう何時までも讀者は喜ばず、飽きられぬ先にと、新聞社は探訪を打ち切つて歸京せよと、俊政に命令した。彼は……此處で頑張らなければ、アイヌ達は何の得るところもなく路頭に迷ふのだ……と返事をした。折返へして……その記事はもう價値がなくなつたから歸れ……と、命令が來た。俊政は歸京するかはりに辭表

を送つた。新聞を賣らんが爲の正義だつたのかと、彼は失望したのである。

新聞社を辭めて二月ほどしてからやつと、彼の努力は實を結び、鐵道會社は道廳の命令に從つて、彼等が土地を奪つた部落のアイヌ人たちを、鐵道工事に使用する契約を結び、工事が終つた後は、會社の手によつて代替の土地を提供する契約が成つたのである。

「日給もあなたの仰有る通りにちやんと拂つてますよ……、本當は内地人なみに拂つたんぢやお算盤に合はないのだがね……。どうでせう。一應はあなたの顏を立てたんだから、もう少し安くしちやいけませんかね」

西村は、土工達が線路を敷設するための地盛りをしてゐる所から、その先のまだ樹木の伐採をやつてゐる所あたりまで、俊政を案内して歩きながら、折あらば契約を會社の分のいいものに變更しやうと企らんでゐる。

「駄目だよ君……、君は執つこいね」

「執つこいのはあなたですよ。あなたつて人の根氣のよさにはつくづく負けましたよ。や、はりその、お父樣に似てゐらつしやるのですね」

「父の事を言ふのはやめて下さい」

俊政は不機嫌に言つた。

「どうしてですか、坊ちやん、あなたは小さい時から別れてゐらつしやるから、御存知ぢやあないでせうが、韮崎の御前ときたら、相手が政府であらうと、新聞であらうと、殊に道廳のちんぴら共なぞは歯牙にもかけないんですから……、並大低のことでは動く人ではないんですよ。それがどうして斯うも容易に妥協したかと言ふと……」

「相手が僕だからと言ふのですか」

新聞社をやめて以來すでに四ケ月、退職金は既に費消しつくして、今ではサムロツオ達の部落の隅に堀立小屋を建てて、彼自身がむしろ、貧しい義俠の人として、札幌あたりの小新聞の新聞ダネになつてゐる俊政の住居に、時折封筒に入つた若干の紙幣が、無名の人から寄贈されて來る事がある。俊政は彼の義憤に贊同する人からの淨財だと思つて有難く受けて運動費に使用してゐたのだが、或る時の封筒の消印が、札幌の韮崎御殿のある町の郵便局のものだつたのに氣づいて、若しかすると……と。思ひ、まさかと、直ぐにその考へを打ち消した事がある。今の西村の言葉に、ふとそれを思ひ出して砂を嚙むやうな思ひがした。

「さうなんですよ。坊ちやんはどう思つてらつしやるか知らないが、交渉の相手があなただからこそ、御前樣はあんなにももろく折れておしまひになつたんですよ。やつぱり御前樣もねえ……、肉親の情ですよ」

西村は俊政の心を探ぐるやうな眼で見た。

「……と、すると、僕の父は、僕が思つてゐる以上に厭な人ですね」

「え?」と、西村はきよとんとして立ち停つて「どうしてです。だつて親子の情だからこそ……」

「親子であらうが他人であらうが、正義と不正義に變りはないぢやないぢやありませんか、他人だから正當な抗議をも採り上げない。肉親だから採り上げる……。その氣持が厭なんだ」

俊政の歩く先々で、仕事中のアイヌ族たちは、或る者は手を休め、或る者は仕事を續けながら、丁寧に頭を下げた。彼は今ではアイヌ族達から。「神のやうなニシパ」と、稱ばれてゐた。韮崎の差し金にしろ、西村の取り計ひにしろ、彼は鐵道會社に對しては一歩たりとも妥協してはならない、アイヌの代辯者なのだつた。彼は肉親の情なぞといふものはとつくの昔に捨ててゐるのだ。

俊政達が現場事務所へ歸つて來ると、其處では一人の娘が、彼等の爲に熱いお茶を湧かして待つてゐてくれた。

事務所の入口で、肩につもつた雪を拂ひ落してゐる俊政に

「松坂さん、會社ぢやあこんな小娘にまで仕事をあてがつてゐるのですぜ。あなたとの約束を守つて……、大變な費用ですよ。全くねえ」と、意味あり氣に言つて笑つた。

俊政が言はれた方をふりかへつて見ると、事務所の技師や、現場監督の連中に茶を注いで廻つてゐ

る女給仕がマカリナであるのに氣がついた。

「この他にも、あなたの仰有るやうに、部落(コタン)の連中を困らせない爲にいろいろとね……。どうです。大出來でせう」

西村はさう言ひながら俊政に椅子をすゝめた。彼が腰を下ろすと

「お茶をどうぞ」

マカリナが彼に向つて微笑みながら茶をすすめた。

「有難う……」

「どうです。此のぐらい會社は氣を使つてゐるんですよ。……松坂さん。その内に韮崎の御前にお逢ひになりませんか」

「逢ひたくはありませんね……」

俊政は熱い茶をすゝりながらもすげなく言ひ切つた。

西村の此處半月このかたの豹變ぶりは、或は傳右衞門からそれとなく言ひふくられたものかも知れなかつた。傳右衞門は淺子夫人との生活に……それは十何年來、互に忍耐をつゞけ、同時に我儘をつゞけながらも、どうにか破局を見せなかつたものだが……遂に絶望を感じて、肉親である俊政に妥協の手をさしのべてゐる、その心の現はれなのかも知れなかつた。

だが、俊政はその妥協を、彼自身を抱き込むことに依つてあの部落の連中を再度悲境におとし入れる會社側の奸策と判斷したのである。

「どうも、大學を出て學士樣になつたといふのに、新聞社だなんて不思議な所にお入りになるだけあつて坊ちやんは變つてますねえ」

「……………」

「私は全部知つてるんですよ。このマカリナの部落(コタン)では大評判なんですつてねえ、マカリナが坊ちやんに惚れてると言ふんで……、だから特に、この娘は事務所付にして優遇を……」

「西村さん……」

それは西村の小細工である。その見えすいた小細工を不愉快に思つて俊政は思はずたしなめた。

「西村のニシパ……、私、松坂のニシパと、何んでもないの……、何んでもないのですよ」

マカリナが西村の言葉を聞きとがめて、まばらな舌でさう言つたので、事務所の連中はドツと聲をあげて笑つた。

「おい、マカリナ……、お前、毎晩松坂先生の堀立小屋へ忍んで行くつてえのは本當か……」

下司つぽい冗談を言つたのは土工上りの現場監督の、股火鉢をしながらのふざけ半分であつた。彼等にすれば日常茶飯事のその冗談口も、俊政にとつては激しい侮辱と感じられ、マカリナにとつては

彼女自身をアイヌの掟を破る淫奔娘と罵しられた事になる。

「ニシパ……、それは何んの事？」

「お前と先生とが出來るつて事よ……、せいぜい可愛がつて貰ひな……」

又もや笑聲が起こつた。中には俊政の憤怒に氣づいて笑はない者もあつた。

「まあツ……」

マカリナは、突然……、彼女に與へられた小机のところへ行つて、其處にひざまづき、アイヌ語で神の名を唱へながら、聲を上げて泣き出した。

「西村さん……、僕は歸る」

「松坂さん、まあいいぢやありませんか」

「君達は何んといふ人なんだ。人の心を傷けてそれが嬉しく笑ふのか」

「いや、これは唯……、私達はこの位あなたのお氣持を尊重してゐるといふ……」

「馬鹿ツ……」

俊政の掌が激しく西村の頰を打つた。

氣色ばんで立ち上つた現場監督の荒くれ男達を「はやまつちやあいかん、はやまつちやあ……、社長の息子さんだ」

西村は傳右衞門の秘事をさらす事によつて防ぎとめた。

「失禮します……」

俊政は荒々しくガラス戸をあけて戸外へ出た。

雪が降つてゐた。

雪の降りしきる彼方では、文明の通路、鐵道の建設を是非とも來年の夏には完成させやうと焦せる人達が、その中にはアイヌ族の人々も交じつて……、トロツコに土を運び、原始林の巨木を伐り倒してゐた。急がねば大地が凍る。建設は冬眠狀態となる。その人々の姿を追ひまくるやうに雪が降る。

「ニシパ……」松坂のニシパ」

マカリナの泣聲が追ひかけて來た。

「……」

「御免んなさい。私が泣いたからいけなかつたの」

「そんな事はない。彼奴等がいけないのだ」

「だつてニシパ……、ニシパ、私はニシパが好きなのよ」

「マカリナ……。何を言ふのだ」

「昨日まではさうでなかつたの、でも、今はじめてさうだと判つたの……」

「馬鹿、そんな事を言つてはいけない」

「いゝえ、私は言ふの……、私はニシパが好きなの……」

「マカリナ……、お前、一昨日も酋長や年寄たちに叱られてゐたぢやないか。松坂のニシパを戀することはアイヌの掟を破ることだぞとさう言つて……。僕は知つてゐるんだ」

「叱らない。叱らない。酋長も年寄（ケライ）も皆松坂のニシパが好きなの、だから叱らない」

「だから皆は、僕に遠慮しながらお前を叱つてゐるのだ。……僕はそれを知つてゐる。……部落の人達に心配をかけてはいけない。……普通の時なら掟なんか何んだと言つて破つてしまつてもかまはない。……けれど、今は皆が心配を胸に持つてゐる時だ。その上に僕達の事で心配をかけてはいけない」

「ニシパは私が嫌ひなの？……私はニシパが好きなのよ」

マカリナはさう言つて雪にまみれたシャランペをそのまゝに、俊政の胸にしがみついて激しい聲を立てて泣いた。

今しがたまでは彼女自身も守り切れると信じ、破るまじと誓つてゐた部落の掟。無理に押さへてゐたその掟が、人に侮辱をうけ。その侮辱を彼女に代つて憤激した俊政のまごころに打たれて、一擧に破れてしまつた激しさだつた。

雪に風が加はり、まつしろいものは、あたりの木も土も山も包んで中空にくるくると舞ひ、右に飛び左に飛んだ。

「マカリナ……」と、俊政は腕の中へぎゆつと、柔らかい肩を抱きしめて「僕は君が好きだ。けれども、マカリナ……。部落の人々に、君を好きだから斯うしてゐるのだ、斯うしてやつたのだから、その代りに掟を破ることを辛抱しろ……と、僕がさう言つてゐるやうにとられたら、何もかも皆お怒ひになつてしまふのだよ。判る？　判るかい」

「私は好きなの……、私はニシパが好きなの」

マカリナの涙が俊政の胸にふりかかる雪を溶かし、彼の胸を今にも熱く溶かさうとした。

「マカリナ、事務所へお帰り」

俊政は思ひ切つて相手を其處に突き放した。不意をくらつてマカリナは雪に倒れた。

「あツ、失敬……、大丈夫かい」

「ニシパの馬鹿……ニシパの……」

そのまま娘(メノコ)は雪に面を伏せて聲をしぼつた。

俊政は眼鏡を蔽くす雪を拂つて、部落へ向つた。

――振りかへつてはいけない。それで萬事がお怒ひになるのだ。

酋長や年寄たちは、きつと……恐らく……、今日も部落の掟が守られてゐる……と、さう言つて安心するにちがひない。

吹雪……そして吹雪。

明日か明後日には、大地が凍るかも知れない。

移住地の女

シヤンシヤンシヤンシヤン……。橇が走つてゐる。

舊曆の十二月の末。

「まだ大分道のりはあるのかね」

と、俊政は聞いた。

ヒユツ……と。十頭ばかりの樺犬の頭の上に鞭の音をさせてゐるのはサムロツオである。

「もう一時間ばかりです」

「案外に近いのだね」

鐵道會社が部落(コタン)の連中の爲に提供した代替地とは何んな場所なのか、其處では農耕なども安心してやれる土地なのか、それを俊政は調査するつもりで、サムロツオの身體の暇を見て、橇を走らせて貰つたのだつた。

それにもうひとつ氣になる事は、彼よりも先にその土地へ行つて調べて來たサムロツオの報告に依れば、其處は鐵道會社同樣、韮崎の經營になる北海道開發の所有地であつて、既に內地人の移民が數

家族も住みついて土地を開墾してゐるのだと言ふ。しかも、その內地人達は其處が部落の連中の代替地になると決定すると同時に、會社から追ひ立てを食つて居り、サムロツオが行つたら

「お前達のおかげで、自分等は折角開墾した土地を拋棄しなければならぬ」

と、くつてかかたと言ふ。

彼等は其處を借地して開墾してゐたのかも知れない。

「金持といふものは、どうしてさう弱い者虐めをするのだらう」

と、俊政は憤ほつたが、とにかくその委しい事情を調べなくてはならなかつた。彼は母親の消息を探し求めたくて焦せつてゐたが、部落へ到着して以來の狀勢はそれどころではなく、函館の宿屋でその行方不明を聞いたきりで、その方にはまるで手もつけてゐない有樣だつた。サムロツオにだけはその事情を話して、今度の土地の調査が濟んだら、彼にも應援して貰つて方々の開墾地を探して見るつもりだつた。

鈴の音が鈍つて、サムロツオが盛んに鞭をふる時は、橇が坂路を昇つてゐる時で、最後のそれが終ると、路は下り坂となり、遙かの下に可成の廣さの盆地があつて、その中央を小川が流れてゐた。

小川を挿さんで畑が開け、その中に點々と數戶の內地風の堀立小舍が建つてゐた。寒冷の土地へ行つても、暑熱の土地へ行つても、飽くまで自分の生れた土地の風習をそのままに持ち込んで、寒暑に

耐える工夫を凝らさうともせず、考へやうともしない。そして病氣を得て倒れてしまふ。それが反省のない日本人の、自分の生れた土地以外での生活ぶりなのだ。だから、北海道の山の中に於いても内地の移民の棲家は一眼で判る。

「あそこなんです」

サムロツオは指さした

地味は肥えてゐるらしかつた。

「よささうな土地だねえ」

「あそこに居る內地の人もさう言つてゐました。お前達には勿體ないつて……」

寂しい聲だつた。

「だけど、君達は今度こそ、本腰で農耕をやるのだらう」

「やります。やらなくては立ちおくれてしまつた我々は、益々生きて行けなくなります」

「とにかく行つて、事情を聞いて見ようぢやないか。」

「ニシパ……。今度はあの人達の味方になつて、會社と喧嘩をして、何處かへいい土地を世話して上げて下さい」

「或はね……」

聲を揃へて笑つた。

「ニシパはいい人だ」

そして、鞭が鳴つて橇は凍てついた坂を下りはじめた。サムロツオは渾身の力をこめて制動器を引きしめてゐた。背中の鉛彈の獵銃が搖れる。

やがて、坂がなだらかになつて速度が鈍つて來ると

「ニシパ……。ニシパは妹が嫌いですか」

「何？」

「妹が嫌いですか」

「何故聞くんだ」

「お嫁さんに貰つて下さい」

「掟はどうする」

「掟なんかどうでもいいです。そんな事を言つてるから立ちおくれてしまふのです。昔からのしきたりにばかりしがみついてるから……」

「……」

「貰つて下さい」

「…………」

「妹はニシパが好きです」

「駄目だ……」

「ニシパが內地人で、妹がアイヌの娘だからですか」

「馬鹿ッ……」

「………」

「此の際に、君達は部落の內輪揉めがやりたいのか。僕とマカリナと、二人だけが辛抱すればいいんぢやないか」

「ニシパも辛抱……、ニシパもね」

「もう言ふなよ」

「私なら我慢は出來ん」

サムロツオは大きな聲で笑つて

「二人とも意苦地がない」

だがそれは、何處かに彼自身の悲しみを隱くしてゐるやうな言ひ方だつた。

橇は畑の中央の路を通つて、ある堀立小舍の前へ着いた。

「停めますか」

「うん、停めてくれ、此處の人の話を聞いて見よう」

俊政を外に待たせて、サムロッツォが先に堀立小舍の木戸をあけた。此の家は彼がこの前にも來た事のある家だつた。

「御免下さい」

此の前の時には年をとつた男が出て來たが、今日はその妻らしい女だつた。

「此の前にうかがつた部落の者ですが、御主人はおいでになりますか」

女は默つてサムロッツォをじろじろと見据えて居たが、

「此の土地は立ち退くわけにはいかないのだよ。開發會社へ行つて社長にさう言ふがいい。何處まで邪魔者にする氣なのだつて……」

「今日は實は內地人と一緒に來たのだけれど、此の人はよく話の判るニシパです。……私達も此の土地へ移住出來ないとなると困るのです。よく話をしてみて下さい」

「開發會社の人間だね」

と、女が鋭く叫んだ時には、サムロッツォは既に戶外へ出てゐた。

「今日は主人が居なくて細君が居るのです。細君の方が怖い人です」

「サムロツオにでも怖い人が居るかね」
と、俊政は笑つた。
「失禮します」
彼はサムロツオをしたがへて小舍の中へ入つた。初めは小舍の中が薄暗らくて相手の顏がよく見えなかつた。
「俊政ぢやないか」
「………」
「どうしてお前……」なつかし氣な聲だつた。
よく見ると、其處には菊が立つてゐた。
「あ、お母さん」
俊政は叫んで「お母さんはこんな處にゐらしつたのですか」
「お前……、此處へは知らずに來たのかい」
「知りませんでした。お母さんが斯んな處にゐらつしやるなんて……」
「よく來ておくれだつたね、これはきつと何かのひきあはせなんだね……お上り……」
俊政はサムロツオに向つて「お母さんなんだ、お母さんに逢へたんだよ」

菊は上り框に腰を下ろして雪靴を脱がうとする俊政に

「それで此處へ來たのはどういふ譯で……」と、彼とサムロツオの姿を見比べた。

「この土地を調査に來たのです。さうして偶然……」

「この北海道開發の借地をだね……」

「此處がアイヌ部落の移住地になりましたのでね」

「さうね」

俊政は母親の姿が見つかり次第、彼の許へ何んとでもして引きとるつもりだつたので、何んのこだはりも持たず……、さうねと、俄かに冷たく變化した菊の表情の鋭さには氣がつかなかつた。

「サムロツオ、君も上らないか」

と、彼は同時に片足を上り框にかけた。

「上らないでおくれ」

瞬間に、菊は物凄い聲を出して叫んだ。

「……」

「さうだつたのかい、それで判つたよ。成程ね」

ハツハツハツハツハツ……、ヒステリツクに、しかも男のやうにふてくされた聲で笑つた。

その今までもかつて一度も見たことのない恐ろしい形相に
「お母さん、どうしたのですか」
「成程さうだつたのだね、だからなんだね。ハッハッハッ……、それもいいだらう」
「お母さん……」
俊政が強いてとめようとすると
「上らないでおくれ、お前なんぞは私の子供ぢやないんだから」
「……そ、それはどう言ふわけですか、お母さん」
「お前の胸に聞いたら判るだらう」
「判りません。何んのことだか」
「お母さんにそれを説明しろといふのかい……説明しろと言ふのなら」
菊は激しいけんまくで
「お前は母さんなんかについて苦勞するより、韮崎の味方になつた方が、お父さんの味方になつた方が樂な上に、うまいもの食つていい暮らしが出來るから、母さんには新聞社といふ所へ入るのだなぞと嘘をついたんだ。韮崎に楯をつくのがいやで嘘をついたんだ。そればかりぢやない、この母さんをこんなにも虐い目に會はせた韮崎の所へ歸つたんだ。今度は今度で、韮崎の手先になつて私達を此

の土地から追つ拂ひに來たんだ」

「お母さん。それはちがひます」

「お默り……、俊政、世の中には非道な事が何時でも通用すると思つてると飛んだまちがひだよ。やるならやつてごらん。お父さんと二人して私を虐めるなら虐めてごらん。さぞ面白いだらうねえ」

狂ほしく叫んで笑つた。

菊は彼女の息子が大學を出て學士様にさへなつてくれたら、きつと官員様か實業家になつて彼女を捨てた韮崎を見返してくれると、單純な、無智な希望を抱いて、俊政が大學を卒業するまでの十何年間執念深く、偏質的に、自らの身體に鞭をあてて働いて來た。そしていよいよ卒業と決まつた時に、俊政から官員様にも實業家にもなりたくはない。新聞記者になつて社會の正義の爲に働らくのだといふ手紙を受けとつた。……失望そして落膽。……しかし、幾度の手紙の往復の後、俊政が「韮崎に復讐するなどといふ小さな考へを捨てて、僕と母さんとの安らかな幸福を得る爲に……、自分は一心に働くつもりだから、母さんもその考へを捨ててくれ……」と、言ふ手紙を寄越した時、彼女ははじめて豁然としたものを感じて、俊政に返事を書いた。

「私のことは氣にしないで氣持を樂にして働いておくれ」

そして菊は、その頃……、移民船の着く棧橋で急病を起こして倒れてゐた年老いた移民を助けて病

院の世話までしてやつた……その緣故で知り合つた年老いたその男と夫婦になり、金は自分が少し持つてゐるからと、現在のこの土地へ入つて開墾をはじめたのである。

彼女の男まさりの性格の他の半面が、安らかな心の中に浮び上つて來て、俊政には經濟的な負擔を掛けまいと思ひ、異境の地函館で、ふとした緣で知り合つた老移民を……彼女の力で、盛り育ててやるつもりなのだつた。

そして、やつと開墾も順調に運ぶやうになり、ほつと息をついたと思つたら借地した北海道開發會社から立ち退いてくれと言つて來た。

——この會社の社長は韮崎だつた。

畜生奴、それをうつかりしてゐた自分も間拔けだつたが、奴は相手が自分だと知つて、意地惡るく出やがつた……と、菊は哀れにもさう思つたのである。

現在の韮崎傳右衛門がどのやうな立場にあるか、どのやうな大富豪であるかは菊も知らなくはないだが彼女は、自分が彼に對する復讐を片時も忘れなかつたのと同じやうに、韮崎も片時も忘れずに自分を虐めやうとしてゐるのだ……と、哀れにもさう思つたのである。世の中のすべての動きを、唯自分一人を中心にして考へる無敎養な女の（或は男の）悲劇。

其處へ俊政がこの開墾地の事で調査に來た。

――韮崎の手先になつて私を追ひ出しに來たのだ。新聞社へ入つたといふのも口實だ。自分といふものをふり捨てる爲の口實だ。

俊政が韮崎の手先になつて堂々と、何んと鐵面皮にも自分を追ひ出しにやつて來た。畜生ッ。韮崎や俊政がその氣なら、きつと典子だつて蔭で笑つてゐるにちがひない。虐めるなら虐めて見ろ、殺せるものなら殺して見ろ。

この土地の立退問題は、北海道開拓鐵道の手代西村要助といふ、商人根性が心の隨まで沁み込んだ、小人物の急場を切り拔ける爲の次から次への小細工の一つにすぎないのに、唯それつぽつちの事にすぎないのに、その問題以來急速に歪んで行つた菊の性格が……殺せるものなら殺して見ろと、悲しくも齒ぎしりをして口惜しがつてゐるのだつた。

「さあ、もう判つただらう、母さんの氣持は、お歸り、歸つておしまひ。韮崎さんに宜しく、皆仲好く惡い事をしてお暮らしよ」

呆然として、泣くにも泣けない氣持でつつ立つてゐる俊政に向つて、菊は罵倒を浴びせ、嘲笑を叩きつけた。

「私はテコでも此處を動くんぢやないからね、ハッハッハッ……」

菊の、そのふてくされた態度や下司な言葉は、まだ彼女の夫であつた頃の傳右衞門が長い間持て餘

して、……しかも、已れにもそれがあるのを反省せずして……、遂に彼女を捨てた原因をなすものであつた。

俊政は今、彼の眼前にまざまざとそれを見た。

——父も悪い。だが、母さんも悪い。何故もつとお互に自我を引つこめ合つて暮らす事が出來なかつたのだらう。

彼の五體からあらゆる力が足許へ拔け落ちてゆく。何もかも捨てて世の中から消えて無くなりたい悲しさ。

「お母さん、僕は何れ日を改めて來ます。僕は僕なんです。僕はお母さんの子供なんです。そしてお父さんの子供でもあるのでせう、きつと……」

「お父さんのね……、ほらね、白狀した。ハツハツハツ」

「お母さん、だけどね……、此の土地はね……、大ぜいの人の爲に、困つてゐる人の爲に讓つて上げて下さい」

「フン、やつぱりお父さんの子だねえ、言ふ事がしつかりしてるよ」

「………」

サムロツオは何時の間にか戸外へ出てゐた。

俊政は力無く雪靴を穿き直した。
「お母さん……。また來ます」
「……」
子供は遂に誤解の黑雲と、永年の悲しみがもたらした歪んだ性格の濃霧にさへぎられて、折角探し求めた母のふところに入ることも出來ず戶外へ出た。
「ニシパ……、歸るかね」
「うん、歸ろう……」
シャンシャンシャンシャン……。
そして、橇の鈴が往路をたどつて、ふたたび走りはじめた。
あたりの山の麓に咲く樹氷の花が、西陽をうけてキラキラと眼にまぶしい。
「ニシパ……、此の土地は、我々が來てはいけない土地なのだ」
「そんな事はない」
俊政は强く言つた。
「あの人にはやはり立ち退いて貰ふ」
「しかしニシパ……」

「あれは、あの人と、あの人の昔の夫と、僕との間で解決される個人の問題なのだ」

「しかし、ニシパは泣いてゐる」

「泣いてはゐない……」

見渡すかぎりの純白の世界、その白一色の野山の景色が、俊政の眼に反射して、刺戟を與へて、彼は涙をこぼした。

「ニシパ……、涙を流さないですむ世の中といふものが、何處かにあるだらうか」

「………」

「あの人も可哀想だ、ニシパも可哀想だ……、私達も部落の者も可哀想だ。マカリナも可哀想だ」

「皆でさういふ世の中を作るより仕方がないのだよ」

橇はゆつくり坂路を昇りはじめた。

風が吹いて、樹葉の上に積つた粉砂糖のやうな雪が純白の煙となつて散つた。

純情一路

1

典子は十一月に入つた或る日、東京へ歸りたいと言ひ出した。

「園井の家へ嫁に行きたいのか」と、傳右衞門が言つたので、さうですとはつきり答へたが、その娘の申し出に對して、父親は確答を與へなかつた。

傳右衞門は淺子と離婚を決意してゐるらしく、典子が淺子夫人の氣持を、彼女が感じたまゝに傳へると、儂の所へも手紙が來てゐると、父親は言つた。

「儂はもう仕事とお前とだけがあればいいのだよ」

彼は淺子夫人の心境の變化を重大なものとはとつてゐないやうだつた。彼には一つ事を永い間忍耐しつづける代りには、一旦心の扉をとざしてしまふと、頑強にそれを守る癖があつた。融通性のないその頑強さが、仕事の面に於いて。一旦取りついたが最後、如何なる困難をも押し切つてゆく力となり、今日の成功を見たのだとも言へる譯で、今度の鐵道建設に關しても、最初の豫定線路の測定の誤りの爲に、或る沼澤地帶では線路を敷設する爲の地盤が、上を埋めても埋めても底無しの泥沼のやう

に洗下する地點があつた。技師は測定を變更してその附近の山を迂回する事を建言したのだが、

「君は、行く先は都市になる可能性のある沼澤地帶を捨てて、山の中へ線路を敷けと言ふのかね。君、汽車は狐や狸を乘せるんぢやない人間を乘せるのだからな」と、憎まれ口をきいて、其の底無の地面に、土に形を變へた金錢をむやみやたらに注ぎ込ました。その噂を聞いて東京の彼の商賣仇達は

「韮崎の狂氣沙汰がはじまつた、その内にはあの强情さでつまづくぞ」と、嘲笑したが、結局果てしもない底無しの沼だつたといふ譯でもなく、間もなく其處にはしつかりした地盤が出來上つた。彼に言はせれば、そのあたり一帶が何時の日かに市街地になれば、下しただけの資本は充分に取りもどせると言ふのだ。

手代の西村が「でも、御前樣、其處に町が出來なかつたらどういふことに」と、心細い聲を出すと

「他人が町を建てなきや儂が町を建てる。無料で家を貸してやりあ誰だつて喜こんで集まつて住む人が多勢住めば金は自然に落ちるものだ。汽車にも乘るだらう……、つまらん差出口をするな」と叱つた。頑として自說を曲げなかつた。

彼のやうな男は建設の時代には何處の國にも必要な人間である。だが、その半面に於いては、その强い性格が、彼の人生を寂しくしてゐるのである。

彼は自分に對して意見を述べたり、忠告をしたり、或は自分の立場にとつて代らうとするやうな人

間を好まなかつた。菊を捨て、今また十數年間も忍耐をつゞけた揚句に、今更になつて……いつかの夜の激しい言葉の衝突が機會を作つたとは言へ……淺子夫人を離婚しやうとしてゐる。彼は自分の最後の味方だと信ずる典子をまで

——淺子の推薦する園井の家へなぞやるものか

と、さう言ふ言ひ譯をする事に依つて、強制的に自分の手許に引き留めておかうとしてゐるのだつた。

彼は典子を愛してゐた。その氣持はたつた一度、彼の幼友達の澤田に語つたことがあるきりで、肝心の本人にもその言葉を聞かせやうとはしなかつた。嫌はれてゐるかも知れないと、さう思ひながらも、哀みを乞はうとするやうな態度がとれるものか父親のくせに……。と、彼は或る時は叱り、或る時は馬鹿にしたやうな冗談を言ふ事によつて、自己の愛情を通じさせやうとする……馬鹿馬鹿しい努力を續けてゐた。

典子は克己との結婚を封じられてしまつた。

——淺子夫人にも落度がある。菊といふ本當の母にも惡い所があるにちがひない。だが。父のこの頑固さが一家をこんなにも不幸にしたのだ。

それが典子の悲しい解釋だつた。

その頃、東京の克已から手紙が來た。

「父母との別居生活は困難かも知れない。しかし、その困難の中でも、自分が居る限りは、あなたは幸福に暮らせる筈だ。結婚して貰ひたい。幸福になるやうに努力をする」

彼は誠實な青年だつた。しかし、性格が弱く、そして愚かしい程の正直さを持つてゐた。何故嘘を言つてでも愛する女を幸福にしてやる自信を持たないのか。

そして十二月がすぎ、典子は正月を札幌で迎へた。

典子が二十三歳になつた元旦の朝

——人間なんて、我慢を言ひ合つてお互を不幸におとし入れて喜こんでゐる動物だ。もう知らないどうならうとも。自分だけがその犧牲者にされてたまるものか。

と、彼女は、明治三十五年の日記帳の最初の頁にさう書いた。

——まつすぐに、素直に生きやうとするのに、運命がさうさせてはくれない。

さうも書いた。

彼女の周圍の人間は、何かの機會さへあれば、各自が背負つて步るいてゐる暗い悲しい陰翳を脫ぎすてて幸福になれるのに、その機會を掴もうとはしないだけなのだと言ふ事に、彼女は氣がついてはゐなかつた。典子自身もその陰翳を重く背負つてゐるのに……。

彼女は克己に對して、もう手紙も出さなかつた。彼の愛情をさへも。今ではもう人生のすべてを疑がつてゐる典子には信じられなかつた。愚かな娘だと言へば言へないことはない。だが、克己が歸京して以來の三ケ月間といふ月日の流れと、札幌と東京との距離の長さが、二人の間の愛情をそのやうなあいまいなものにさせるかも知れなかつた。

一月の七草がすぎて、古い習慣を守る人々の舊正月の樂しみが近づいて來る頃。

典子が唯一人居間にとぢこもつて、煖爐の石炭の火熱の傍で、東京から取り寄せた「明星」といふ雜誌を讀んでゐたら、女中が來て「お孃樣、臺所に妙なアイヌ人が來て居りますけれど……」と、知らせて來た。

アイヌ人が臺所へ物を賣りに來るのは珍らしい事ではなかつたので、それと同じなのではないかと聞くと

「でも……、東京のお嫁入り先へお送りしてくれと言つて、大きな鮭を十匹も持つて參つたのでございますよ」

サムロツオが、冬眠に入つた彼の部落から、はるばるこの札幌の韮崎御殿までその贈り物を運んで來たのだつた。

典子が臺所へ行つてみると、彼はびつくりしたやうに

「お孃さんはまだ此處においでになつたのですか」

「ええ……、もう東京へ歸つてお嫁に行つたと思つてらしたの？」

「……………」

「まだ行かずに居るのですよ」

彼はふつと嬉しさうな笑ひをその表情に浮べたが

「どうしてですか……。私はこれを東京へ送つて、お孃さんとあなたの御主人に食べていただかうと思つて持つて來たのに……」

「御主人はきつと、鮭なんかお食べにはならないわ……、でも、此處で私が食べて上げる」

典子はおどけた言ひ方をして笑つた。

サムロツオは應接間に通されて、半日遊んで、そして、陽が暮れる前に橇を走らせて歸つて行つた。屋敷から去つて行く彼の背中に相變らず鉛彈の獵銃が搖れてゐるのを見て、典子は女中に笑ひながら致へた。

「あの人はあの鐵砲で熊を射つのだけど、命中はしないのよ」

「やはりあの、この鮭も鐵砲でとつたのでございませうか」

東京から來た女中の、大眞面目なその言葉の可笑しさに「さうかも知れません」と、典子は久しぶ

りに聲をあげて笑つた。

サムロツォと俊政が橇をかつて、彼等の部落の移住地を見に行き、俊政が菊に逢つたのはその後の事である。

二月の初め、節分の次の日に意外にも俊政が典子を訪れて來た。丁度傳右衞門が、淺子夫人との離婚の話を賴む爲に澤田を訪ねて東京へ行き、四谷の本邸へは寄らずに一直線に歸つて來た朝で、茶の間で父と娘とが向き合つて無言の食事をとつてゐた所だつた。

小間使が「松坂俊政と仰有います方が……」

「何、俊政？」

傳右衞門は苦い顏をしたが「何の用だと言つてゐた」

「御用は仰有らないですけれど」

「通しなさい」

何時もはさう氣輕には來客に逢はないのに、彼は苦い表情で心の中の動きを隱くしながらも、そはそはと立ち上らうとした。

「いえ、あの……」と、小間使はそれを早やく言ひそびれて赭くなり「あの、お孃樣に御面會の方なのでございます」

「……」

「お通しして下さい。應接間の方に……」

「はい」

典子は東京の報告を何もしない父親が、實は其處で何をして來てか凡そは察してゐた。その父が、俊政の來訪を知つてそはそはと落ちつかない態度を見せる。その心持が判らなくはなかつた。淺子夫人とも別れ、菊とは再び結ぶことの有り得ない父としては、何の用件で來たとも知れない俊政に、慌ただしく一縷の望みを托さうとするのは當然であるかも知れなかつた。

——だが、餘りにも現金すぎる。

しかも、淺子夫人は典子の判斷する所では傳右衞門が何んと言はうとも、此の家庭の生活を續けて行く氣持でゐるし、彼女は恐らくそれを實行するにちがひないのに。……と、北海道開拓鐵道會社を通じての最近の傳右衞門と俊政との交渉を知らない典子は、父の日頃に似合はない素振りを得手勝手で醜いと思つた。

「一寸お眼にかかつて參ります」

苦り切つてゐる父を茶の間に殘して、典子は應接間へ向つた。

昨年の五月の初旬、俊政を本郷の下宿に訪ねて以來十ケ月ぶりで彼に逢ふのだつた。

「流石に韮崎御殿と言ふだけあつて、立派なものだね」

典子が入つて行くと、それまでマントルピースの上の眠り人形を珍らしさうにいぢつてゐた俊政は淡々とした調子で。彼女達の生活をうらやましがつた。

札幌ではじめての煖房装置をした此の邸内では室内の濕氣の爲に、二重になつたガラス窓も霧がかかつたやうに曇つてゐた。たしかに、マントルピースの上の眠り人形でさへも、俊政やアイヌ族よりも豊かな待遇をうけてゐた。

「どうだ、幸福かね、幸福だらうね」

去年の五月逢つた時に比べると見ちがへる程、俊政は肌觸りが柔らかくなつてゐた。だが、典子は彼の顏を見た瞬間に、あの時の悲しさを思ひ出し、心がこはばつてくるのをどうしようもなかつた。

「ええ、おかげ樣で」

「君は少し瘦せたのぢやないのかね」

「さうでせうか、こんなに暢氣ですのに」

「確かに瘦せてゐるよ、苦勞もない筈だのに不思議だね」

「全くですわホホホ……」

こんな筈ではなかつた。彼に逢へば若しかすると母の消息も判るのではないかと、樂しみにしてこ

の部屋へ來たのだつた。幸福かねと聞かれた時にいいえと答へれば、相手はどうしてだと聞いてくれて、或は同情してくれたかも知れないのに……。唯一人の人生の、心强い味方になつてくれたかも知れないのに……。しかし、この久しぶりの對面の、第一歩を踏みちがへた言葉は心とはうらはらにずれて、歪んで、俊政を寄せつけなかつた

「ほんとうに、どうかしたんぢやない？」

「いゝえ」

「變つた事があつたんぢやない？」

「いゝえ、昔と同じですわ」

「君はあの時の事を怒つてゐるのだね」

「まあ、怒つてゐるのなら、ホツホツ……怒つてゐない證據には、お兄樣がおいでになれば斯うして、妹がお兄樣に對して守る禮儀をちやんと守つてお迎へ申し上げてゐるではございませんの……」

俊政は小間使の運んで來た茶菓子には手も觸れず、佗びしい顏をして煙草をくゆらせた。

「覺悟はして來たのだがね」

「覺悟はね……、まあ、ホホホ……」

典子は悲しかつた。

――どうして斯んなにも歪んでしまつたのだらう。

「實は笑はれるのを覺悟でやつて來たのだがね」

「……………」

「僕はお母さんを探してゐたんだ。函館から、突然居なくなつたのでね」

「さうですか」

「君はそれを知つてる筈ぢやなかつたのかね」

「まあ、私が……、だつて私は、お母様にもお兄様にも愛されてはゐませんわ」

「……………」

俊政はつい二三日前に、サムロツォにそれを聞いたのだつた。「ニシパは韮崎のニシパの子供でしたね、私は韮崎のニシパのお孃さんを知つてゐます。お孃さんもお母さんを探してゐると言つてゐらつしやいました、敎へて上げて下さい。お孃さんはお嫁にも行かずにお母さんを……」

サムロツォのその言葉の中から典子の眞實の心を探ぐり出すのは困難だと思つた。だが、若しもそれが本當だつたとしたら……、俊政は典子の口から。自分が傳右衞門の手先ではない事を保證して母の誤解を解いて貰ふつもりだつた。

「君がさう思つてゐるのなら仕方がないが、それはそれとして賴みがあるのだが」

「私にね……お兄樣から？まるで子供の時みたいですのね」

「さう……、全くね、子供の時の氣持のままでつづいてゐたら兄妹が斯う仲が惡くはならなかつたかも知れないね、たとへ別々の親を持つてゐてもね」

その通りだと、典子は思つた。人間としての成長があればこそ、彼女は、父親と新らしい母親との平和を願ひ、何の甲斐もない犧牲者となつてしまつた。兄さんはそんな事なぞは知りはしない。

「で、どんなお頼みですの」

俊政は偶然に菊の居處が知れた事と、菊の恐ろしい誤解と彼の悲しみとを語つた。

「それが誤解だと言ふ事は君が一番よく知つてるのだからね、君がそれを解いてくれれば……、或はこれを機會に、たとへば君は何處かへ嫁に行くにしても、皆の心持の和解が出來るのだからね」

「さう……、それは御心配ですのね」と、典子はうなづいた。

「君が若し幸福な暮らしに居るのだとしたら……若し居るのだとしたらだよ……、此の僕の悲しみは理解出來ないかも知れないけれど」

ホホホ……と、典子は聲を立てて笑つた。

「私にはほんとによくは判りませんわ、お兄樣のそのお氣持は……、でもお兄樣、人間て誰でもみんな、皆一人一人が、一人ぼつちぢやありませんの。自分の事は自分で解決する。それが一番いい事

ではございませんかしら」

「やつぱり來ない方がよかつたらしいな……あの時に君をあんなにまづ怒らせたのは僕の大失敗だつたな、僕は學校を出たばかりの、……つまり貧乏坊ちやんだからね、君には君なりに、生さぬ仲のお母さんに對しての一應の氣兼ねがあるといふ所にまでは氣がつかなかつたんだ……。では行つては貰へないんだね」

「いえ參ります」

「行く？」

「ええ、でも……、それは私のお嫁入りの挨拶に……、もうこれで本當に御縁が切れてしまひますからね、お別れの挨拶に參りますの……」

「さう……、はつきり縁を切る爲の挨拶なのだね」

「さうですの……」

「行くのなら、サムロツオを寄越すよ」

「有難う存知ます」

「あの男は……さうさう、君に頬ぺたをぶたれた事のある、それで知つてゐるのだね……あの男はどんな時にも自分の心をまる裸にして見せるいい男だ」

俊政はゆつくり立上つた。

「ぢや、失敬する」

彼はこの對面を以つて、典子との兄妹の交はりの最後のものとする氣持だつた。彼にもまた典子の心の中の複雜な惱みが判らなかつた。或は彼女の惱みは單純なものかも知れない。彼女が素直であればたつた一言の言葉でその惱みは相手に通じるのだから……。だがそれが素直でないから複雜になり、俊政から見てさへ高慢ちきな表面の表情だけが彼の心の鏡に映る。

男は、女なぞは物を考へないものだと決めてゐる。

兄は、何時の場合でも、妹なぞは、子供で我儘で、惱みがあればたあいもなく白狀するものだと決めてゐる。

俊政ほどの男でさへ……。

どうして他人であるマカリナの心をいたはつてやる程のいたはりが肉親の妹に對しては持てなかつたのか、どうして斯んなにも氣短に、妹を高慢ちきな馬鹿娘だと決めてしまふのか。

肉親であるが故に、身內であるが故に、非を理に曲げてでもかばふ動物的な感情生活。肉親であり身內であるが故に眞の價値を知らうとはせず、自慢はしても尊敬はしない家族主義。兄を尊敬する妹はあつても妹を尊敬する兄はなく、親を尊敬する子があつても、子を尊敬する親のない事を怪しまな

い家族制度。

　俊政ほどの男でさへ……。

　その誤まちを犯かし、直ぐその近くまで身體をすりよせながら、遂に妹の惱みの深い心の垣根の中を覗いてやらうともせずに別れて行かうとしてゐた。しかも理解のあるやさしい態度で、（妹は妹で自分の思ふ通りの生き方をするより仕方がないのだ）と、彼の妹の高慢ちきな無禮を哀れんでやりながら……。

　典子はもう二度とは逢つてくれないであらう俊政の、ゆとりのある微笑を悲しく見凝めながら。ふと父親の心持を參酌して

「お父樣に宜しく言つておきませうか。今日は家に居らつしやるのですよ」

「いえ、その必要はありません」

　俊政は靜かに扉を排して出て行つた。その扉の內側で、典子は彼の去つてゆく氣配をジツと唇を嚙みしめて聞いてゐた。

　茶の間で傳右衞門がたつた一人で、今年の雪解けと同時に着工される沿線の各驛の靑寫眞に擴大鏡をあてて、彼の上京中に技師から屆けられて來た書類とを見比べてゐた。

　――これが完成したら、第二期の豫定線が待つてゐる。

樂しかつた。

だが、その心の隅の誰かが、應接間の主客の會話から取り殘された彼を今にも呼びに來はせぬかと待ちわびてゐた。しかし遂に呼びには來なかつた。

2

橇が山岳の裾に添つて走つてゐる頃から、風が出て、それに雪が交じつた。

サムロツオは幾度も、お孃さん引き返へしませうと言つたのだが、典子は肯かなかつた。

「サムロツオさんには何時も迷惑をかけますね」すまないと思つてさう言つた。

「かまひません、一寸も迷惑ではありません。けど、吹雪になつてお孃さんに若しもの事があつたらいけないから……」

「怖い？」

「怖くはありません」

彼は赭くなつて辯解した。

「お孃さんに惡運がふりかかつてはいけないからです。唯それだけです」

舊正月の前に彼が鮭を持つて札幌の屋敷へ來た時には、典子は去年の五月、彼と二人で、谿流のほ

とりの美くしい景色を見たあの樂しさを忘れてゐて、彼の顏を見て久しぶりでそれを想ひ浮べた位だつた。しかしそれ以來、景色とサムロツオの顏を同時に並べてしばしば思ひ出すことがあつた。思へば彼とのつきあいも去年の春から、克巳との交際と同時にはじまつてゐるのだつた。典子は克巳を結婚の對照として考へてゐるので、サムロツオといふ人間のことはうつかりすると忘れ勝ちだつたが、彼とはたまにしか逢はないのに、實は何時も特別な環境を背景にしてゐるので、思ひ出の鮮やかなのは彼の方に多かつた。

「お孃さんはこれでもう東京へお歸りになるのですね」

「どうして？」

「お嫁にお行きになるのでせう……」

「お嫁にね……、さう、その通り」

「………」

典子は笑つて「でも、今度はあの御主人と一緒に遊びに來るわ」本當の事は言はなかつた。

「………」

「寂しさうね、あなたの頰を打つたり、救けたり、救けられたりしたおつきあいですものね」

「……忘れません」

思ひつめたやうな言葉だつた。

「……」

典子は態と傍見をしてその言葉の持つ意味をはぐらかした。美くしい女がいろんな男のさり氣ない言葉の中から特に耳ざはりのいい言葉を選び出す勘の鋭さで、サムロツオの短かい言葉を

——ああ、やつぱりさうだつたのか

と、典子は適格にうけとつてゐた。

彼女もサムロツオの粗朴と熱情とを好もしく思ひ、何かしら心ひかれるものを感じてゐた。だが、彼がアイヌ族の青年だからと言ふ、特にさうした氣持からではなくとも、ややそれに近いばくぜんとしたへだたりを感じて、それ以上氣持を進めるには實感が伴なはなかつた。

——此の青年だつて、若し誰かと結婚すれば、その翌日からもう直ぐに、心と心の爭ひをはじめるのだ。

典子は笑つて

「吹雪がひどくなつて來たわ、此のまま歸れなくなつたら、お父樣がびつくりするわね」

それでなくても。傳右衞門には無斷で今朝早やく邸を出たのだつた。

言葉の通りに、降る雪の量がふへ、風は横なぐりに橇の上の二人に、雪粉を叩きつけてゐた。もう

サムロツオは言葉をかへさずに橇を崖の下へ落さない爲に……必死になつて前方を凝視してゐた。

シヤンシヤンシヤンシヤン……。

その鈴の音が鈍くなり、そしてぴたりと停止する。舞ひ狂ふ雪に包まれて、橇犬は前方の目標を失なつてしまふのである。鞭をヒユツと音を立てると、再びシヤンシヤンシヤンと鈴は鳴りはじめる。その鈴の音は、舞ひ上り舞ひ下り渦を卷いては流れ、或は飛びすがつて來る十重二十重の純白のカアテンの中で、右へ行き左へ走り、又立ち停つてはまた走つてゐた。

「サムロツオ、すみません。私は何んだか滅茶滅茶の事をやりたい氣持だつたの、だから此のまゝ谷底へ落ちて死んだつて後悔はしないわ……。だけど、あなたを卷添へにしてゐることを忘れてゐたの……」

「私は……私はいいのです」

サムロツオは眼に掩ひかぶさつた雪粉を拂ふ事も出來ずに「でも、お孃さんはいけません。あなたのやうないい人が、死んでもいいなんて……、私はどんな事があつてもお孃さんを助ける」

「私のわがままな氣持からだのに、それでもですか」

「我がままでもいいです……」

橇が坂を昇り切つた。ふつと風が途切れてその向ふに風あたりの弱い盆地があつた。

「あツ、お孃さん……」

鈴がなだらかな響をもつて坂を下つてゆく

「此處です……、此の土地です、お母樣のゐらつしやる所は……」

もう日暮れに近くなつてゐた。

菊はその度にちがふ來訪者を案内して來るサムロツオを笑つた。だが、流石にこの吹雪の中を歸れとは言ひかねて、典子にも、今夜は泊まつて行けと言ひ、サムロツオにも蒲團はないが爐の傍でごろ寢をする氣ならと泊る事をすすめた。結局菊の良人だと言ふ年老いた男が氣を利かせてくれて、彼とサムロツオとが半町ばかり離れた隣家へ泊りに行き、典子と菊の爲に二人だけの一晩を作つてくれることになつた。人の好い氣の弱さうな老人だつた。

「親子づれの熊が食物を漁りに出て來るでなあ、よく戸締りをせんと危ないぞ」

と、彼は晩飯が濟むと、菊と典子に優しい注意を殘し、サムロツオを誘なつて去つて行つた。

夜が更けて風はいくらか弱まつたが雪は降りつづけた。風が止んだ代りには寒さがぐつと加はつて來た。

背筋をまるめて、爐の中へ次から次と薪を入れる菊の姿に、典子は幼ない日の甘い感傷を感じてゐたが、しかし彼女には、母と斯うした落ついた姿で對座したり、言葉をかけて貰つた記憶はなく、お

ぼろげに覺えてゐるのは、菊と傳右衞門とが彼等のささやかな會社のことで口汚なく罵しり合つてゐる姿ばかりである。

「韮崎は嫁に行くなと言ふのだねお前に……フン、心細いのだよ」

菊は憎々し氣に言つた。

彼女と二人になると、典子は……、斯うしてゐると永い間親子が別々に暮らしてゐたやうな氣がしませんわね……と、母の乳房をまさぐる甘つたれた言ひ方をしたのだが、菊のやうな性格の女にはそれをうけ入れる感情はないのか、私の苦勞はお前なんかには判らないよ。私は人の助けなんか借りなくてもどんどん一人でやれる女なんだからね、ほんとに、別になつてからの私の苦勞を見せてやりたかつたね……と、自分の言ひたい事だけを言ひ、そして傳右衞門の惡口を言ふのだつた。

「お父樣は、今のお母樣がすすめてゐる緣談なのでお氣に入らないのです」

「澄子つて女とは夫婦仲が惡いんだね」

ハツハツハツと大口をあいて笑つた。緣日の露店のお内儀さんが仲間同志で素情の惡い世間話をしてゐる時の顏だつた。何年か前の年の暮の街で俊政と二人でゐる彼女と出逢つた時の、典子の印象は正しかつたのである。これが、今迄のいきさつはたとへどうであらうとも、園井家へ嫁いで行くまでにはせめて一度は顏を見てゆきたいと願つた。自分の生みの親の眞の姿なのであらうかと、典子は彼

政の下宿でうけた悲しさとは別な意味の幻滅の悲しさを感じた。

自分といふたつた一個の人間だけを中心にして歡こびも悲しみも割り出してゆく菊といふ女が此處には居る。彼女の憎惡に調子を合はせて、傳右衞門を罵しり、淺子夫人を罵しれば彼女は滿足して自分を愛してくれるのかも知れない。或はさういふ方法で自然に彼女の心を柔らげて行く上手なやり方もあるのかも知れない。だが……、典子は父の性格を嫌つてはゐても愛してはゐるのだ。淺子夫人の冷嚴さを憎んではゐても同情してゐるのだ。生みの母の同情を得る爲に、まだそれだけの爲に彼等の惡口を言ふ氣にはなれない。その本人達の前でこそ常に反撥の態度をもつて接してゐるはゐるけれど……。

典子の考へて來た母の姿が此處にはなかつた。

薪がパチパチとはぜながら赤い炎をあげてゐる。典子はそこへ手をかざしながら、煙がしみて眼を痛くした。

「煙いのね……」と、彼女は眼に涙を浮べた。

「なあに、韮崎の昔の暮らしもどんなだつたんだよ、今ぢや大きな顏をしてるさうだがね」

「此間お兄樣が此處へゐらしたんですつてね」

典子は話題を轉じて「お兄樣、札幌の屋敷へ訪ねてゐらしたんですよ」

「俊政がかい」

「ええ……、ほんとに久しぶりで」

「どうして? 俊政はお前達と一緒に居るのぢやないのかい」

「まあ……。お母樣は思ひちがひしてゐらつしやいますのね、その時はお父樣もゐらしたんですけど、お兄樣は逢はずにお歸りになりましたわ」

「逢はずにね……」

菊は突然……、アツハツハツと大口をあいて笑つて

「賴まれて來たね」

「賴まれましたの……」

「さうかい……、お前は正直でいいよ。俊政が貧乏が厭になつて、私を捨てて韮崎へおべつかをつかつて歸つて行つたのを私はちやんと知つてるのだからね」

「いいえ……、お兄樣は」

「いいんだよ、そんなに眞面目な顏をしなくつたつて……、私は誰が何んと言つたつて此の土地は立ち退かないんだからね」

「でもお母樣、此處はアイヌの人達が引つ越して來る所なのですのよ、お母樣が移る場所はお兄樣

が會社にかけあつて……」

「會社にかけあつてかい、ハッハッハッお可笑しいねえ。ハッハッ」

「お母樣……」

典子は強くさへぎつて「お兄樣が可哀想です、お兄はお父樣とは何んの關係もないのです。……私はお兄樣は嫌ひ、だけど……お兄樣はお母樣を愛してゐらつしやいますよ。そのお兄樣をどうしてお母樣は信じて上げられないのですか」

「典子ッ……」

激しく、菊が何か言はうとする言葉をさへぎつて

「私はお母樣の仰有る通りに……、また兄樣の仰有るやうに、韮崎家の豊かな生活が好きな愚かな娘かも知れません。きつとさうだと存知ます。でもお兄樣は、お母樣がたとへどんな方であらうともお母樣と一緒に暮したい。お母樣が好きだと……、たとへば踏まれても蹴られても母犬にじやれついて行く小犬みたいな氣持のだと、御自分でも仰有つてゐました。その氣持は私にだつて……、けれど私には……」

「典子ッ……。お前。私に意見をするのかい、子供が親に向つて意見をするのか」

「いえ、お母樣……、お母樣は御自分で御自分の味方を寄せつけまいとしてゐらつしやるのです」

「放つといておくれ、私は誰の世話にもならないんだから……」

「お母様……」

典子は相手が肉親であらうと他人であらうと、自分以外の人間の前では決して涙を見せない氣の强い娘である。母と斯うして爭いながらも、決して世の常の娘のやうに涙を流しはしなかつた。彼女は涙を流さずに心で泣く……、札幌の彼女の屋敷の應接間で俊政と爭ひ、そして爭つたまま別れた時にも彼女は泣いてゐた。彼女は自分の心の何處かにひそむ頑くななものを悲しいと思ひながらも俊政に憎くまれ口をきき、そして同時に彼を氣の毒だと思つてゐた。だからこそ、何時嫁いで行くのだか判りもしない結婚を口實にして、別れの挨拶に母を訪れ、そして今夜はどんな事があつても俊政の爲に母を說きふせるつもりだつたのだ。けれど菊は嚴文高になつて俊政を罵しり、父を典子を罵倒した。何故に斯くまでも人間が人間を憎むのか、何故にこの母は斯くまでにひねくれてしまつたのか、父がこの母を斯うしてしまつたのか、それとも自分がさうさせたのか、或はそれが彼女自身の性格なのか

典子は安息のねぐらを求めてさまよつて飛ぶ渡り鳥のやうに、父の胸によりすがつては事業に忙がしい彼に無視され、淺子夫人の心に手をさしのべては誤解され、俊政に近づいては拂ひのけられ、今また菊の乳房に幼なき日の甘い夢を求めて幻滅を感じた。園井克己は典子の犧牲に於いて彼等の新家庭を營まうと手をさしのべてはくれたが、彼と典子の新夫婦二人が揃つて、彼の親達の自我のはびこ

つてゐる古い家庭の中で辛抱しなければ結婚生活といふものは出來ないものなのか。
彼處にも此處にも。あちらにもこちらにも……勝氣で理想家で、その實は哀れな普通の娘でしかない典子の周圍には……因習と自我の交錯する高い垣根が築かれ、彼女の心の行く手をはばんでゐた。
彼女は「お母さま」と叫んで菊の心を說き伏せやうとした。だが、さて何を言へばいいのか……、ためらつてゐる彼女に向つて菊は浴びせかけて來た。
「典子……、何んてことをお前は言ふのだい。私はね、瘦せても枯れてもあんたの親なんだよ。親に向つて何んだいそれは……」
はつしと爐端を叩く薪の先から火の粉が散つた。
「あツ……」急いで膝の上に飛んだのを拂ひ落さうとして、まだ煙の立つてゐる燃えかすの熱さに慌てて指を耳たぼにあてた時……。
誰かが堀立小舍の表戶にヅシンと身體を打ちつけたやうな音がして、屋根の雪がザサツと戶外に落ちた氣配がした。
瞬間……、菊も典子も顏を見合はせた。
北邊蝦夷の地の雪の夜更けの寂しさ。その底冷えのする寒さを背中に浴びながら爐端をはさんで、夜を徹して爭ふ母と娘の愛情の相剋を室內において、戶外で起きた物音には何かしら無氣味なものが

あつた。

音はふたたび起つた。今度は小舍の羽目板の外部にあたる所だつた。バリバリツとけだものの爪が板をひつかく音だつた。

「熊だよ」

菊は恐怖の聲をあげた。

熊が來た。食物を漁りに出て來るからといふ注意を菊の良人は殘して行つたが、彼にしてもまさか留守の間の彼自身の小舍をそれが襲ふとは考へなかつたであらう。

救いを呼ぶにしては隣家は遠く、窓を開けば熊は其處から襲ひかかつて來る。

「典子……、誰か人間も居るやうだよ」

と、菊は蒼ざめた顔をしてゐる典子に言つた。典子だつて彼女の人生に絶望を感じてはゐる。だが北海道の果ての山岳の中で熊に食はれて死にたくはなかつた。

「誰かが居るのですか」

「たしかに誰か……、だけど、今時分外を歩いてる人が居る筈がないのだが……」

菊はおろおろと言つた。

火を見れば怖がるかも知れないと、あるだけの薪を爐の中へ放り込んだ。煙と火が渦を巻いて小舍

の中に立ち昇り、充滿した。

音は途絶えた。その代り何か叫んでゐる人の聲が聞えた。

「やつぱり……」と、菊が叫ぶ間もなく、ダーン……。

耳をつんざくやうな直ぐ間近での銃聲。そして少し間をおいて、前よりもやや遠のいたあたりでふたたび、ダーン……。

シーンとした靜けさが襲つて來た。

爐の中の薪のみが、すつかり燃えついて勢よく炎を上げてゐる。

ドンドンドン……。誰かが表戸を叩いた。

「儂だよ。儂だよ」

菊の良人だつた。

「どうしたんだ。何かあつたのかね。熊が出たらしいが」

菊が慌ただしく木戸の芯張棒をはずすと、老人は急いで小舍の中を見まはして。

「何んだ、あのアイヌ人は來てたんぢやないのか……。居ないのか……」

「いいえあんた……、女二人だものだから、熊が表の戸をばりばり引つかくし、どうしやうかと思つて」

菊が息をはずませると、

「ぢやあ、今の鐵砲はあのアイヌ人ぢやなかつたのかね……、あの男、昨日の宵の内から、熊が心配だからと言つて……こつちへ來てた筈だよ。……あつちへは泊らなかつたのだ。」

「いいえ、こつちへは來なかつたよ」

けげんな菊の言葉を聞いて、典子は急いで窓の引戸をあけた。

闇の夜の銀世界に雪は音もなく降りつづけてゐて、窓からサッと流れる灯影の中に純白の四角い雪景色を描き出した。

「あツ、サムロツオ……」

灯影の中に降る粉雪のずつと向ふに、雪達磨のやうに佇ずんでゐる一人の若者。サムロツオだつた。

「どうしたの？　サムロツオ……！」

彼は無言で雪を踏んで近づいて來た。

「あんたは昨夜から今まで何處にゐたんだね、こつちへは泊りには來なかつたさうだが」

菊の良人が聲をかけると

「昨夜、ニシパと一緒にあつちの小舍へ行く途中で、熊を見たのです。とりやあきつと夜中になる

とも一度出て來ると思つたんで……。お孃さんに若しもの事があつてはいかんと思つたから張番して居りました」

と、言ひながら窓の傍まで來たサムロッツォの衣服の腕はカギ裂きに引き裂かれ、そこへ降りつもつた雪が紅く血に染まつてゐた。

「あなたは怪我をしたのね」

「ええ」

サムロッツォは典子に答へて笑つた。

「あそこに立つて見張りをしてゐたら、身體が凍つて來て睡つてゐたらしいのです」

彼は典子の居るこの堀立小舍を守つて見張りをつゞけるうちに凍死しかけたのだつた。

「さうしたら、その間に熊はこの小舍の戶を毆つて破らうとしてゐたんです。その音で氣がつきまして。鐵砲を射つにももう間に合はんので、鐵砲で毆つたのだが、その爲に飛びかかられて……。もつと早やく氣がつけばよかつたんですが」

「傷はそこだけなの?」

「掌で毆り倒されましたが、厚着をしてゐたので骨は折れずに、その間に、夢中で一發射つたんです……。それでやつと逃げはじめたのでもう一發射つて……」

その話を聞いてゐる内にあんなに涙を見せない典子の眼に、きらきらと涙のしずくが浮んで來た。

「サムロツオ……、あんたはこの小舎を守る爲に、昨夜からずつと雪の中に立つて見張りをしてゐてくれたのね、私達は誰もあなたがさうしてゐることを知らなかつたのに……」

「……………」

「まあサムロツオ……、あなた雪を拂はなくては、まるで雪達磨さんみたいよ」

典子は眼に涙をためたまま、サムロツオの姿が滑稽だと腹をかかえて笑つた。笑つてゐる典子の胸の中を、彼女の今迄の人生の經驗の中で誰からも與へられたことのない不思議な感激がぐつと熱い塊まりとなつてつき上げて來た。

全くサムロツオの雪にまみれた姿は滑稽だ。だから典子でなくとも笑ひたくなる。彼女は笑つた。笑つてそして、その最後に

「サムロツオ……、すみません」

典子は窓際につつ立つた彼の手を押しいただいて、心をこめて言つた。そのサムロツオの手の甲に典子の頰を傳つて落ちる熱い涙がほろほろとかかつた。

3

翌日は晴天、

紺碧の空の下に擴がる純白の山岳の裾を縫つて橇の鈴がシャンシャンシャン……、氣持よく走つた。

典子はサムロツオの鳴らす鞭の音を快よく聞きながら、ショウルの中に顎を埋めその上から毛布を深くかぶせて、今別れて來たばかりの母の事を考へてゐた。

あんな寂しい恐ろしい處によく辛抱して生きてゐられる。その忍耐と辛苦に打ち勝つ氣力こそが、あの母の厭な性格を助長してもゐるのだが、あの寂しい恐ろしい開墾地の中から、あの年齡の年老いた者同志が助け合つて立ち上らうとする精神力は、生きて行く爲のつぴきならない力に追ひ立てられてゐるのにもせよ……、やつぱり偉らい。

……と、典子は、彼女の實母の頑固に歪んだ性格を嫌ひながらも、その反面で尊敬の念を抱いてゐた。

結局は誰もが一人一人で生きて行く爲の戰ひをやらなくてはならないのかも知れない。だからそれぞれが各個に已れを守る爲の自我の殼の中に閉ぢこもつてゐる。一人の人間にはそれぞれ美點もあれば缺點もある。根ツからの善人もゐない代りに、芯底からの惡人もゐない。つまりは自分を守り已れを主張するだけにしか心を使はない人間が、他人から厭がられる人間なのであつて、自己を守る代り

には他人の生存に必要な他人の主張にも快よく席をゆずる人間が、人に愛される人間なのだ。
典子は彼女の周圍にはりめぐらされた。彼女の肉親や婚約者の家族たちの、それぞれの自我の高い垣根に行く手をはばまれて、はじめて一つの人生の敎訓を得たのだつた。
けれど……。敎訓は所詮は敎訓であつて、典子の心の寄る邊のない悲しみを慰さめてくれるようすがにはならなかつた。
快晴の雪景色の中を走る橇犬たちは、昨日の難航にひきかへて今日のすがすがしさにともすれば仲間同志でじやれ合つて、速度を落さうとするので、サムロツオの鞭は忙がしく彼等の頭上で空をきつては音を立ててゐた。
サムロツオ……。彼が居なかつたら、母に逢ふことが出來たかどうか。彼のまごころがなかつたら今日斯うして札幌への雪道を橇に乘つて走つてゐたかどうか。
「ねえ、サムロツオ……。大變でせう」
「え？　何がですか」
「今日は犬たちが嬉しさうで、ふざけてばかりゐて」
サムロツオは笑つて
「仕樣がないんですよ。昨日はくんくん泣きながら走つてゐましたけど……」

「ほんとうに昨日は犬も可哀想だつたわね」

「全くです……」

「でも、おかげで母にも逢へたわ」

「ようございました」

彼は昨夜の典子と母との對話を知らなかつた。佼政の時にはあんなに猛り立つてゐたあの年老いた人が、昨日はどうしてあのやうに何事なく、訪ねて來た人を迎へそして送りだしたのか、それが不思議だとは思つてゐたが。

「東京へはすぐお歸りですか」

「東京へ？」

「あの方はお迎ひにはおいでにならないのですか」

「………」

「どうかお幸はせにお暮らし下さい」

「サムロツオ……、あなたは昨日言つたわね、私に……、忘れませんつて」

「………」

彼の腕には、今朝がた典子が傷の手當をしてやり、そして卷いてやつた白い布が、破れたシャラン

べの下でふくれ上つてゐた。

「ほんとに親切にしていたゞいて有難うございました。御孃さん、お幸はせにお暮らし下さい」

彼はまつ直ぐ雪の道をみつめ、橇犬たちの身體につながる手綱を握りしめ、物悲しい表情をしてゐた。彼は泣いてゐるのかも知れなかつた。

「サムロツオ……」と、典子は胸の中にせき上げてくる激情を押さへつけながら「あなたは私が好きなのね」

橇は凍てついた雪の上を搖れながら走りつづける。

サムロツオは答へなかつた。だが、彼の背中が、肩が、ほとばしり出やうとする熱情を押さへつけるのに苦しんでもだへてゐる。

「サムロツオ……、私もあなたをあなたを……、愛してゐる……」

シヤンシヤンシヤン……と、鳴りつゞける鈴の音が急に速度を鈍らせ、ぴたりと停止した。

ふりかへつて、何か言はうとして言へずに唇を慄はせてゐるサムロツオに

「停めないで……、橇を走らせて……、早やく、早やく……、うんと早やく走らせて」

彼はふたたび前方に身體を向け、ヒユツ……鞭をふつた。

シヤンシヤンシヤンシヤンシヤン……、橇が走る。

「ねえ、サムロツオ……、何時か二人で馬を走らせてゐて、熊の出た所があつたわね。綺麗な流れがあつて、岸邊には鈴蘭が咲いてゐて、リラの花が紫色に匂つてゐた所……、あつたわね」

「……え？　ええ、あ、ありました」

「春になつたら、また去年のやうにあそこへ連れて行つてくれる？」

「……お嬢さんは、東京へは歸らないのですか、お嫁には……」

慌ただしいサムロツオの言葉には答へず

「ねえ、サムロツオ……、雪は何時解けるの？　春は何時來るの？　今年もまた、あのリラの花がライラツクの花が……咲くかしら……」

鞭が鳴る。十匹の橇犬の四十の足がめまぐるしく歩を運ぶ。橇は走りつづける。その雪の路の下には、やがて春になれば芽をふく鈴蘭が、花を咲かせる鈴蘭が、冬去り春來る日を待つて眠つてゐるのだ。

—

花をしとねに　寄り添うて
娘は歌ふ　愛の歌
霞にけむる　せせらぎの

—

流れはたとへ　別れても
「リラの花咲く　里で逢ふ
春は何時くるのか。」

悲しき人

1

ふたたび春が來た。

傳右衞門も典子もひと冬を北海道で送つてしまつた。

四月から再開された鐵道工事は八月には完成する豫定だと言ふ。

部落(コタン)のアイヌ達が、賃銀の貰へる仕事から離れるのはその時である。そして彼等は部落(コタン)を引き拂つて山岳(ヌプリ)の向ふの盆地へ移住しなければならない。同時にそれは、その開墾地にゐる菊といふ韮崎の先妻が、彼女の今の良人と共に、次の土地へ移住して行かなければならない時期である。菊は移民會社である北海道開發から提供されたその土地が地味のよく肥えた所であると知つたので、追はれる事には不平を鳴らしたが、しかし納得した。アイヌ達もやがては彼等の移住地で、今度こそ本氣になつて農耕技術を覺えるであらう。それ等のすべての運びは、松坂俊政と韮崎の代理人西村要助との間の、根氣強い折渉によつて行なはれたのである。しかし。俊政は遂に傳右衞門には逢はうとはしなかつた。彼も寂しく、傳右衞門も寂しく、菊は最も寂しい人間かも知れない。だが、彼等の各自が已れの意地

や我儘を捨てないかぎり、その寂しさは消えはしないのだ。しかしその反面に彼等のそれぞれが各自の仕事の樂しさを持つてゐたから、その樂しさを誇る氣持が、相手に妥協する氣の弱さを許してはくれず、寂しいのを我慢して各自の仕事に沒頭してゐるのかも知れなかつた。

それらの人間共の總ての惱みや悲しみを超越して、鐵道工事は今日も明日も明後日も、日を經るにしたがつて、山を越え谷を涉つて奥地へ向つて步を進めてゐた。

今は北海道中に、「アイヌ族の友達」として名を知られ、内地人のいはれなき民族的な偏見と常に鬪かつてゐる松坂俊政の許へは、一月にも二月にも三月にも、この四月にも、無名の人からの金錢の寄附が續けられてゐた。彼は札幌の新聞社に賴んでその人の誰であるかを調べて貰つたが、徒勞に終つてしまつた。

そして、明治三十五年の五月、春のある日の夕まぐれ……。

去年の春と同じ場所の同じ樹に、黃色い小さな花が、微風の中で黃色い花粉を霧のやうに降らせ、その隣りのライラックの花の紫が、息づまるやうな蜜の匂ひをそのあたりに漂よはせてゐた。そして谿流のせせらぎの岸邊には鈴蘭が花のしとねを敷いてゐた。

「サムロツオ……、どうしてあなたは泣くの？」

「……………」

典子は花粉の落ちる樹の根元に坐つて、芝生の上に膝小僧をかかえて涙を浮べてゐる相手に激しい言葉を與へた。

「酋長やお年寄たちに叱られたのが悲しいの？」

「叱られた事は悲しくはないです。しかし……」

典子と彼とが二人きりでゐる姿をしばしばアイヌ部落の者達は見て。二人が何を考へてゐるかを知つてゐた。

部落の掟を破るもの……。

酋長や年寄達は、サムロツオの相手が典子であると知り、かつての松坂俊政とマカリナの關係の時のやうに當事者に遠慮をする必要がなかつたので、彼を嚴しく叱責した。

部落の家長の全員が出席した廣場のまんなかで、マカリナも見てゐる前で、彼は酋長の裁きをうけたのである。

部落の爲に、かつては東京までも行つて、部落の平和を闘ひとつて來たサムロツオへのそれが報恩のしるしなのであらうか。

「他の部落(コタン)は知らず、僕の部落(コタン)では絶對に異民族との結婚は許さぬ」

酋長はさうも叫んだ。

マカリナは泣いてゐた。兄の爲に、そして、かつての日の彼女自身の心の傷手の原因が、絶對不當なものではなかつたといふ主張をあくまでも通す爲に……、彼女は酋長や年寄達に反抗して兄をかばつた。年寄達は泣き叫ぶマカリナを默らせやうとするし、酋長は

「議論（チャランケ）は娘（メノコ）には許されては居らん」

と言つて、マカリナを叱りつけた。だが、彼女の場合には相手の松坂俊政が部落の平和を破るまいと氣を使つて、彼等の悲しい戀を諦めてしまつたので、自然にマカリナは……不本意にも部落の掟を守つたので……それ程激しい反抗を試みたのだが、部落を追ひ出されずに濟んだのである。しかし、サムロツオは今にしてその戀を諦めない限り、部落を追ひ出すと宣言された。

サムロツオは彼の種族のその頑迷さが口惜しく、腹立たしかつたのである。

典子の場合も彼女の戀を人に知られてゐるのは同じだつた。鐵道の現場監督たちの噂をききつけた西村が慌ただしく傳右衛門に報告したのだが、彼は「馬鹿な……」と一笑に附してゐた。伯爵の息子にさへいい顏を見せないあの高慢ちきな典子がアイヌの青年と戀をするなぞとは……と、傳右衛門は

「西村はお前、夢でも見てゐるのか」とげらげら笑つた程だつた。

「つまりね、サムロツオ……、あなたは部落の人達のこしらへた昔からの枠からはみ出した人なのよ。その内にはきつと苔が生えて腐つてしまふ木の枠なのだけれど……。さうだとは思はない。さう

言ふ人だからこそ、皆がじつとしてゐる時に東京まで行つて内地の人と喧嘩をしたり、部落で新らしい事をやらうとしたりする。……でも、部落の人を怒つてはいけないわ」

「……」

「私もその内には誰かに叱られるかも知れない。私が正しいか、その人たちが正しいか、それは私にも判らない……。けれど、私もまた、私のまはりを圍む、古い枠の中から外へ押し出されてしまつてゐる人間なのだから……、その私と、私と同じやうな立場のあなたとが、若しその爲に却つて幸福になれるやうなら……、誰をも恨らむ必要も怒る必要もないわ、默つて幸福になればいいの……、さうだとは思はない」

「私にはお孃さんと一緒に居る時には、あの山岳（ヌプリ）の上の空が、何時もよりもずつと廣くて、何時もよりもずつと澄み切つてゐる。判るのはそれだけです」

「サムロツオは鐵砲を射つて狩をしたり、河から鮭をとつたりは出來るわね、でもその他に、お百姓さんも出來る？　やる氣がある？」

「お孃さん……。私は部落で一番先に、內地人（シヤモ）と同じやうに米を作ることを覺えやうと言ひ出した人間ですよ」

「さう……」

「何故そんな事を……？」

「私もお百姓をやるわ……、既に他の人がお米を作つてゐる土地へ行つてではなく、樹を伐り倒し、木の根を掘り起こさなければ何も出來ないやうな土地へ行つて……」

典子の體内には、傳右衞門の傲岸不屈な血が流れ、菊のふてぶてしい鬪爭心がうけつがれてゐる。典子自身は其處まで自分を省みてゐる豫融を持たず、彼女自身は父母のその性格を嫌つてはゐたのだが……。

彼女は冬の雪道を走る橇の一日以來、いくたびかサムロツオに逢ふたびに、彼と共に築き上げる開墾地の夢を描きながら、そしてそのたびにためらうつて今迄言へずに居たのを、去年と同じライラツクの花の香りの中で、そのむせつぽい匂ひに胸をつまらせながらはじめて口にしたのだつた。

「お孃さん、あなたはそんな事を言つて、後で悲しくはならないのですか」

「サムロツオ……、あなたは部落の掟がやつぱり正しいと思ふ人なの？」

「………」

「………」

「お孃さん」

「典子と、私の名を呼んで下さい」

「典子さん……、私は鐵砲も射てる、鮭もとれる。力は强い。樹も伐り倒せる。木の根も堀起こせる。百姓も出來る」

サムロツオが叫んだ瞬間、ライラツクの花の蔭から一羽の小鳥が彼の肩をサツとかすめて飛んだ。

「あツ……」

二人の眼は同時に、次の木にとまつた鳥の姿を追つた。サムロツオは身を飜へして鳥を追つた。鳥はその次の花をかすめて鈴蘭の花の蔭に下り立つた。足音をしのばせて近づいたサムロツオの左の手が小鳥の尻尾を押さへると見せて、ぱたぱたと羽ばたく小鳥の進路を右手がさへぎり、面喰つて飛躍しやうとする羽を左手が摑んだ。

「ほら、小鳥だつてとれる……」

「まあ、サムロツオ……」

二人の生活に時たまこんな餘興が入るのだとしたら、どんなにうるほひのある暮らしが出來るだらう。

典子は走りよつて

「可愛い小鳥……、見せて」

と、大事に兩手でうけとつた。

「もういいでせう……。唯こんなことも出來るといふことを見せて上げただけです。逃がしてやりませう」

「待つて、もう少し……、だつて可愛い眼をきよろきよろさせてるんですもの……」

小鳥は怖びえたやうに、典子の掌のなかで身ぶるいをして、その柔らかい羽の溫かみが快よく手につたはつて來た。

「もういいでせう……、ほら、そんなに强く持つと死んでしまふ」

「もう少し……」

「可哀さうだから……」

「駄目々々……」

小鳥をとらうと手をのばすサムロツオを逃れて、典子は谿流に沿つてクローバーの芝生を走つた。

「典子さん……」

サムロツオが追ふと典子はまたも走り去る。

「典子さん、早やく逃がしてやらないと」

「大丈夫よ、何んて可愛いい小鳥……」

典子は走る。

谿流を少し昇るとそれは右へ折れ、其處には崖の上から斜めに落ちる流れの急湍があつた。流れは其處で渦を卷き、轟々としぶきを上げる水煙の上に、名も知れぬ樹木の赤い花が咲いてゐた。

「典子さん、駄目だ、離してやらなくては……」

サムロツオが肩へ手をかけると

「ほら……」

典子の手が一瞬に開かれて、暫くとまどつた小鳥はやがて方向を見定めて、流れを越えて森の中へ飛び去つた。その鳥の姿を追ふ二人の視線がふと見合はされて

「……」

サムロツオの手が典子の肩を引きよせ、彼の胸によりそつた典子のふくよかな兩手の指がそこにやさしく重ねられた。

水は渦を卷き、絶える事のない流れの音だけがあらゆる外界の物音から、この一瞬の幸福に生きる二人を此處にへだててゐた。

だが……。

急湍のその水煙を立てる物音は、同時に、丁度その時、典子を訪ねて東京から來た人の、ついそこまで來た足音をも彼等の耳に屆かせなかつた。

長くそして或は短かい、熱情と愛情の交錯した一瞬が終つて、典子がふと其處へ眼をうつした時
「あツ……」
典子は其處に、クローバーの綠のしとねを踏んで虛脫したやうに佇ずんでゐる克己の姿を見た。
克己も、典子も、サムロツオも、三人共一言も言葉を交はさずに、長い間默つてゐた。
丁度一年前、今典子とサムロツォの馬がつないであるあの谿流の岸邊で、そしてその後から來た克己の乘馬も手綱をつないである花の岸邊で、この三人は同じやうに顏を合はせたのだつた。
あの時と、人の顏ぶれは同じだつたが、各々の立場と、各々の氣持は餘りにも激しい變化を來たしてゐた。
やがて……、一番最初に克己がうなだれて、さつきの岸邊へ向つて步き出した。典子とサムロツオがその後へつゞいた。やはり無言で。
さつきと同じやうに微風が黃色い花の花粉を降らせ、ライラツクの紫が强い蜜の匂ひをたゞよはせてゐたが、しかし、典子とサムロツオの運命の轉期はすでにすぎ去つてゐた。
三人は其處でも長い時間、クローバーの綠のしとねに腰を下ろし、沈默をつゞけてゐたが、その內にやつと克己は氣持が落ちついたらしく、
「御許し下さい。唯ぼんやりしてしまつて、あそこを立ち去らなくてはいけないといふことに氣が

つかなかつたのです」

「………」

「此處に馬がつないであつたので、去年と同じやうな氣持で、お探ししたのです」

典子はやつと顏を上げて

「何時東京をお發ちになりましたの……」

「昨日札幌へ着きました。お屋敷で、お父さまもあなたも現場へお行きになつてゐると伺つたので……」現場の事務所は去年よりもずつと遙かの遠くへ進んで行つてるのですね」

彼は其處で典子の姿を見る事が出來ず、若しやと思つて、典子がしきりに賞めてゐた此の岸邊の景色の中に、彼女の姿を探してやつて來たのだつた。

「お手紙も出さずにすみません」

典子は詫びた。

「御歸京になるかと思つて待ちましたけれど、十一月以來はお手紙も來ず、御歸京にもならず……しかし却つて、それが私に勇氣をつけたのでした。しかし、その勇氣は今となつて無駄となりましたけれど……」

「それは？」

克已は寂しく笑つて「私は背水の陣を敷いたのです。最も頑强だつた母に向つて、僕と典子さんの結婚生活の爲の……」

と、彼はサムロッツォに少し氣兼ねをしながら「新生活を營む爲の別居を許して下さらなければ、僕はこの家を出ます。……と、さう言つたのです。母は結局愚痴を言ひながらも、父にも說かれて、我々が、我々若夫婦だけの生活を別に持つ事を許してくれたのです。それを土產に飛び立つ思ひで……お笑ひ下さい……、私はやつて來ました」

克已はほつと溜息をついて

「前もつてお知らせしなかつたのは、突然の方がもつと喜こんでいただけるだらうと思つたからでした」

「……………」

彼は典子の望んでゐたあらゆる條件をきき入れて、彼女を妻に迎へるために訪れて來たのである。

これが運命といふものなのであらうか、それを求めた時にはやつて來なくて、その必要がなくなつてから幸福はやつて來る。

だが、典子の氣持は旣に定まつてゐた。

「では、私は失禮いたします」

一言の恨らみも、一言の怒りの言葉も述べずに、静かに克己が立ち去らうとした時
「私も御一緒に參ります」
と、典子は立ち上つて
「サムロツオ……、氣にしないでね、今夜、お父樣に何もかも話して許していただくつもりですから」
言葉もなく蒼ざめてゐる彼に、力づけるやうに言つた。
馬は二つの馬首を並べて走り去つた。
花は匂ひ、花粉は音もなく降る。
サムロツオは克己の悲哀を察し、彼自身の立場のどうにもならない困難さを考へた。
——あの人は氣の毒だ。惡い人ではないのに。
だが、彼は典子の愛情を信じてゐた。

2

激怒する傳右衞門の氣持の中には、部落(コタン)の酋長の言ふ古い掟と同じやうな偏見があつた。
「何を好きこのんで……」

と、言ふのが、彼の口から幾度もほとばしり出た言葉であつた。だが、典子は屈しなかつた。父親ゆずりの傲岸な態度と、不屈の鬪志が彼の娘の體内で躍動してそして、その父親の激怒を受けつけやうともしなかつたのだ。或は菊のふてぶてしい鬪爭心が典子の體内から、傳右衞門に對して偶然の復讐を爲しとげてゐるのかも知れない。

滑稽な言ひ方をすれば、傳右衞門と菊の相戰ふ二人分の不屈の魂が、同時に典子の血管に流れて、その半分をしか持たない彼に今こそ挑みかかつて來たのだとも言へるのである。

克己は典子の言ひ分を是認してゐた。

「私が弱かつた事がいけないのです、自分の家の家風に禍されて、私自身を開け放つた空の下に出す事が出來なかつたばかりでなく、同じやうに典子さんをも、私の親達の犧牲に供しやうとしました。典子さんがそれを承知しなかつたのは當然なのです。……典子さんはこの御家庭の暗い生活を私の許へ來てまでもつゞけなければならないのかと」

「何が暗い……。儂の家の生活を君は……」

「明るいと仰有るのでせうか、失禮ながら、御自分の御孃さんに對しても恥のない生活だと仰有るのでせうか」

「君は、娘には弱いが、男に對しては强い人のやうだなあ、つまり、君のやうな男を鼻の下の長い

といふ……」

傳右衞門は下品な罵倒の言葉を、克己にまで八ツ當りに浴つて

「典子……、お前の願ひを許すわけにはいかんよ、何んといふ馬鹿氣た……」

三人は夜を徹して爭ひ、典子はその夜は一睡もしなかつた。

傳右衞門は怒鳴りまくつた揚句に、遂に典子を屈伏せしめた……と、信じて……翌朝は工事の現場へ出かけて行つた。彼の年齢から考へては割り出せない驚くべき精力だつた。彼は典子が最後には沈默してしまつたのを見て、父親の言葉に納得して娘は願ひを取り下げたのだと信じてゐるのである。子供と言ふものは、親が叱りつければ結局はその言葉通りになるものだといふ、世間の何處にもあるうかつな父親と同じ信念を持つ、彼もまた子供の親としてはごくつまらない男だつた。

傳右衞門が出かけた後、典子は疲れ切つた身體も寢室へ運んで、柔らかい蒲團の中へもぐつたが、身體は疲れてゐるのに頭だけが冴へて眠れなかつた。彼女の寢具は羽二重である。此の屋敷に居るからこんな肌ざはりのいい柔らかい蒲團に身體を横たへることが出來る。或はこのぜいたくな暮らしは克己と結婚した場合にもつゞけて行けるかも知れない。だが、サムロツオと結婚した場合はどうなるのだらう。貧しい人の普段の生活といふものはどんなものだらう。それらしい經驗はこの冬に山岳の向ふの薬の掘立小舍に泊まつた時に、その片鱗を見たきりである。自分にそれが耐へられるか。

空怖ろしい氣もするし、また、そんなに苦しいものではないやうな氣もする。

その内に彼女はとろとろと睡つてゐた。

その睡眠の中で夢を見た。

サムロツオが彼と同じアイヌ族の娘（メノコ）と、典子にかくれて戀をしてゐる場面である。場所は、彼女とサムロツオが唇を交はした谿流の急湍な所であつた。其處へ偶然にも往き合はせた典子は、恐ろしく汚ない破れた衣服を着て、手や足は百姓の泥いぢりで、ひびだらけになつてゐた。彼女は嫉妬に氣も狂ひさうになり、聲を擧げて泣いた。

……その我と我が聲に驚いて眼を覺ましたら、もうあたりは薄暗くなり、その日も暮れやうとしてゐた。

典子は夢によつて、彼女の心の中にも父や部落（コタン）の酋長を笑へない氣持が潜在してゐることを知つた。そしてまた、あの流れの急湍な所へあの時偶然にも來合はせた克己の悲痛な氣持を知つた。そしてややおぼろげに貧乏な生活の苦しさを想像することが出來た。

典子は暫らくの間、羽二重の蒲團の温みの中で考へ込んでゐて、それから起き上つて洗面所へ行き口を洗ぎ化粧を直して、そして茶の間へ行つた。

女中がゐたので

「克己さんは？」

と、聞くと

「西洋間においでになります」

「おやすみになつたのかしら……」

「はい、少しばかりおやすみの御様子で、やはりついさきがたお目覺めになりまして……」

「……、御食事は？」

「まだ御召上りにはなりません」

「さう……、では御一緒にいただきますから、支度をして下さい」

暫らくすると、食事の支度が出來たと言つて知らせて來たので、典子は食堂へ行つた。すると克己が先に來て待つてゐた。

「おやすみになれましたか」

「ええ……、何んだか夢をみまして……」

典子は微かに笑つた。

「夢を？」

「ええ……」

「疲れておいでになつたのですね、昔の人の言葉だと、夢は五臓六腑の疲れだとかつて……」

克已は明るく笑つた。典子の神經を焦ら立たせまいと氣を使ふ樣子が賴もしく、そして紳士らしく好もしかつた。

「私がサムロツオに捨てられかかつて、貧乏してゐて手も足もひび割れて泥んこになつてゐる夢でした」

流石に暗い顏をして言つた。

克已は答へる代りに、女中がよそつて出した御飯茶碗をうけて下におき、お汁の椀を手に持つて靜かに口にあてた。

それから暫らくたつてから

「よく御考へになりましたか、私は典子さんが、初めのお氣持に戻つて下さればこんな嬉しいことはありません。しかし、それを强いやうとは思ひませんが……」

「……」

典子は無言で箸を運んだ。明らかに典子の睡眠の足りない顏には、激しい動搖の色が浮んでゐた。

克已の彼女を幸福にしてくれやうとする氣持に對しての申し譯のなさもその中にはふくまれてゐた。

「もう一日、よく御考へになつては如何でせうか」

優越した立場から克己は言つて

「お父樣が、八月の開通式まで遊んで行けと仰有います。東京へは典子さんの事を特に知らせずおけば、父や母はこちらであなたと共に結婚の準備をしてゐるのだと思ふでせうから……」

典子の眼から……生れてから他人の前で流す二度目の涙がしたたり落ちた。

傳右衞門はおそく歸つて來たが、二人の間に斯んな會話が交はされてゐた事は知らなかつた。

その夜、典子は晝間みた夢を、羽二重の蒲團の中でくりかへして思ひ出してみた。思ひ出してゐる內に睡つてしまつた。翌朝になつて眼が覺めて、昨夜は夢をみなかつたことに氣がついた。睡眠を充分にとつたこの朝は元氣を恢復してゐた。

傳右衞門が札幌市內にある會社の北海道支店へ出かけて行つた後で、典子は克己を探した。

彼は庭の築山のかげで洋書を讀んでゐた。表紙の橫文字を讀むと〝ロミオとジュリエット〟

克己が歐米行脚の時、英京ロンドンで購なつて來たシェクスピアの原書である。

彼と典子の戀がロミオとジュリエットほどに悲しいと言ふのか、それとも典子とサムロツオとの戀が、そのセクスピアの書いた戯曲ほどに悲しい結末に終るといふ暗示なのか、或は何の意識もなく彼の寂しい心を悲しい戀物語を讀むことによつて慰さめてゐたのか、彼は典子が行くとその洋書を何の銜ひもなくぱたりと閉ぢて傍においたので、その意中は計り知る術もなかつた。

「考へて來ました」

と、早速に典子は言つた。

此の庭にもライラックの花が咲いてゐた。

克己はふとその紫の小さい花の集まりに眼をとられて、ぱちぱちとその眼を悲し氣にしばたいた。

「思ふ通りの事を仰有つていただいて結構なのですよ」

彼にはサムロツオ程の粗朴な熱情もなくユウモラスな所もなく、あるのはただ外國の或る家庭に、一年間の勉學の期間、寄宿してゐる間に覺えた紳士らしい女性に對する謙讓な態度と、誠意とだけである。

「私、あの……」と、典子は少し口ごもつて「やつぱりサムロツオと運命を共にしたいと存知ます」

「………」

克己は思はず眼を伏せたが、少し間をおいて「結構だと思ひます」

と、決然として言つた。

「お力になれれば何かいたしたいと思ひます」

「私、昨夜も考へ今朝も考へました。昨日の晝間は夢を見て泣きましたけれど……。夢はどの樣にも解釋が出來ます。私が心からサムロツオを愛してゐれば、彼に捨てられることはないと信じます。

部落(コタン)の掟と同じやうなことを考へるのは私にまだまだ愛情が足りないからだと思ひます。手や足の指にひびが切れるのが何故悲しいでせう。お婆さんになれば誰だつてしなびて汚なくなつたり、冬になればひびを切らしますわね」

「典子さん……」

「申し譯がございません」

「何故詫びたりなさるのですか、私はあなたに詫びられることは何もないのですよ、私を慘めな立場にしないで下さい」

思ひもかけず克已は強い言落で言つた。

「私はサムロツオよりも、あなたに對してあなたの滿足の行く條件をさし出すのがおそかつたのだ。それだけなんだ。運命ぢやありませんか、早やければ私の方が勝つてゐたにちがひありません。私はさう信じてゐます。これは私の自惚れでせうか」

「自惚れではありませんわ……」

サムロツオを愛し、克已を愛し、そして二人が同じ條件の下に彼女の愛情を求めた時、遂にサムロツオとの信義に生きた典子は、心から克已の言葉を肯定した。

「だから……、だからです」と、克已は「私はあなたをも恨らまないし、サムロツオをも恨らまな

いのです。私は私でまた何時かは人間を愛し、人に愛される資格のある立派な人間なのです」

しかし、克巳の眼には、瞼にいつぱいたまつた涙が今にもこぼれんばかりにきらきらと搖れてゐた。

「許して下さい。醜體を見せて……、私は泣かないつもりだつた。やつぱり駄目でした。氣にしないで下さい」

「………」

典子は涙を見せまいとした。此處で彼女までが泣いては事態が尙一層混亂してしまふ。

克巳は急いで涙を拭ひ去つて

「しかし、私はあなたのさつきのお言葉を聞いて安心しましたよ。あなたならやれる。きつとやれる。私にはあなたの眞似は出來ないかも知れない。典子さん、あなたに私の缺點をお教へしませうか」

見上げる典子の顏に彼は微笑を送つて

「ほら、斯うしてのらくらと遊んでゐることが私の缺點なんです。私は伯爵の息子であつたり、金持の息子であつたりすることをちつとも恥じてはゐない。だが、働かないで食へる身分の者も世の中の爲には何かの働きをしなくてはいけないといふ事をね……。忘れてはゐないのだが、典子さんの傍に居たいばかりに、それが出來るものだから斯うしてゐる、……判るでせう」

ハツハツハツ……と、聲をあげて笑つた。

「サムロツォは働いてゐるから毎日はあなたとはお逢ひ出來ないでせう。あれが本當の人間の生活なのですよ」

「でも、そのサムロツォは八月になると、鐵道の仕事がなくなり、移住してゆく部落からも除外されて一人だけ他の土地へ行きますのよ」

「開通式と同時にですね」

「ええ……」

「お行きなさい。彼と一緒に……。但しそれまではお父樣には何も言はない方がいい。私はその頃まで滯在させていただきますから、その後でお父樣を納得させます」

「そんな事まで克己樣にお願ひしてもいいのでせうか」

「これがせめてもの、世の中の誰かの役に立つ働きではないでせうか……、お父樣にすれば飛んだ人間を引き留めたと、後でお思ひになるでせうがね」笑つた。

「きつと……、東京のお友達や貴婦人たちは、韮崎の高慢ちきな馬鹿娘があんなことをしたと嘲笑なさるでせうね」

「私が言ひ譯をして上げます。あなたに代つて……、さう言へば、去年の四月の、櫻の花の頃の舞踏會でも、これと同じやうなことを言つて典子さんをお慰さめしましたつけね……」

典子はその瞬間に、ハッと顔を上げて克己を見た。あの時の死ぬやうな恥かしさの中で、誰かがしみじみと自分を慰さめてくれたのを覺えてゐる。その人の胸に抱きすがりたい程の感謝の念を抱いた。けれど昂奮してゐた彼女はそれが誰だつたか顔を見るゆとりさへなかつた。

——あの時のやさしい紳士が克己だつたのか。

典子は遂に、兩手をついて、彼に禮を言はうとして、そのまゝ其處に泣きくずれてしまつた。

鐵道開通式

明治三十五年八月の或る晴れた日の空に、花火の煙が、パツパツパツと四ツ五ツ六ツ七ツ……、そしてややあつてポンポンポンと、その煙の開らく時の音が聞えて來る。

地上では新築落成した停車場の構内で、樂隊が盛んにマーチを吹奏してゐる。

北海道開拓鐵道株式會社の鐵道開通式……。

東京からこの開通式の列車に試乘する爲に態々渡道して來たのは大山大將、鐵道大臣、內務大臣、その他の貴賓達、珍らしく元の澤田北海道長官も、貴賓室と貼紙をしたペンキの香も新らしい一等待合室の隅に、幼友達の晴れの姿を見ようとして待ちかまへてゐた。

やがて時間が來ると、驛前の廣場に設けられた野外式場の、紅白の幕をはりめぐらした壇上から、廣場を埋めた群衆に向つて、總理大臣の祝辭を現在の北海道長官が代讀し、鐵道大臣、內務大臣、大山大將の順で祝辭が述べられ、最後に韮崎傳右衛門の社長としての演說が行なはれた。

花火が鳴り、演說が終ると樂隊がまたしても續けられた。その樂隊に送られて貴賓達は停車場のホ

ームへ入り、列車に乘り込んだ。

フロックコートの胸に花の徽章をつけた傳右衛門は子供のやうに燥やいで

「克巳君、見たかね……、あれが鐵道大臣だ。ほら、典子……、あれが大山さんだよ」

それは彼の努力に對して當然與へられて然るべき歡こびである。彼は有頂天になつて

「ほら、皆列車に乘り込んだぞ、儂の列車にね…… あの列車が今に動き出すのだ」

だが……、傳右衛門は彼の傍にあつて今日は常にも勝さる美くしさの典子が、この一時間か二時間の後には彼の手許から永遠に背き去るのを知らなかつた。

典子が今日は特に美くしく見えるのは、白粉を塗つた顏の皮膚が、短時間の後に迫まつた彼女の運命の大きな轉換に對して、激しく緊張し蒼ざめてゐるからであらう。

樂隊が驛のホームに移され、準備がととのふと、傳右衛門は左右に典子と克巳を從がへて、大臣達の乘つてゐる一等車に乘り込んだ。

それを合圖にベルが鳴り、驛長が右手を上げて、左手に持つた笛を鳴らした。

花火とそして樂隊……。列車は靜かにホームを辷り出した。

「仲々立派な汽車ぢやないか」

と、鐵道大臣に言はれると、傳右衛門は相巧をくずして

「そりやあ、韮崎の汽車でございますからなあ、アッハッハッ……」

「汽車もいいが、君の娘さんはなかなか美人だなあ」と、內務大臣は典子をみて機嫌よく「園井さんの息子さんのお嫁さんになるのかね」

「左樣……、克己君とは相愛の仲でね」

傳右衞門は澤田を指して

「澤田君の媒酌ですよ」

「うむ……、いい蔓をつかまへたね」

內務大臣は皮肉に笑つた。

列車は黑々とした煙を風に吹き散らさせながら、野を渡り、河を渡り、そしてあのマカリナの居る部落の中央を突つ切つて走つた。

部落では家財道具をまとめたアイヌ族の一隊が、彼等の移住地を目指して移動を開始してゐたが、その中にサムロツオは居なかつた。

丁度今頃。菊と彼女の良人はささやかな荷物を馬車に積んで、彼等の次の開墾地へ向つて出發してゐる頃かも知れない。

列車の窓から、大臣達に向つて傳右衞門は彼の工事の苦心談を語つてゐたが、ひよいと典子の方を

ふりむいて
「どうだ、あの谷川は綺麗だらう……。所が此處に掛つてゐる鐵橋には苦心したのだぞ」
餘りにも喜こんでゐる父の無邪氣な一面が、典子にとつては胸を責められる苦しさだつた。
「お父様が喜こんでゐらつしやるお顔を見ると、私までが嬉しくなります。今日みたいに……、何時でも元氣でゐて下さいましね、お父様」
「これこれ、何を涙を浮べてゐるのだ……、喜こんでくれるのか、儂の鐵道が出來たのを……。典子はいい奴だなあ……」
その傳右衛門の横顔を克己は痛まし氣に見凝めてゐた。この人だつて世間で言ふ程の惡い人ぢやあない。可哀想に、もう直ぐ、たつた一人ぼつちになつてしまふ。しかし、この人の娘にも幸福になる權利はあるのだ。彼女は今まで苦しんで惱んで來た。そしてこれから先も苦しんで苦しんでそしてその後に恐らくははじめて幸福を摑むのだ。世の中つて何んて悲しく出來てゐるんだらう。……克己はさう思つてゐた。
二時間ほどして列車は、山を三つばかり越えた所にある終驛に着いた。
此處でも樂隊。
機關車を後尾へ廻はしてもう一度二時間かかつて始發驛まで、社長も來賓も共々に引きかへす……。

暢氣な時代である。

復路の列車の中で傳右衞門はふと典子が居ないのに氣がついた。初めは父の會社の汽車を珍らしがつて他の客車へでも行つてゐるのかと氣にもしなかつた、行程の中ばをすぎてはじめて

「克已君、典子が居らんやうだが、どうしたんだらう」

「……」

胸が痛んだ。しかしと思つて勇を越して

「私に總ての罪を引きうけさせて下さい。……お孃さんはあの終驛から、サムロツオと一緒に、新らしい生活と、新らしい眞實の幸福を求める爲に、遠くへ行かれました」

傳右衞門は暫らくぽかんとした顏をしてゐたが、ややあつてから我を取り戻して

「おい克已君」

と、慌ただしく立ち上らうとした。

「韮崎さん、列車は進行中です。お客樣方もゐらつしやいます。慌てないで、典子さんを幸福にして上げて下さい。典子さんは或はその生活に失敗すれば歸つてゐらつしやるかも判りませんが……、しかし、私は成功を祈つてゐます。あなたの大きな悲しみとは比べものにならないかも知れません。けれど、私も自分の悲しみを耐えてゐるのです。……典子さんとサムロツオの、古い因習を破つた新

らしい愛情の生活が、立派に成功するやうに蔭乍ら祈つて上げて下さい。お願ひします……」

克己は傳右衞門がいく度も狼狽して立ち上らうとするその手をぐつとさ押へて、そして熱情をこめて言つた。傳右衞門の手の甲の上に彼は涙をこぼした。

「馬鹿な娘だ」

傳右衞門は一言だけ言つて、もう立ち上らうとはせず、ジツと眼をつぶつた。

列車が始發驛に着くと、本線の驛へ札幌驛からの鐵道電話がかかつてゐて、札幌の韮崎御殿が屋人の火の元の不始末から發火して、二時間ほどの間にすつかり燒け落ちてしまつたといふ知らせが入つた。

餘りにも悲痛な打擊だつた。

克己が慌てふためかうとするのを押さへて、今度は傳右衞門の方が落ちついてゐた。

「來賓達をびつくりさせちやあいかん。燃えてゐる間ならとにかく。もう燒け落ちてしまつたのだから……」

彼はちらと蒼ざめた表情を見せただけでさり氣ない談笑のうちに、來賓達と共に本線の列車に乘りかへた。

札幌へ倒着して、克己と二人で屋敷へ駈けつけて見ると、其處には何もかにもすつかり、白い灰に

なつてしまつた殘骸だけがあつた。傳右衞門は唇をひくひくとさせたばかりで……その後で咽喉をごくんと言はせて唾液をのみこんだ。

「なあに、もう一度こんなものは建てて見せてやる。しかし、これから見ると鐵道はいい。なあ克己君、線路は燒けんからなあ」

大口を開けて笑つた。

雇人達が彼の前に手をついて謝まると

「出來た事は仕方がない。儂はもう一度、これを建てるから、火事の方は二度とくりかへすな……」

深く叱らず

「併し、この後の仕事の書類が惜しかつた」と、彼が言ふと、

「いえ、書類は助かつて居ります」

「何、助かつてゐる？　誰が出してくれた」

「丁度、火事の最中の時刻に、函館から着いた汽車で奥樣がおいでになりました」

小間使がその後につづいて

「奥樣は驛から人力車で駈けつけておいでになるなり、旦那樣のお仕事の書類はと仰有つて……」

小間使や女中達は、申し譯ありませんと言つて、手をついて詫びた。何が申し譯ないのか？。

焼跡の消火の水に濡れそぼつた庭石に、一人の女が腰を下ろして、呆心狀態で兩手に、傳右衞門の書類の入つた鞄を抱えてゐた。その女の頭髮は火の中をくぐつたと見えて、無慘に半分ばかりも焼けちぢれてゐた。離婚が正式には成り立たないので、未だに傳右衞門の妻である淺子だつた。

傳右衞門はつかつかと彼女の傍へ行き、その無慘な姿をしばらく見つめてから、靜かに言つた。

「お前、火の中へ飛び込んで、この書類を助け出してくれたのか」

「……ええ、大事なものだと存知ましたから……」

「……淺子、典子は家出をしたよ。典子はお前も儂も嫌つとつたんだ。サムロツオといふ男と何處かへ行つた。なあに何んとかやるだらう」

「………」

「氣にせんがいい。氣の毒なのは克己君だ」

「私も……、私も惡い氣ではなかつたのです」

「誰だつて惡い氣ぢやないとも……。典子が居なくて寂しいが、しかし、儂や仕事をしとりやあそれでいい」

そしてもう一度……。

「お前、火の中から儂の仕事を助け出してくれたんだな」

その言葉に對して、良人を見上げる淺子夫人に
「有難う。……そんな事は口では言ふがなかなか出來ることぢやない。有難う」
傳右衞門は急いで拳で彼の眼から落ちやうとする涙を拭つた。
「お前、頭は大丈夫か……」と、淺子夫人の肩を抱き、頭を撫ぜさすつてやつた。
「儂もお前の言ふ通り、行儀よくする。怒らんでくれよ」

× ×

その頃。
サムロツォと典子は、二頭の馬首を並べて或る山脈の峠を越へやうとしてゐた。
「典子さん、ほら、あそこに光つてゐる、あの湖だよ。あの岸邊に家を建てるのだよ。道廳に言ふと、あそこなら唯で土地をくれる……」
「あそこならお百姓も出來るわね」
馬は前後に並んで坂を下りはじめた。
遙かの遠くに湖水がいぶし銀の鏡を光らせてゐる。
その上の高い空に、晝の月がほの白く浮んでゐた。美くしい女の眉毛のやうに細い三ケ月である。
明治三十五年のある日のことであつた。

—一九四七・一一・一八—

リラの花忘れじ

菊田一夫著

定價 ￥35.—

發行所
松竹株式會社出版部
東京都中央區新富町三ノ五
電話築地(55)2121-8
振替口座東京24434番

昭和22年6月20日印刷
昭和22年6月25日發行

發行者 東京都中央區新富町三ノ五 野口鶴吉

印刷者 東京都中央區新富町二ノ十九 花崎寛

印刷所 大東印刷株式會社 電話築地(55)〇二〇二番

THE LIBRARY OF THE UNIVERSITY OF CALIFORNIA LOS ANGELES

THE LIBRARY OF THE UNIVERSITY OF CALIFORNIA LOS ANGELES

Oriental
Lib.
PL
832
I46R5
J